

明石市

明石城跡Ⅲ

— 県立明石公園石垣都市災害復旧事業に伴う発掘調査報告書 —

2000年3月

兵庫県教育委員会

明石市

明 石 城 跡 Ⅲ

— 県立明石公園石垣都市災害復旧事業に伴う発掘調査報告書 —

例 言

1. 本書は、明石市明石公園1-27に所在する明石城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県立明石公園石垣都市災害復旧事業に先立つもので、兵庫県都市住宅部公園緑地課・兵庫県加古川土木事務所の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成7年度に全面調査、平成7・8年度に断面調査を実施した。なお、全面調査については、恢安西工業に作業委託を行った。
3. 整理作業は、平成10・11年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が同事務所にて実施した。なお、遺物写真については柳衣川に委託した。
4. 調査は明石城内に設置されている基準点を基に実施した。ただし、基準点は震災の影響を受けたため若干の誤差が存在している。
5. 標高は東京湾平均海水準を基準とした。ただし、基準点は震災の影響を受けたため若干の誤差が存在している。
6. 本書の執筆は渡辺昇、池田征弘が行い、編集は池田が行った。
7. 本書にかかる遺物・図面・写真などは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所魚住分館（明石市魚住町清水）に保管する。
8. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々の御援助・御指導・御教示を頂いた。記して深く感謝の意を表するものである。
稲原昭嘉、井上智代、柏木秀俊、小林純夫、田代孝、宮本博、北垣聰一郎、八巻興志男、山下俊郎

本文目次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経過	(渡辺昇・池田征弘) …… 1
第2節 発掘調査の経過	
1. 平成7年度の調査	(池田) …… 1
2. 平成8年度の調査	(渡辺) …… 2
第3節 整理作業の経過	(池田) …… 2
第2章 遺跡をとりまく環境	(池田) …… 3
第3章 遺構	
第1節 遺跡の概要	(池田) …… 5
第2節 本丸の調査	
1. 乾櫓	(池田) …… 5
2. 堀見門	(池田) …… 5
3. 本丸北面石垣	(池田) …… 5
4. 本丸南面石垣	(池田) …… 6
第3節 二の丸の調査	
1. 大の門	(池田) …… 6
2. 二の丸北面・西面石垣	(①池田 ②渡辺) …… 6
第4節 東の丸の調査	
1. 角の櫓	(①池田 ②渡辺) …… 7
2. 東の丸東面石垣	(①池田 ②渡辺) …… 8
3. 真の門	(池田) …… 8
4. 天の門	(池田) …… 8
第5節 東帯郭の調査	
1. 弁の櫓	(①池田 ②渡辺) …… 8
2. 東帯郭北面石垣	(渡辺) …… 9
3. 出の門	(池田) …… 9
4. 東帯郭東西面石垣	(①池田 ②渡辺) …… 9
第6節 稲荷郭の調査	
1. 正の櫓	(池田) …… 10
2. 稲荷郭西面石垣	(①池田 ②渡辺) …… 10
3. 稲荷郭南面石垣	(①池田 ②渡辺) …… 11
4. 万の門	(池田) …… 11

第7節 三の丸・北の丸の調査	
1. 太鼓門	(池田) ……12
2. 東不明門	(池田) ……12
2. 西不明門	(池田) ……12
4. 北の丸虎口	(池田) ……12
第4章 遺物	
第1節 瓦	(池田) ……14
第2節 その他の遺物	
1. 土器・陶磁器	(池田) ……27
2. 金属製品	(池田) ……27
3. 石遺物	(池田) ……27
第5章 まとめ	
第1節 遺構について	(池田) ……28
第2節 遺物について	(池田) ……29

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡分布図	4
第2図 軒丸瓦の型式(1)	14
第3図 軒丸瓦の型式(2)	15
第4図 軒丸瓦の型式(3)	16
第5図 軒丸瓦の型式(4)	17
第6図 軒丸瓦の型式(5)	18
第7図 軒丸瓦の型式(6)	19
第8図 軒平瓦の型式(1)	20
第9図 軒平瓦の型式(2)	21
第10図 軒瓦の変遷	30

表 目 次

第1表 出土瓦一覧表(1)	23
第2表 出土瓦一覧表(2)	24
第3表 出土瓦一覧表(3)	25
第4表 軒瓦出土位置一覧表	26
第5表 五輪塔法量表	27

図 版 目 次

- | | | | |
|------|-----------------------------------|------|------------------------------|
| 図版1 | 調査区配置図 | 図版27 | 稲荷郭石垣(10区)トレンチ位置図、
断面図 |
| 図版2 | 主要部調査区配置図 | 図版28 | 稲荷郭南面石垣(10E区)トレンチ断
面図、側面図 |
| 図版3 | 乾櫓(7A区)平面図・断面図 | 図版29 | 出の門(8A・B区)平面図、鉄筒出
土状況図 |
| 図版4 | 埋見門(7B・C区)平面図・断面図 | 図版30 | 太鼓門(12A区)平面図、断面図 |
| 図版5 | 本丸北面石垣(7D・E区)平面図・
断面図 | 図版31 | 北の丸虎口(13区)平面図 |
| 図版6 | 本丸南面石垣(7F区)断面図 | 図版32 | 軒丸瓦(1) |
| 図版7 | 大の門(5A・B区)平面図・断面図 | 図版33 | 軒丸瓦(2) |
| 図版8 | 二の丸西面石垣(4A区)平面図・側
面図 | 図版34 | 軒丸瓦(3) |
| 図版9 | 二の丸北面石垣(4B区)平面図 | 図版35 | 軒丸瓦(4) |
| 図版10 | 二の丸北面石垣(4B区)断面図 | 図版36 | 軒丸瓦(5) |
| 図版11 | 二の丸北面石垣(4A・B区)断面図 | 図版37 | 軒丸瓦(6) |
| 図版12 | 角の櫓、東の丸東面石垣(2A・B区)
平面図 | 図版38 | 軒丸瓦(7) |
| 図版13 | 角の櫓(2A区)平面図・断面図 | 図版39 | 軒丸瓦(8) |
| 図版14 | 角の櫓、東の丸東面石垣(2A・B区)
断面図 | 図版40 | 軒丸瓦(9) |
| 図版15 | 真の門(3A・B区)平面図 | 図版41 | 軒丸瓦(10) |
| 図版16 | 真の門(3A区)側面図、天の門(3
C区)平面図 | 図版42 | 軒丸瓦(11) |
| 図版17 | 天の門(3C区)東西面石垣側面図、
3C区西側土塀断面図 | 図版43 | 軒丸瓦(12) |
| 図版18 | 弁の櫓(3C区)平面図・断面図 | 図版44 | 軒丸瓦(13) |
| 図版19 | 東帯郭北面石垣(3G区)トレンチ位
置図、断面図、側面図 | 図版45 | 軒丸瓦(14) |
| 図版20 | 出の門(3D-F区)平面図・断面図 | 図版46 | 軒丸瓦(15) |
| 図版21 | 東帯郭(2C区)平面図・断面図 | 図版47 | 軒丸瓦(16) |
| 図版22 | 東帯郭(2D・E区)平面図 | 図版48 | 軒丸瓦(17) |
| 図版23 | 東帯郭(2D・E区)土塀断面図、東
帯郭(2C区)石垣断面図 | 図版49 | 軒丸瓦(18) |
| 図版24 | 正の櫓(10C区)平面図・断面図 | 図版50 | 軒丸瓦(19) |
| 図版25 | 稲荷郭西面石垣(10D区)平面図 | 図版51 | 軒丸瓦(20) |
| 図版26 | 稲荷郭南面石垣(10A・B区)平面図 | 図版52 | 軒丸瓦(21) |
| | | 図版53 | 軒丸瓦(22) |
| | | 図版54 | 軒丸瓦(23)、軒平瓦(1) |
| | | 図版55 | 軒平瓦(2) |
| | | 図版56 | 軒平瓦(3) |
| | | 図版57 | 軒平瓦(4) |

図版58 軒平瓦 (5)	図版70 平瓦 (1)
図版59 軒平瓦 (6)	図版71 平瓦 (2)
図版60 軒平瓦 (7)	図版72 平瓦 (3)
図版61 軒平瓦 (8)	図版73 平瓦 (4)、棧瓦、鳥衾瓦
図版62 軒平瓦 (9)	図版74 菊瓦
図版63 軒平瓦 (10)	図版75 鬼瓦
図版64 軒平瓦 (11)、軒棧瓦	図版76 鯨瓦
図版65 丸瓦 (1)	図版77 鬘斗瓦、面戸瓦、道具瓦
図版66 丸瓦 (2)	図版78 その他の遺物
図版67 丸瓦 (3)	図版79 4区石垣解体時出土瓦 (1)
図版68 丸瓦 (4)	図版80 4区石垣解体時出土瓦 (2)
図版69 丸瓦 (5)	

写真図版目次

写真図版1	・上 明石城跡遠景 (南から)	・中 明石城跡遠景 (北西から)
	・下 明石城跡全景 (南から)	
写真図版2	・上左 乾槽 (7A区) (東から)	
	・上右 乾槽 (7A区) 石垣断面 (東から)	
	・中 埋見門 (7B区) (北東から)	
	・下 本丸北面石垣 (7D区) (北西から)	
写真図版3	・上 大の門 (5A区) (北東から)	・中 大の門 (5B区) (東から)
	・下左 大の門 (5B区) サブトレ断面 (北から)	
	・下右 5C区 (西から)	
写真図版4	・上 二の丸北面石垣崩壊状況 (西から)	
	・中 二の丸北面石垣 (4B区) (東から)	
	・下 二の丸北面石垣 (4B区) 東端部 (東から)	
写真図版5	・上 4B区焼土層検出状況 (西から)	・中左 4B区地すべり部断面 (西から)
	・中右 二の丸西面石垣 (4A区) 南半部 (南から)	
	・下 二の丸西面石垣 (4A区) 北半部 (南から)	
写真図版6	・上 二の丸北面石垣 (4区) 断面 (北西から)	
	・中 二の丸北面石垣 (4区) 断面東半部 (北西から)	
	・下左 二の丸北面石垣 (4区) 断面西北部 (北から)	
	・下右 二の丸北面石垣 (4区) 断面瓦包含層 (北西から)	
写真図版7	・上 角の槽 (2A区) (北西から)	・中左 角の槽 (2A区) 礎石 (南から)
	・中右 角の槽 (2A区) 根太石 (北から)	

- ・下左上 角の櫓 (2A区) 礎石据え付け状況 (南から)
- ・下左下 角の櫓 (2A区) 粟石検出状況 (南から)
- ・下右 東の丸東面石垣 (2B区) (北から)
- 写真図版8
 - ・上 真の門 (3A区) (北から) ・中 真の門 (3B区) (南から)
 - ・下 3C区西側土塀断面 (東から)
- 写真図版9
 - ・上 天の門 (3C区) (西から)
 - ・中 天の門 (3C区) 西面石垣 (南西から)
 - ・下 弁の櫓 (3C区) (北から)
- 写真図版10
 - ・上 東帯郭北面石垣 (3C区) 断面 (北東から)
 - ・中 東帯郭北面石垣 (3C区) 断面北東隅 (北西から)
 - ・下 東帯郭北面石垣 (3C区) 復原状況 (北西から)
- 写真図版11
 - ・1 東帯郭北面石垣 (3G区) トレンチ1 (北から)
 - ・2 東帯郭北面石垣 (3G区) トレンチ1 (西から)
 - ・3 東帯郭北面石垣 (3G区) トレンチ2 (北から)
 - ・4 東帯郭北面石垣 (3G区) トレンチ2 (西から)
- 写真図版12
 - ・上 出の門 (3F区) (西から) ・中 出の門 (3E区) (西から)
 - ・下 弁の櫓 (3D区) (北から)
- 写真図版13
 - ・上 東帯郭 (2C区) (北から) ・中 東帯郭 (2D区) (北から)
 - ・下左 東帯郭 (2E区) (東から) ・下右 2E区北側土塀断面 (東から)
- 写真図版14
 - ・上 東帯郭 (2C・D区) 断面 (南から)
 - ・中 東帯郭 (2C・D区) 断面 (西から)
 - ・下 東帯郭 (2C・D区) 石垣復原状況 (西から)
- 写真図版15
 - ・上 稲荷郭南面石垣 (10A区) (北から)
 - ・中 稲荷郭南面石垣 (10B区) (東から)
 - ・下 正の櫓 (10C区) (東から)
- 写真図版16
 - ・左上 正の櫓 (10C区) 東面石垣 (東から)
 - ・右上 正の櫓 (10C区) 東側断面 (南から)
 - ・中 正の櫓 (10C区) 西側台状部 (北から)
 - ・下左 稲荷郭西面石垣 (10D区) (南から)
 - ・下右 稲荷郭西面石垣 (10D区) 北端部 (南から)
- 写真図版17
 - ・上 稲荷郭西面石垣 (10D区) 断面 (南から)
 - ・中 稲荷郭南面石垣 (10B・C・E区) 断面 (東から)
 - ・下 稲荷郭南面石垣 (10E区) 断面トレンチ1・2 (北から)
- 写真図版18
 - ・1 稲荷郭南面石垣 (10E区) 断面トレンチ1 (南から)
 - ・2 稲荷郭南面石垣 (10E区) 断面トレンチ1 (東から)
 - ・3 稲荷郭南面石垣 (10E区) 断面トレンチ2 (南から)
 - ・4 稲荷郭南面石垣 (10E区) 断面トレンチ3 (南から)
- 写真図版19
 - ・上 万の門 (8B区) (西から)

- ・中 万の門（8B区）鉄筒出土状況（北から）
- ・下 万の門（8A区）（東から）
- 写真図版20
 - ・1 太鼓門（12A区）断面（北から）
 - ・2 太鼓門（12A区）根石検出状況（南から）
 - ・3 太鼓門（12B区）断面（北西から）
 - ・4 太鼓門（12C区）断面（東から）
 - ・5 東不明門（1区）断面（東から）
 - ・6 西不明門（11A区）断面（東から）
 - ・7 西不明門（11B区）断面（北から）
 - ・8 西不明門（11B区）断面（北東から）
- 写真図版21 軒丸瓦（1）
- 写真図版22 軒丸瓦（2）
- 写真図版23 軒丸瓦（3）
- 写真図版24 軒丸瓦（4）
- 写真図版25 軒丸瓦（5）、軒平瓦（1）
- 写真図版26 軒平瓦（2）
- 写真図版27 軒平瓦（3）、軒棧瓦、丸瓦（1）
- 写真図版28 丸瓦（2）
- 写真図版29 丸瓦（3）
- 写真図版30 平瓦（1）
- 写真図版31 平瓦（2）
- 写真図版32 平瓦（3）、棧瓦
- 写真図版33 烏倉瓦、菊瓦、鬼瓦
- 写真図版34 鯉瓦
- 写真図版35 鬘斗瓦、面戸瓦、道具瓦
- 写真図版36 鉄製品
- 写真図版37 4区石垣解体時出土瓦
- 写真図版38 石垣解体時出土石造品

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

明石城は、元和3年(1617)に小笠原忠真が信濃松本より明石へ転封となり、元和4年(1620)より新たに築かれた城郭(元和6年完成)で、巽櫓・坤櫓(国指定重要文化財)や石垣が現存している。そして現在、明石城跡は県立明石公園として広く県民に利用されている。

この明石城も平成7年1月17日の兵庫県南部地震によって、幸い人的な被害はなかったものの、石垣の崩壊や櫓の破損などの大きな被害を受けた。このため、平成6年度の末に、明石公園を管理している兵庫県都市住宅部公園緑地課と巽櫓・坤櫓(国指定重要文化財)を所轄する兵庫県教育委員会社会教育文化財課との間で協議がおこなわれ、指定文化財である巽櫓・坤櫓とそれに付属する石垣については教育委員会社会教育文化財課が、その他の指定を受けていない石垣については都市住宅部公園緑地課が復旧を担当することとなった。平成7年度には明石公園石垣災害復旧指導委員会が設置され、各専門分野の研究者の委員の方々に参加いただき、より良い保存修理の方法が検討された。

以上のような経緯をへて策定された県立明石公園石垣都市災害復旧事業において、石垣が解体され、石垣の背面も一部掘削されることになり、現存する櫓跡・塀跡などの遺構が破壊されることが予想されることとなった。そこで、都市住宅部公園緑地課と教育委員会歴史文化財調査事務所との間で協議がおこなわれ、掘削される石垣上部の平坦面については全面調査を実施し、石垣裏込めなどの調査は解体時に時間を設けて調査することとなった。

第2節 調査の経過

これまでに明石城については県立明石公園の施設整備に伴い昭和52～54年度⁽¹⁾と昭和59年度⁽²⁾に全面調査が行われ、その後も小規模な調査が行われてきた。今回の調査は平成7・8年度に行われ、昭和52～54年度の調査に次ぐ、大規模な調査となった。

1. 平成7年度の調査

(1) 全面調査(遺跡調査番号950143)

調査担当者 復興調査班 森 正(京都府より支援) 池田 征弘

調査期間 平成7年8月24日～11月16日

調査面積 960㎡

工事の対象範囲は石垣とその近辺の部分であり、櫓・塀などの存在が予想された。よって櫓・塀などの存在の有無とその構造を明らかにすることが目的とした。さらに石垣についてもその構造を明らかにすることが必要であるが、本調査においては石垣の解体は行わないので、上面での観察にとどまる。よって、石垣の天場石の形状・材質(花崗岩 or 竜山石)、裏込めの上面での状態と範囲の確認に努めた。実際の調査に当たっては解体・掘削される範囲を対象として調査区の設定を行い、人力にて遺構面まで掘削し、精査を行って遺構の検出に努めた。検出された遺構については写真の撮影(航空写真を含む)、実測図の作成などを行った。なお、平面図の実測にあたっては下記の職員の支援を得た。

復興調査班 齊藤 吉弘 (宮城県より支援) 谷口 哲一 (山口県より支援)
長屋 幸二 (岐阜県より支援) 佐藤 康二 (埼玉県より支援)

(2) 断面調査

調査担当者 復興調査班 村上 泰樹 森 正 (京都府より支援) 池田 征弘

調査期間 平成7年8月～平成8年3月

全面調査実施中は森、池田が石垣の解体工事が最初に始まった三の丸の太鼓門、西不明門、東不明門について、終了後は村上、本丸南面石垣、北の丸虎口などについて断面調査を行った。工事による掘削断面の観察をおこない、若干の写真撮影と一部実測図の作成をするにとどまった。工事の進捗状況にあわせて調査を行わなければならない、全面調査や協議の合間にとりおこなったため、十分な調査をおこなうことはできなかった。

2. 平成8年度の調査

調査担当者 復興調査第1班 吉識 雅仁 渡辺 昇 山田 見弘 (宮城県より支援)

弘田 和司 (岡山県より支援) 目次 謙一 (高知県より支援)

復興調査第2班 大西 貴夫 (奈良県より支援)

調査期間 平成8年5月～9月

平成8年度は断面調査のみである。まず、崩壊の可能性の高い東帯郭、稲荷郭について石垣の解体が終了したので、吉識、渡辺、山田、弘田の4人を担当者として5月9日～11日の3日間調査をおこなった。高さ10m前後になる石垣の断面実測という特殊な調査であることから、方法を検討しつつ調査をおこなった。

6月には塹壕、埴橋の調査が始まり、その担当者である渡辺、目次、大西が塹壕の調査と並行して残る二ノ丸、東の丸、東帯郭、稲荷郭の石垣について記録を作成した。調査は石垣除去に伴い、東西の断面観察と表込め状況の記録を作成したのち、石垣を修理部分すべて除去し、裏側の断面観察を行った。

第3節 整理事業の経過

整理担当者 調査第2班 池田 征弘 (平成10・11年度) 復興調査班 渡辺 昇 (平成11年度)

整理普及班 長浜 誠司 (平成10年度) 岡田 章 (平成11年度)

平成10年度は、平成7年度調査で出土した遺物28入りコンテナにして155箱分について、当事務所にて接合・復元・実測・写真撮影などを行った。平成11年度は、平成8年度の石垣解体時に出土した遺物4箱について、渡辺が現場事務所にて実測を行ったものに追加して実測・写真撮影などを行った。さらに遺構図および遺物実測図についてトレース・レイアウトを行った。なお遺物写真の撮影は柳衣川に委託した。

上記の作業にあたっては下記委託員の協力を得た。

主任技術員 宮田 麻子 図化技術員 横山 キクエ 図化補助技術員 前田 恭子

企画技術員 本窪田 英子 竹内 泰子 岡井 とし子

図化技術員 石野 照代 萩原 聡美

茨木 恵美子 眞子 ふさ恵

飯田 章子 宮野 正子

鈴木 まき子 坂東 明子

第2章 遺跡をとりまく環境

明石城の位置する明石市は播磨灘に面した東西に長い市域を有している。市域の大半は段丘で、明石川の河口部のみ沖積地が広がっている。この河口部に明石城の城下町を基に発展した市街地が広がり、市街地の南側に幅約4kmの明石海峡を挟んで淡路島と対している。

明石城周辺については早くから市街地化したために少数の遺跡の存在しか確認できていない。しかしながら、明石市の北側に位置する神戸市内の明石川流域では数多くの遺跡が確認されていることから河口部近辺にも遺跡が展開したことは予想することができる。

旧石器時代については明石川流域ではあまり良好な遺跡は知られておらず、ナイフ形石器などが採集されているのみである。その存在が長らく議論されてきた「明石原人」については、その後の調査により西八木遺跡で木器、藤江川遺跡でハンドアックスが出土したことから、中期旧石器時代以前の人類の存在が裏付けられた。そのほか、明石市西部の段丘上で旧石器時代後期の西脇遺跡が知られている。縄文時代についてはあまり良好な遺跡は知られていないが、弥生時代に入ると吉田遺跡(10)、新方遺跡(9)、玉津田中遺跡(15)など前期の比較的大きい遺跡が多く認められるようになる。中期になるとさらに稠密に遺跡が分布するようになり、中期末には衣山遺跡(37)、城ヶ谷遺跡(33)など丘陵部に高地性集落が営まれるようになる。

その後、古墳時代に入っても集落は広範囲に認められ、これらの開発を背景として白水瓢塚古墳(30)、王家古墳(12)など大型前方後円墳が造られるようになる。さらに、明石城武家屋敷の下層では船材を木棺に転用した古墳が発見され、海上交通との関わりをうかがわせている。また、出合遺跡(13)では陶質土器遺、寒風遺跡(8)では大盛建物が検出され、朝鮮半島から渡来してきた人々の存在も比較的確明にうかがうことができる。

古代には明石城東方の丘陵に太寺庵寺(2)、明石郡衙と推定されている吉田南遺跡(6)など寺院や役所が置かれるようになり、明石城武家屋敷の下層でも掘立柱建物跡や道路状遺構が検出されている。

中世前期の遺跡はもっとも稠密に分布し、玉津田中遺跡や二ツ屋遺跡(23)などのように堀、池、仏堂をもつ居館跡も見つかっている。海浜部には京都の六勝寺や東寺などに瓦を供給した林崎三本松窯跡群(4)がある。

中世後期には在地領主の明石氏の居城である枝吉城(11)があり、天正14年(1586)頃に明石の地を与えられた高山右近はより河口に近い明石川右岸に船上城(3)を築いている。翌年、高山右近はキリシタン弾圧のため追放され、豊臣家の直轄領になったようである。慶長5年(1600)には池田輝政に播磨一国が与えられ、船上城には家老や一門の池田利政、池田由之、池田輝高などが入っている。

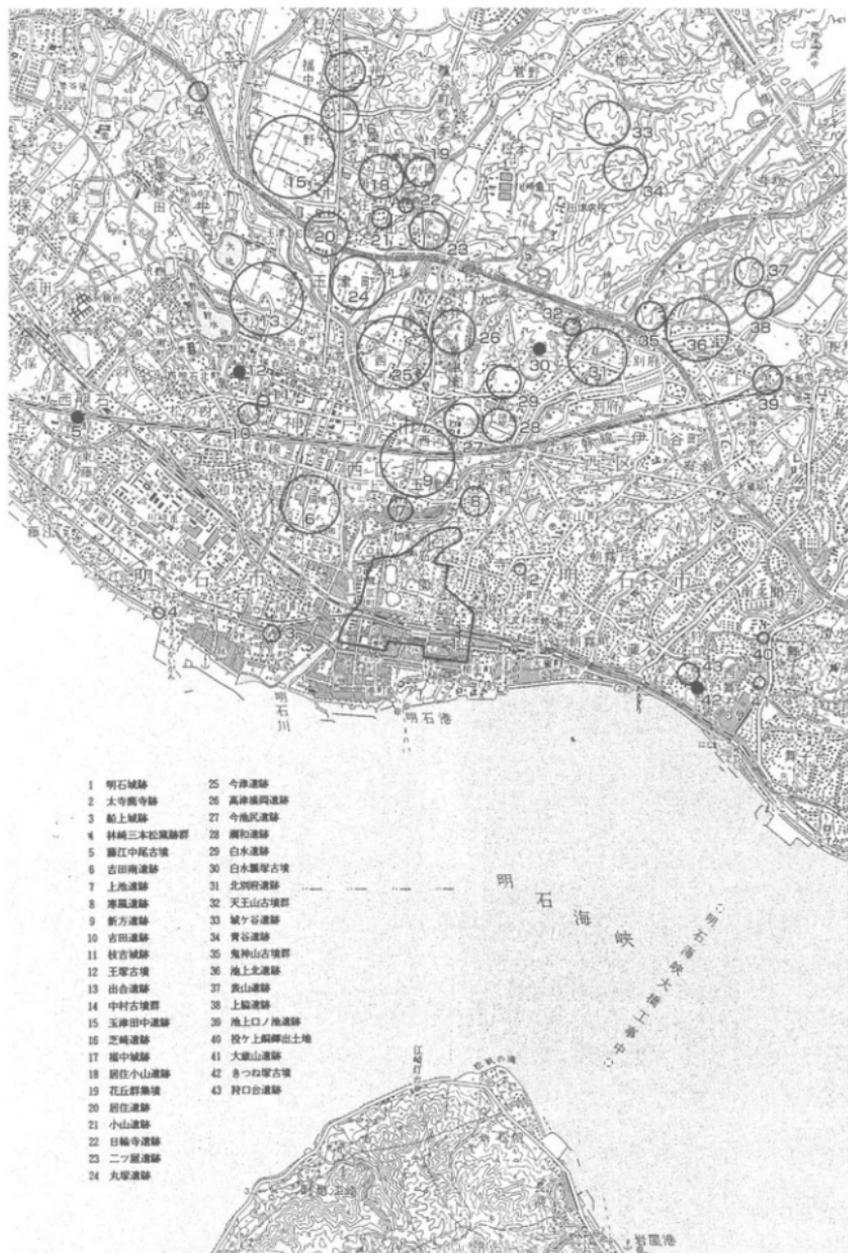
元和3年(1617)に小笠原重政が信濃松本より転封し、元和4年(1618)より明石城が建設される。以後、戸田松平家(1633~1639)、大久保家(1639~1649)、藤井松平家(1649~1679)、本多家(1679~1682)、越前松平家(1682~1871)と城主を替え明治にいたる。

主要参考文献

島田 清『明石城』1957年

黒田義隆 編『明石市史資料(考古編)第4集』1985年

新修神戸市史編委員会『新修神戸市史歴史編I自然考古』1989年



第1図 周辺の遺跡分布図

第3章 遺構

第1節 遺跡の概要〔図版1・2〕

明石城は東方から伸びる台地状の段丘を利用した平山城である。段丘の西端部に本丸を設け、東側に二の丸、東の丸を並べ、その両脇に稲荷郭、東帯郭を配して、中枢部を形成している。これら中枢部の周囲の平地部には三の丸、山里郭、北の丸などを設け、その南側に外堀で囲まれた武家屋敷がある。

このうち本丸、二の丸、東の丸、三の丸、北の丸の被害を受けた各所において調査をおこなった。なお、調査区名は石垣工事の工区名を使用し、個別の調査区については調査時と別にあらためてアルファベットを付けた。

第2節 本丸の調査

1. 乾槽（7A区）〔図版3、写真図版2〕

調査地は本丸の西北隅の乾槽で、その東南隅を調査した。上面は瓦を含むタキ面が認められ、南端より2m、東端より2mのところ礎石が認められた。南端は2段の石垣、東端は幅約30cmの石列で区画されている。解体後、槽台の内側より多開の石垣とひと続きの石垣が検出された。このことから、槽台の東南隅は追加的に造られた石垣であることが明らかとなった。石垣、石列、礎石などの使用石材のうち約5割が竜山石である。残存する礎石の位置から柱間約2mで、南北5間×東西4間となり、長槽とはほぼ等しい構造・規模をもっていたと考えられる。

2. 埋見門（7B・C区）〔図版4、写真図版2〕

調査地は北側から本丸へ入る埋見門にあたる。埋見門の西側の渡槽台を7B区、埋見門の東側の渡槽台を7C区として調査した。

7B区は埋見門の西側渡槽台で、平面規模は南北6m、東西5.2mである。上面には礎石などは認められず、5～10cmの玉石礫で覆われていたようである。石垣の天場石の形状は不整形のものが多く、使用石材のほとんどが花崗岩である。

7C区は埋見門の東側渡槽台で、平面規模は南北6m、東西4mである。上面は電柱などの公園施設によってほとんど擾乱を受けている。石垣の天場石の形状は方形のものが多く、使用石材の2割が竜山石であり、その使用箇所は北側に集中している。裏込めには径20～30cmの竜山石の割り栗を用いている。渡槽の規模は東西16.5m、南北5.5mである。

3. 本丸北面石垣（7D・E区）〔図版5、写真図版2〕

7D区は埋見門から北側へ続く石垣（延長5m）と本丸の北面にあたる石垣（延長7m）を調査した。埋見門北側の石垣の天場石の形状は方形のものが多く、使用石材の4割が竜山石である。本丸北面の石垣の天場石の形状は不整形のものが多く、使用石材の全てが花崗岩である。裏込めのラインは石垣より1.4mのところあり、栗石に5～20cmの円礫を使用している。

7E区は本丸東北の屈曲部にあたる。石垣の天場石の形状は不整形のものが多く、使用石材は全て花

崗岩である。裏込めのラインは石垣より1.2mのところであり、栗石に5～10cmの円礫を使用している。

4. 本丸南面石垣（7F区）〔図版6〕

本丸南面に生じた亀裂の状態を確認するため、石垣より北12mの位置に長さ20m、幅2mのトレンチが掘削されたため、土層の断面観察をおこなった。南西方向に伸びる丘陵の地山の上に平行に整地をおこなっていることが確認された。亀裂より南側は地滑りをおこしており、10cm前後下がっている。

第3節 二の丸の調査

1. 大の門（5A～C区）〔図版7、写真図版3〕

調査地は南から二の丸へ入る大の門にあたる。大の門の東側の渡槽台を5A区、西側の渡槽台を5B区、南側へL字形に張り出す桁形の先端部を5C区とする。

5A区の大の門東側渡槽台は東西5.8m、南北5.2mの長方形を呈する。東面のほぼ中央には階段が設けられており、入口の存在が想定できる。石垣の天場石の形状は方形・不整形のものなどがあるが、方形のものが多く、使用石材の約8割が竜山石である。裏込めのラインは東西北側で石垣より1.5～2mのところであり、栗石に5～10cmの円礫を使用し、部分的に30cm前後の礫を混じている。南側は比較的厚く整地されており、裏込めのラインは確認していない。

5B区の大の門西側渡槽台の平面規模は東辺5.3m、西辺5.5m、南辺4.0m、北辺5.0mで、北辺を底辺とする台形を呈する。台上の東端より1mのところには平たい石を2つ礎石状に据えてある。石垣の天場石の形状は方形のものが多く、使用石材の約8割が竜山石である。裏込めのラインは上面からは不明確で、上面の整地土中には暗灰色のしまりの悪い土のなかに径40cm前後の礫が不規則に入れられている。

5C区は桁形の先端部であるが、石垣のほとんどがすでに崩壊しており、石垣背面の整地土の状況を確認したにとどまる。整地土中には5B区と同様に暗灰色のしまりの悪い土のなかに径40cm前後の礫が不規則に入れられており、非常に粗雑である。

2. 二の丸北面・西面石垣（4A・B区）〔図版8～11、写真図版4～6〕

調査地は二の丸の北面石垣のほぼ全面と西面石垣の一部に相当する。ただし、平面調査については、中央部の崩壊が著しく調査が不可能で、崩壊部に境に2つの地区（西側：4A区、東側：4B区）に分けて調査をおこなった。石垣の解体後、二の丸北面全面の断面調査をおこなった。

①平面調査

4A区は二の丸北面石垣の西北隅にあたる。ただし、北面の石垣については孕みが大きいため調査できず、西面のみ調査をおこなった。二の丸の北端は土堤状に盛り上がるが、二の丸の西北隅は東西3.2m、南北6mの台をなしている。台状部分の南面（高さ1.4m）と東面の南半分（高さ0.2m）に粗雑な石垣をもっている。

西面の石垣の天場石の形状は方形のものが多く、使用石材の約3割が竜山石である。裏込めのラインは石垣より1.2mのところであり、栗石に5～20cmの円礫を使用している。

4B区については石垣の残存する東側と石垣のすでに崩壊した西側に分かれる。東側の石垣の天場石の形状は方形・台形のものが多く、使用石材の約2割が竜山石である。裏込めのラインは石垣より1.8m

のところあり、栗石に5-10cmの円礫を使用している。

西側ではすでに石垣は崩壊しており、その背面の土堤部分を調査した。石垣の端から約2.5mのラインのところまで平地で、そこから内側に向かって斜面が続いている。南東隅では石垣より約7mの所で地山が検出され、そのすぐ外側に瓦・焼土層を検出した。この瓦層は4B区の西端まで検出されている。一部掘り抜いた部分では1.4mもの厚さがある。この瓦・焼土層は石垣崩壊面に見える瓦・焼土層とつながるものと考えられた。なお地山と瓦・焼土層の間で今回の地震による地滑りが生じていることが確認された。

②断面調査

二の丸北面の横断面だけの観察で、しかも石垣裏込めの掘方ラインに接した位置で検討していることから層的に万全な調査をしたわけではない。最も崩壊の激しかった部分を底として大きな自然地形と思われる谷地形が存在することが明らかとなった。その谷部分に被熱した瓦や焼土・炭を投棄した状況で確認された。江戸時代の火災に伴う瓦礫層を埋めたものと考えられる。当然、瓦・土器類の大半は2次の焼成を受けている。ただ、瓦の中には火を受けているが、未使用かと思われるものも含まれており、実際に建物に葺いていたものが被災したものかは疑問である。

出土瓦の時期は小笠原家の三階菱紋の軒瓦が出土し、それ以後の瓦が出土していないことからこの焼瓦・焼土が生じた理由が寛永8年(1631)の明石城焼失の記事に関連するものと考えられる。この部分の石垣の裏込めには矢穴痕の残った割石が使われており、角礫や大型の石材が使用されていることも時期が古くなる根拠となろう。

平成7年度の平面調査の結果と合すると、この焼土層は途中で上がっており、二の丸全体が北側に拡張して石垣が構築されたと考えられる。

第4節 東の丸

1. 角の櫓(2A区)〔図版12~14、写真図版7〕

①平面調査

東の丸東南隅に位置する角の櫓とその北側を調査した。現状ではほぼ中央に国旗掲揚台が存在し、東北隅は地震により崩壊している。櫓の平面形は東辺10.5m、西辺9.5m、南辺11m、北辺10.5mの不整形である。礎石は西辺より2.5m、13mのラインで比較的良好に検出されたが、その他の位置では礎石及びその抜き取り穴をほとんど確認することはできなかった。残存する礎石の位置から5間×4間の建物を想定したい。使用石材は礎石を含めてほとんどが花崗岩である(礎石1つが竜山石)。天塲石の平面形状は方形・台形など様々なものがみられるが、西辺には方形のものが多く、裏込めのラインは東辺・南辺で石垣より2.5m、西辺で2m、北辺で1.2mである。なお櫓の北側の調査区の北端ではシルト質の地山を検出した。

②断面調査

角の櫓東面の石垣断面を実測した。高さ約12.5mを測る高石垣で、下にも僅かに続いていると思われる。現在の地表からの高さであるが、平面距離で5m入った約40%の傾斜を持っている。裏込め石は角礫や大型の石材も含まれ、古い様相を示している。また、掘方裏面の元の地形は地表下1mで地山と思われる層を確認している。

2. 東の丸東面石垣（2 B区）〔図版12・14、写真図版7〕

①平面調査

角の櫓の北側に位置する東の丸東面石垣（延長約14m）を調査した。天場石の平面形状は方形・台形など様々みられ、全て花崗岩を使用している。裏込めのラインは石垣より約1.4～2mのところにあり、栗石に10～30cmの円礫を使用している。塀の痕跡などの建物については確認できなかった。なお調査区南端では裏込めのラインで地震による段差が生じている。

②断面調査

石垣修理の北端の断面を図化した。石垣の中央近くにあたる部分で、修理部分も3m近くだけの断面調査である。上部には新しい盛土があり、新しい時期のものと思われる。土壇状の遺構があるかとも思われたが存在しなかった。地表下0.6mで裏込めの掘方のラインが確認された。南東隅と異なり、掘り方ラインに新旧はなく、細かい栗石が多いことから新しい時期のものと思われる。地表下1.3mで旧表土とその下で地山を検出している。

3. 真の門（3 A・B区）〔図版15・16、写真図版8〕

調査地は東の丸から北へ抜ける直の門にあたる。3 A区は直の門の西側の渡槽台の東北隅と北側につづく石垣、3 B区では真の門の東側の渡槽台を調査した。裏込めの状態については石垣の孕みが大きいため、調査を行わなかった。

3 A区の西側の渡槽台は小面積しか調査できず、調査の主体は北へ接続する桁形の張出しの石垣にある。張出しの石垣は渡槽台から1段落ちて、幅3mの幅で北へ延びる。天場石の天場石の形状は不整形のものが多く、使用石材のほとんどが花崗岩である。

3 B区の東側の渡槽台の規模は東西4.5m、南北4.8mである。西端から1.4mの中央部に礎石が残存する。天場石の形状は方形・台形のものが多く、使用石材のほとんどが花崗岩である。

4. 天の門（3 C区）〔図版16・17、写真図版8・9〕

調査地は東の丸と東帯郭を区切る天の門の北側の渡槽台にあたる。南北5.5m、東西6mの規模である。上面では瓦や漆喰を多く含むタタキ面が存在し、礎石などは認められなかった。天場石の形状は不整形のものが多く、使用石材の約6割が庵山石である。ただし築研堀に面した石垣の石材は花崗岩であり、渡槽台は築研堀に面した石垣の土壇状の部分に付加的に築かれたことは明らかである。裏込めのラインは北側で石垣より1.4m、南側で1.7mのところにあり、栗石に5～10cmの円礫を使用している。

3 C区の西端では土塀の基部が残存しており、断面でその構造を確認した。裏込め上を黄色の精良な極細砂で整地し、その上に黄色の極細砂で壁を築いている。土塀の基部の幅は80cmである。

第5節 東帯郭の調査

1. 弁の櫓（3 C区）〔図版18、写真図版9〕

東帯郭側では東端隅に弁の櫓が存在する。櫓台推定位置の遺構面は必ずしも良好ではなかったが、礎石一つと礎石の抜き取り穴と思われるものを検出した。抜き取り穴の配置から考えると礎石は原位置を

保っていないものと思われ、4間×4間の規模を想定したい。ただし、南辺は調査区外で、西辺でも石垣を確認することはできなかった。裏込めのラインは東側で石垣より1.5mのところにある。

2. 東帯郭北面石垣 (3G区) [図版19、写真図版10・11]

薬研堀の南側に面した石垣は、直接地震によっては崩壊しなかったが、地震後に大きくずれ落ち、大きく孕んでいる。この石垣については、石垣の面が弧を描いて直線でないことと、地震後に崩壊したことから、地盤が脆弱ではないかと想定され、下層の状況を把握する必要が生じてきた。そのため、本来の石垣の位置や、下層の状況を確認するために2か所にトレンチを設定した。

枳形部分の石垣から薬研堀の北東隅まで37mあるが、その距離で約3m北側に張り出している。石垣のレベルが多少異なることから歪になっているが、トレンチの結果からは石垣がずれた状況を端的に示していないので、築城当初の状況がある程度変化したものと思われる。現在のように大きく北へ弧を描いて張り出していないながらも、他の石垣のように直線ではなかったと思われる。この石垣の東側の裏込めは人頭大の石材も数石あるが、大半は小さい河原石が主体であり、新しい要素が多い。それに反して西側は角礫や割石が多く裏込めに入り、石垣の石材も花崗岩が主体となっており、古い時期の石垣かと思われる。1トレンチを設定した位置の東側に直線から弧になる変化点がみられ、この部分で築き直したのではないかとと思われる。

1トレンチは現在の面から0.8m下まで1石だけ石垣が続いている。根石は粘土層の上に乗っており、柵木などの施設は認められなかった。粘土層の上は堀底の状況を示す有機質を多く含む層で、さらに上層は瓦礫層が主体となっていた。2トレンチも同様の結果を示している。1トレンチよりも堆積土が厚くなっている。地山である粘土層の上に根石を置いている点は同じで、下部施設も存在しない。

3. 出の門 (3D-F区) [図版20、写真図版12]

調査地は明石城主要部の東端に位置する出の門にあたる。3E・F区がその西側の波櫓台、3D区が東側の波櫓台に相当する。

3E・F区の西側の波櫓台の規模は南北14.25m、東西4.5mで、南端に幅約2mの階段が設けられている。天場石の平面形状は方形のものが多く、使用石材は全て花崗岩である。裏込めのラインは石垣より1.4mところにあり、栗石に5～10cmの門礫を使用している。西側の波櫓台では調査面積が少ないため建物の基礎に想定できるものは確認できなかった。

3D区の東側の波櫓台の規模は東西7.5m、南北4.5mである。30～50cmの角礫が中央付近で2ヶ所みられ、礎石の根石・根太木の基礎と考えることができる。天場石の平面形状は方形・三角・台形など様々あるが、方形のものが多く、使用石材については全て花崗岩である。裏込めのラインは石垣の孕みが大きいため確認は行わなかった。なお中央部付近に地震による亀裂が存在する。

4. 東帯郭東西面石垣 (2C-E区) [図版21～23、写真図版13・14]

東帯郭のうち東端に位置する南北に細長い郭の部分である。この郭の南部は高い段で南北に分割されている。平面調査はこの段の北側(2C区)と南側(2D・E区)でおこなった。断面調査は2C区北端と段の部分でおこなった。

①平面調査

2 C区については東帯郭西面石垣（延長約10m）を調査した。天場石の平面形状は方形あるいは長方形を主体とし、竜山石を約3割使用している。裏込めのラインは石垣より約1.3mのところであり、栗石に5～10cmの円礫を使用している。なお当地区の東面石垣上には土塼の基部が残存している。

2区D・E区は段の下から屈曲部までの範囲であるが、中央で倒木を含めた大きな崩壊部があり、調査区は南北に別れる。2D区は東帯郭東西両面の石垣の延長約4m、2E区は屈曲部の石垣（延長約4m）を調査した。天場石の平面形状は2辺が隅丸を呈する方形のものが多く、全て花崗岩を使用している。裏込めのラインは石垣より約1.2～1.4mのところであり、栗石に10～30cmの円礫を使用している。塼の痕跡などの建物については確認できなかった。なお当地区の東面石垣上には土塼の基部が残存しており、断面でその構造を確認した。石垣および裏込め上に明黄色の比較的良好な極細砂で整地を行い、漆喰・小礫を多く含んだ黄色の極細砂で壁を築いている。基部の幅は約50cmである。

2C区と2区D・E区では天場石や栗石に違いがみられる。さらに2C区の石垣の側面を観察すると、上部で竜山石の利用が見られ、下部では見られない。段より北側の石垣は後補のものと推測される。

②断面調査

この石垣の修理部分は少なく、上面から約3mだけの補修であった。その部分だけの断面観察をおこなったが、西側と大きく変わることはなかった。裏込め石は角礫や大型の石材も含まれるが、一律ではなかった。一部小礫が混在していることから全く新しい時期を示してはいないが、やや新しい時期の様相ではないかと思われる。ただ、裏込めの中で礫同士で明確にしごきたいが、切れ合い関係があるようである。断面で奥側に大型の礫が入れられており時期差があるものとも思われる。

第6節 稲荷郭の調査

1. 正の櫓（10C区）〔図版24、写真図版15・16〕

調査地は稲荷郭の西南隅に位置する正の櫓にあたる。正の櫓の平面規模は東西10m、南北は地震により南辺が崩壊したため分らないが、約8m程度と推定される。東辺より6mと北辺より4.5mのラインに礎石が7つ残存し、そのほか礎石の抜き取り穴もいくつか検出した。このことから東西5間、南北4間の建物と考えられる。天場石の形状は方形、不整形のものなど様々あり、使用石材は約5割が竜山石である。裏込めのラインは北辺で石垣より1.4m、東辺で1.0mのところであり、栗石に5～10cmの円礫を使用している。この櫓の西北隅には3m×3mの台が接続し、この台の東北隅は階段状になっている。このことからこの櫓の入口は櫓の西北隅に存在したと考えられる。

2. 稲荷郭西面石垣（10D区）〔図版25・27、写真図版16・17〕

①平面調査

調査地は稲荷郭の西面石垣のほぼ南半分（延長約50m）にあたる。上面では塼などの痕跡は検出できなかった。石垣の天場石の形状は方形、台形、不整形のものなど様々あり、使用石材は約4割が竜山石であり、調査区の北部に集中している。裏込めのラインは石垣よりほぼ1.4～1.8mのところにあるが、調査区北部の竜山石の多い部分では2.4mにもおよぶところもある。裏込めは5～10cmの円礫を含む極

細砂～細砂で、部分的に5～10cmの円礫のみのところがある。

②断面調査

地山である洪積層の段丘面に石垣を築いている。全体的には小型の河原石を主体とする裏込めの栗石で、時期的に新しいと思われる。部分的に大型の石材や割石が入っており、古い時期の石垣裏込めが残るところもあったようである。

3. 稲荷郭南面石垣 (10A・B・E区) [図版26～28、写真図版15・17・18]

①平面調査

10A区は南より稲荷郭へ入る先の門の南側の台状部分にあたる。上面では建物・塀などの痕跡は検出できなかった。天場石の形状は不整形、台形が多く、使用石材のほとんどが花崗岩である。

10B区は稲荷郭の南面石垣のほぼ全域にあたるが、崩壊部が大きいため調査ができたのは延長約15mのみである。上面では塀などの痕跡は検出できなかった。天場石の形状は不整形のものも多く、使用石材の全てが花崗岩である。裏込めのラインは石垣より1.4mのところであり、栗石に5～10cmの円礫を使用している。

②断面調査

石垣が平面で直線ではなく、復原するにあたって論議が分かれた部分である。当初から湾曲しているのか、孕みによって歪んだかを考える必要が生じた。そのため南側に3本のトレンチ(10E区)を設定して、下部構造の確認をおこなった。石垣はほとんど基底部に近いところまで解体をされ、その裏込めの状況を確認するため1・2トレンチについては裏込め部分まで掘削をおこなった。その結果、東帯郭北面石垣と同様に下部の基礎部分には桐木などの構造物は全く伴っておらず、脆弱と思われる地山上に石垣を構築していることが明らかになった。そのかわり、前面に粘土を中心につき固めており強度を図ろうとしている。裏込めの栗石は深くなく、基底石まで及んでいない。その上面くらいから栗石を入れている。

4. 万の門 (8A・B区) [図版29、写真図版19]

調査地は北側から稲荷郭に入る万の門にあたる。万の門の西側の渡槽台を8A区、東側の渡槽台から北側へL字形に張り出す桁形の先端部を8B区として調査した。

8A区は万の門の西側の渡槽台で、平面規模は南北4m、東西4mである。上面には礎石などは認められず、石垣背面の整地土中には径40cm以下の礫が不規則に含まれている。天場石の使用石材のほとんどは花崗岩である。ただし、この部分は昭和4～10年の公園整備工事によって東側を3m程度縮小したようであり、調査区内の石垣もこの時点での積み替えであると思われる。

8B区は万の門の東側渡槽台から北側へL字形に張り出す桁形の先端部で、南北4.2m、東西3.4mの台状を呈している。天場石の使用石材のほとんどは花崗岩であり、裏込めについては石垣の孕みが大きいため確認できなかった。台の南部やや西よりのところでは鉄筒が出土した。鉄筒は底部のみ残存し、南側は径30～40cmの礫2つで囲まれている。本来は北側も礫で囲まれていたであろう。この鉄筒を蓋していた平瓦片も出土している。また、この鉄筒を囲む礫のまわりからは寛永通宝が10枚出土している。これらの銭貨のなかに鉄銭が含まれることから1739年以降のものと考えられる。

第7節 三の丸・北の丸の調査

三の丸の太鼓門、東不明門、西不明門と北の丸の虎口について調査をおこなった。

1. 太鼓門 (12A～C区) [図版30、写真図版20]

三の丸の正面の出入口である太鼓門は升形門で、内側の能の門と外側の定の門からなる。断面調査は能の門の渡槽台(北側:12A区、南側:12B区)と定の門の北側の石垣(12C区)について行った。

能の門の北側の渡槽台である12A区では石垣の石材は花崗岩を使用し、栗石は径30cm以下の円礫を中心としている。石垣内の盛土はしまりの悪い灰白色の細砂(10cm以下の礫を含む)を約2m積んだ後、しまりのよい灰白色の極細砂(礫をほとんど含まない)を積んでいる。

能の門の北側の渡槽台である12B区でも12A区と同様であるが、上層のしまりのよい灰白色の極細砂には10cm以下の礫を多く含むんでいる。石垣隅の根石は地山の砂層の上に直接置かれている。

12C区では盛土の下部は石垣より2m以上の幅の栗石で構築されている。栗石は径50cm以下の円礫が使用されている。その上にしまりのよい灰白色の極細砂(10cm以下の礫を多く含む)が積まれている。

2. 東不明門 (1区) [写真図版20]

三の丸の東側の出入口である東不明門で、断面調査は門の内側の石垣についておこなった。裏込めの栗石は20cm以下の円礫で、砂が多く含まれている。盛土の下部は太鼓門と同様にしまりの悪い灰白色の細砂(10cm以下の礫を含む)が積まれている。その上にしまりのよい灰白色の極細砂(10cm以下の礫を多く含む)が積まれ、その最上層に旧表土が認められる。さらにその上にしまりのよい灰白色の極細砂(20cm以下の礫や漆喰を多く含む)が積まれている。

3. 西不明門 (11A・B区) [写真図版20]

三の丸の西側の出入口の西不明門は升形門で、内側の元の門と外側の中の門からなる。断面調査は元の門の渡槽台(北側:11A区、南側:11B区)について行った。

能の門の北側の渡槽台である11A区では栗石の幅は最大2mと厚く、径50cm以下の角礫を中心としている。石垣内の盛土は下部にしまりの悪い灰白色の細砂(10cm以下の礫を含む)を約1m積んだ後、しまりのよい灰白色の極細砂(10cm以下の礫を多く含む)が積まれ、その最上層に旧表土が認められる。さらにその上に約1mの盛土がなされている。

能の門の南側の渡槽台である11A区では栗石の幅は非常に狭く、盛土が石垣と接するところもある。石垣内の盛土はしまりの悪い灰白色の細砂(10cm以下の礫を含む)を約2m積んだ後、しまりのよい灰白色の極細砂(10cm以下の礫を多く含む)を積んでいる。

4. 北の丸虎口 (13区) [図版31]

北の丸虎口は桜堀と薬研堀・横堀で囲まれた狭い部分を限っている。断面調査をおこなったのは虎口の南側の石塁である。平面は15m×5mの長方形で南北西面と東面の一部が石垣で石垣のない東面部で土塁と接合している。石垣の石材は根石の8割が竜山石である。栗石は幅2～2.5mと広く、径10cm未満の円礫を多く用いている。石垣内は地山を削り残した上に礫混じりの土を盛土している。

第4章 遺物

今回整理の対象とした遺物は、平成7年度の全面調査で出土した28ℓ入りコンテナーにして155箱と平成8年度の石垣解体時に回収された4箱についてである。その出土品のほとんどは明石城に用いられた瓦で、その他に古代から中世にかけての土器、瓦や近世の土器・陶磁器、石垣の裏込めに用いられた石遺物などがある。4区の焼土・瓦層やその他の整地層から出土したものもあるが、その大半は表土から出土したものである。

第1節 瓦

出土した瓦は、基本的に明石城に用いられたと考えられるもので、204のみ古代の平瓦である。軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦、軒棧瓦、棧瓦、鳥舎瓦、菊瓦、鬼瓦、鯉瓦、鬩斗瓦、面戸瓦、道具瓦などの種類がある。(3)

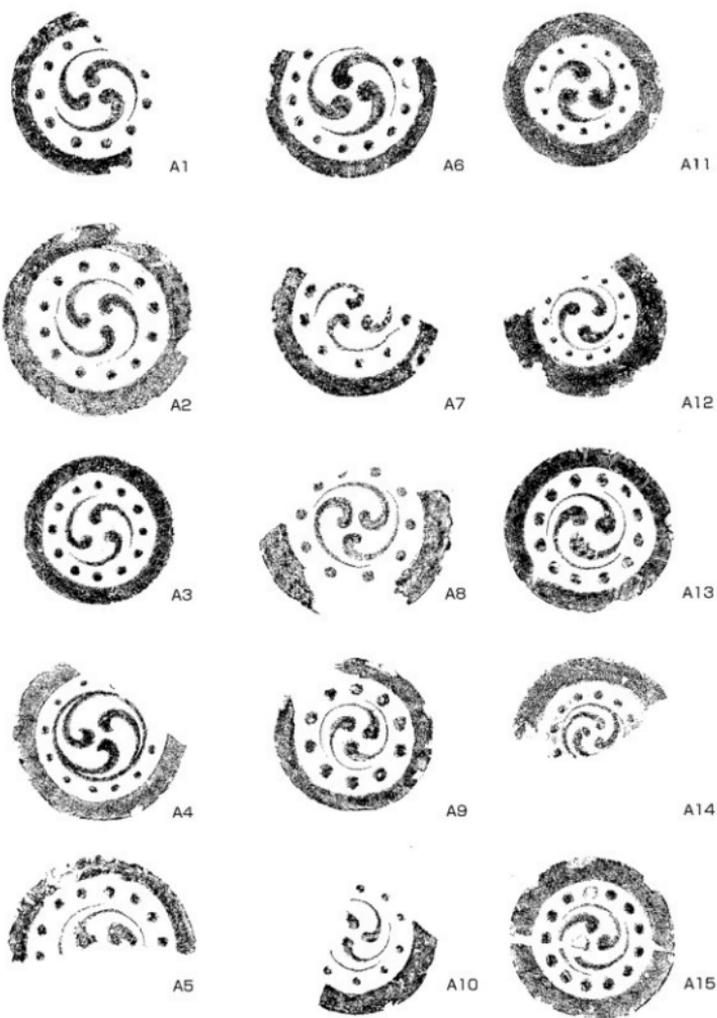
1. 軒丸瓦 (1~104、221~229) [図版32~54・79・80、写真図版21~25・37]

瓦当文様によって分類すると、大きくは巴文(A類)と家紋(B~H類)に分かれる。瓦当面に摩砂が付着するものがある。瓦当表面の接合部にキザミをほどこしている。キザミには縦方向にほどこすもの(A類)、弧状にほどこすもの(B類)、コの字状にほどこすもの(C類)がある。釘穴には丸瓦部の玉縁側に1つもつものと丸瓦部の玉縁側と中ほどに2つもつものがある。

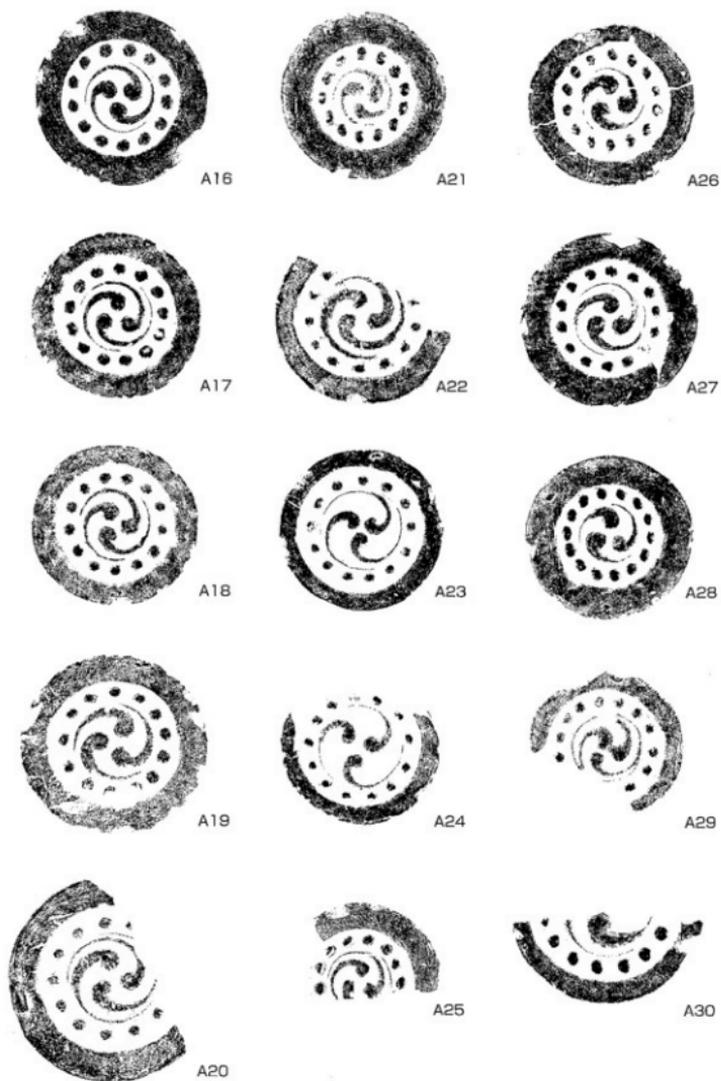
①巴文(A類)

巴文は三つ巴の周りに珠文がめぐるもののみで、珠文のないものや巴と珠文の間に圏線をもつものは認められない。巴文の分類は、巴の巻きの方向や珠文の数などを基準とし、できるだけ范の違いを識別することを心掛けた。その結果以下の50種類に分類した。

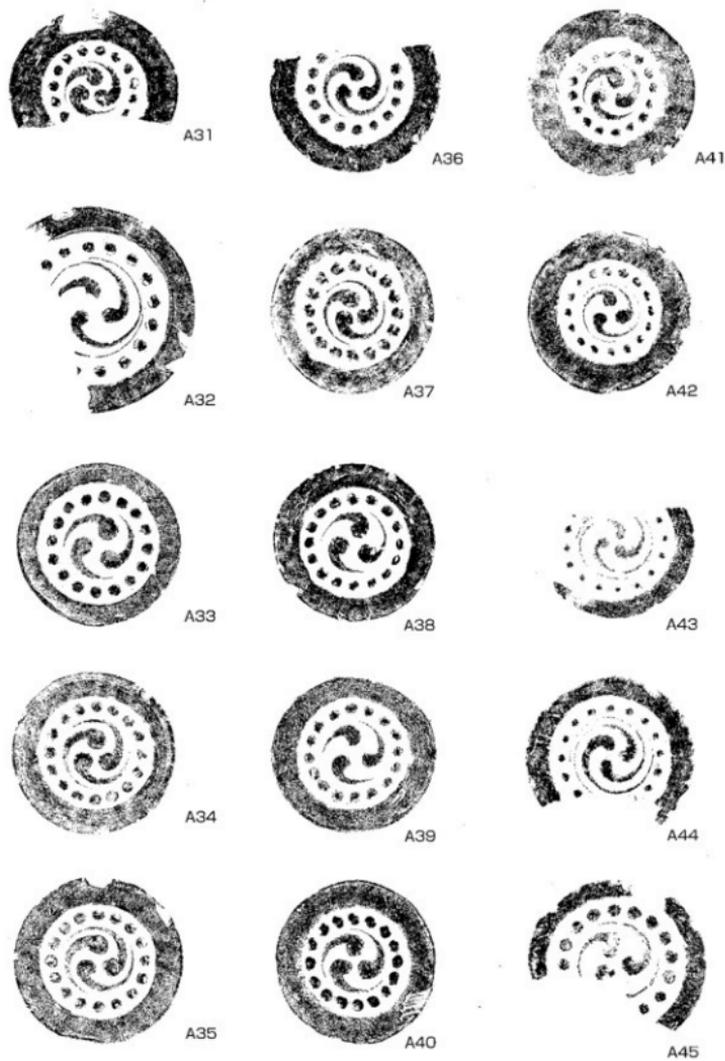
巴の巻きが右周りのもの	珠文の数が11個	A 1類
	◇ 12個	A 2~4類
	◇ 13個	A 5類
	◇ 14個	A 6類
巴の巻きが左周りのもの	珠文の数が9個	A 7類
	◇ 10個	A 8~10類
	◇ 12個	A 11~14類
	◇ 13個	A 15~25類
	◇ 14個	A 26~30類
	◇ 15個	A 31類
	◇ 16個	A 32~47類
	◇ 18個	A 48~49類
◇ 21個	A 50類	



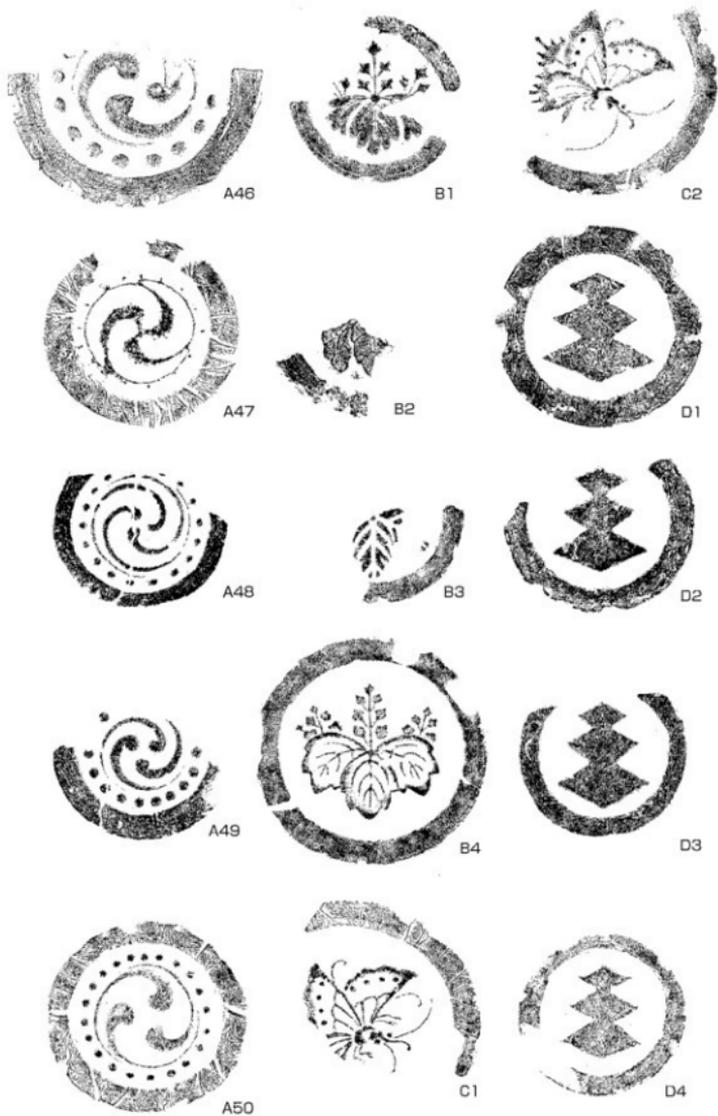
第2図 軒丸瓦の型式(1)



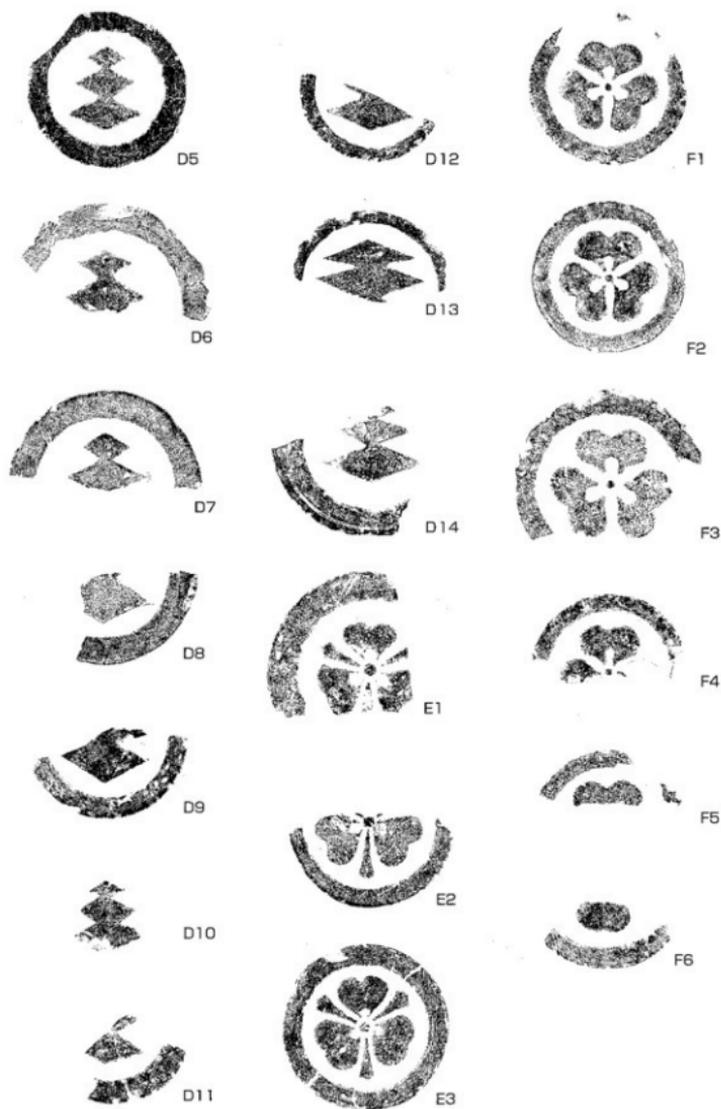
第3図 軒丸瓦の型式(2)



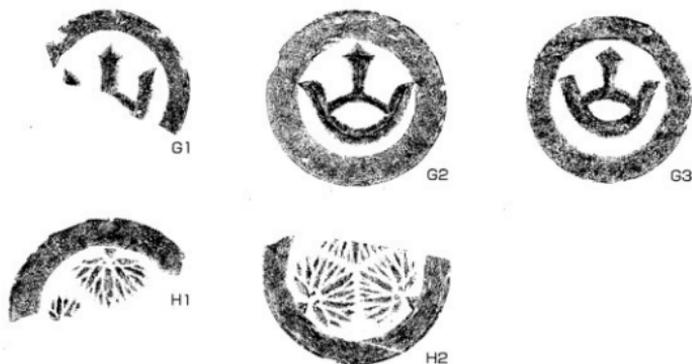
第4図 軒丸瓦の型式(3)



第5図 軒丸瓦の型式(4)



第6図 軒丸瓦の型式(5)



第7図 軒丸瓦の型式(6)

②家紋(B~H類)

家紋は桐(B類)、揚羽蝶(C類)、三階菱(D類)、劍酢漿(E類)、酢漿(F類)、山字(G類)、三葉葵(H類)などがある。

桐紋(B類)は4種類あり、B1類が五三制、B4類が五七制である。B4類は姫路城、由良城で類例がある。(4)桐紋はポピュラーな紋様で特定は難しいが、他での出土例を考えると池田家に関わるものと考えることができる。

揚羽蝶紋(C類)は池田家の家紋であり、2種類確認できる。C2類は姫路城で類例がある。(5)

三階菱紋(D類)は小笠原家の家紋であり、14種類にもおよぶ。

劍酢漿紋(E類)は藤井松平家の家紋であり、3種類確認できる。

酢漿紋(F類)は藤井松平家の家紋の剣が取れたものである。4種類確認できる。

山字紋(G類)は越前松平家の家紋であり、3種類確認できる。

三葉葵(H類)は越前松平家の家紋であり、文政10年(1827)に將軍家斉の25男齊直を養子として迎えて以降に使用されたものと思われる。2種類確認できる。

2. 軒平瓦(105~155、230~232) [図版54~64・80、写真図版25~27・37]

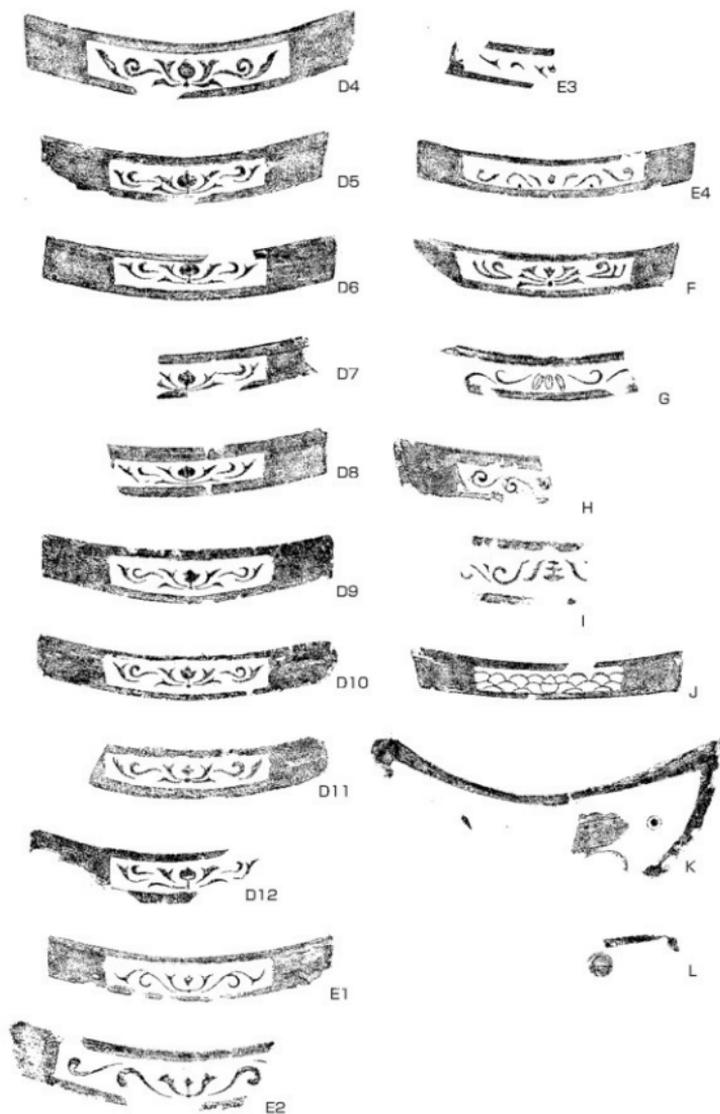
軒平瓦は大きく分けると、唐草文(A~I類)とその他(J~L類)に分かれる。頸部は基本的に段頸で、接合の仕方を確認できるものはそれほど多くはないが、貼り付け式のものも確認できる。瓦当面には雑砂が付着するものがある。

①唐草文(A~I類)

いずれも均整唐草文である。中心飾りの構成を基準に分類を行う。



第8図 軒平瓦の型式(1)



第9図 軒平瓦の型式(2)

— 中心飾りが五葉 —————	A 1～5 類
— 中心飾りが三葉 —————	B 1～6 類
— 中心飾りが橘花 —————	— 花頭が膨らまない ————— C 1・2 類
	— 花頭が膨らむ —————
	— 花萼が 2 対 ————— D 1～12 類
	— 花萼が 1 対 ————— E 1～4 類
	— 花萼が 3 対 ————— F 類
— 中心飾りが笹の葉状 —————	G 類
— 中心飾りが杉の葉状 —————	H 類 (船上城で出土例がある。) (4)
— 中心飾りが三階菱 —————	I 類

②その他 (J～L 類)

J 類は中心飾りが宝珠で左右両側に青海波文が配されるものである。

K 類はいわゆる滴水瓦と呼ばれるものである。紋様部分は残存状況がよくないが、揚羽蝶紋と推定される。

L 類は連珠文である。

3. 丸瓦 (158～170) [図版65～69、写真図版27～29]

いずれも玉縁式の丸瓦で、凸面には縦方向のナデあるいはミガキをほどこされている。凹面には内叩きの見られないもの (I 類) と見られるもの (II 類) がある。I 類には吊り紐痕の見られるもの (I a 類) と見られないもの (I b 類) がある。I・II 類とも糸切り痕はコピキ B である。凹面の布目は I 類で 10本/1cm 以上と細かい。II 類ではさらに布目が数えられないくらい細かく、縦方向の差し縫い痕のみ確認することができる。良好な個体が少ないためははっきりはしないが、I 類は大 (長 30cm 以上、幅 16cm 以上)・中 (長 28cm 前後、幅 14cm 前後)・小 (長 24cm 前後、幅 12.5cm 前後) の 3 規格、II 類は中 (長 25cm 前後、幅 14cm 前後)・小 (長 21cm 前後、幅 12.0cm 前後) の 2 規格存在するようである。

4. 平瓦 (171～178) [図版70～73、写真図版30～32]

凸面は粗い縦方向のナデがほどこされ、離砂の付着するものがある。凹面は丁寧な横ナデあるいはミガキがほどこされている。良好な個体が少ないためははっきりはしないが、大 (長 30cm 以上、幅 25cm 以上)・中 (長 25cm 前後、幅 20～23cm)・小 (長 23cm 前後、幅 19cm 前後) の 3 規格存在するようである。

5. 軒棧瓦・棧瓦 (156、157、179) [図版64・73、写真図版27・32]

軒棧瓦・棧瓦の出土量は非常に少ない。156は軒棧瓦で、瓦当文様が軒平瓦の E 類に属するものである。157は軒棧瓦で、瓦当文様が越前松平家の山字紋を中心飾りとするものである。軒丸瓦 G 2・3 とセットになるものと思われる。179は棧瓦である。

6. 烏衾瓦 (180) [図版73、写真図版33]

烏衾瓦は 1 点のみ出土している。瓦当文様は越前松平家の山字紋で、軒丸瓦 G 1 類に近いが、異形である。瓦当の表面には円形にクシ状のキザミが入れられている。

7. 菊瓦 (181~187、233) [図版74・80、写真図版33・37]

花卉が盛り上がる1~4類と花卉の中央が凹む5・6類がある。5・6類には瓦当面に雑砂が付着している。瓦当径が12cm前後のものと8cm前後のものがある。

8. 鬼瓦 (188) [図版75、写真図版33]

出土した鬼瓦のなかで文様が分かるものが1点のみである。文様は戸田松平家の家紋である六曜星である。把手は半輪状のものを貼り付けたものである。背面はケズリで調整されている。

9. 鱗瓦 (189~193) [図版76、写真図版34]

189・190は鱗瓦の本体と胸鱗の部分である。189は鱗の部分に釘穴を2つもち、190は鱗を半載竹管状の工具で施文している。191は尾鱗、192・193は腹鱗である。

10. 道具瓦 (194~199) [図版77、写真図版35]

194~196は契斗瓦である。194は波状のクシ目、195は×状のクシ目をもち、196はクシ目をもたない。197は面戸瓦である。198・199は用途不明の道具瓦である。198は平瓦状の瓦で、凹面の2辺に突帯をもっている。199は平瓦を斜めに切った形状をしており、斜辺側の1面に突帯をもっている。

軒丸瓦 (長・幅・厚・瓦当径の単位はcm。雑砂は瓦当面での有無。)

番号	種類	分類	出土位置	長	幅	厚	瓦当径	開付	瓦瓦	接合	備考
1	軒丸瓦	A.1	10C 龜裂土						○		A
2	軒丸瓦	A.2	3 C 黄土			1.5	16.8		○	I	A
3	軒丸瓦	A.2	4 B 黄土				16.0		○		A
4	軒丸瓦	A.3	4 B 黄土		11.8	1.1	12.3		○		
5	軒丸瓦	A.6	3 B 黄土			1.7	14.1		○		
6	軒丸瓦	A.5	10B 黄土	30.9	14.4	2.3	15.3		○	I	凹面に縦方向の差し縫い痕
7	軒丸瓦	A.7	8 B 黄土				13.7				
8	軒丸瓦	A.8	2 A 黄土				16.2		○		
9	軒丸瓦	A.9	7 D 黄土				12.7				A
10	軒丸瓦	A.9	2 B 黄土				13.3				A
11	軒丸瓦	A.10	10C 黄土						○		
12	軒丸瓦	A.11	3 C 黄土			1.5	12.6				
13	軒丸瓦	A.12	10B 黄土				14.1		○		
14	軒丸瓦	A.12	2 D 黄土			1.3	13.5				外面は酸化
15	軒丸瓦	A.14	10D 龜裂土				13.1				
16	軒丸瓦	A.15	8 B 黄土	25.5	12.9	1.5	13.5		○	I	凹面に縦方向の差し縫い痕
17	軒丸瓦	A.15	7 D 黄土			1.5	13.5		○	II	
18	軒丸瓦	A.16	4 B 黄土				14.5				A
19	軒丸瓦	A.17	10A 黄土				13.5				外面は酸化
20	軒丸瓦	A.18	2 D 黄土			1.3	13.5		○		
21	軒丸瓦	A.18	3 A 黄土			1.4	13.3		○	II	A
22	軒丸瓦	A.19	2 B 黄土				15.1		○		A
23	軒丸瓦	A.20	3 C (天の門) 表土				12.3				
24	軒丸瓦	A.21	10B 黄土				13.4				B
25	軒丸瓦	A.22	10B 黄土				14.4		○		外面は酸化
26	軒丸瓦	A.23	3 D 黄土				12.5				
27	軒丸瓦	A.24	3 B 黄土	24.6	13.3	1.7	13.0			I	
28	軒丸瓦	A.24	3 C 龜裂土			1.9	12.8				
29	軒丸瓦	A.25	7 D 黄土	24.7	11.5	1.4	13.9			II	凹面に縦方向の差し縫い痕
30	軒丸瓦	A.26	8 B 黄土	24.3	15.6	1.4	13.5			II	
31	軒丸瓦	A.27	10C 黄土	30.7	12.6	1.4	13.7				外面は酸化
32	軒丸瓦	A.27	3 C (天の門) 表土				14.4				B
33	軒丸瓦	A.28	11A			1.3	13.7				外面は酸化
34	軒丸瓦	A.29	10 D 黄土				12.5		○		A
35	軒丸瓦	A.30	7 C 黄土								
36	軒丸瓦	A.31	4 B 黄土			1.3	13.8				外面は酸化
37	軒丸瓦	A.31	4 B 黄土				13.8				外面は酸化
38	軒丸瓦	A.32	3 C 黄土				17.3				
39	軒丸瓦	A.33	7 D 黄土			1.4	13.4		○		

第1表 出土瓦一覧表(1)

番号	遺構	分類	出土位置	長	幅	厚	瓦当径	胎砂	瓦尺	接合	備考
40	軒瓦	A34	7C表土	12.8	1.4		12.9		I		
41	軒瓦	A34	10B表土				13.4			B	
42	軒瓦	A34	4B表土				13.9				外周は酸化 外周は酸化
43	軒瓦	A35	7D表土		1.4		13.2				外周は酸化
44	軒瓦	A39	4B表土				14.0		A		外周は酸化
45	軒瓦	A39	4B表土				13.9				
46	軒瓦	A37	4B表土				13.6			B	
47	軒瓦	A38	7D表土	12.3	1.2		13.1		II		外周は酸化 外周は酸化
48	軒瓦	A38	7B表土	15.0	1.0		12.8				外周は酸化 外周は酸化
49	軒瓦	A40	7C表土				13.3				外周は酸化 外周は酸化
50	軒瓦	A41	10A表土			1.5	13.8				内面二枚方向の表し縫い痕、外周は酸化 外周は酸化
51	軒瓦	A42	7D表土	24.7	12.3	1.2	13.0		II	B	
52	軒瓦	A43	11A				13.7				
53	軒瓦	A45	10C表土				(12.6)	○			
54	軒瓦	A44	2D表土			1.6	13.7	○			
55	軒瓦	A45	10D表土			1.6	14.3	○			
56	軒瓦	A45	3A表土				20.4	○			
57	軒瓦	A48	7B表土				113.2	○			
58	軒瓦	A48	7B表土				14.0				
59	軒瓦	A49	10C表土				(14.6)	○			
60	軒瓦	B1	4B表土	30.7	11.9	1.5	13.2		I		
61	軒瓦	B1	4B表土			1.5	13.7	○			
62	軒瓦	B1	3A表土			1.5		○			
63	軒瓦	B1	3C表土					○			
64	軒瓦	B3	10D表土					○			
65	軒瓦	D1	3A表土					○			
66	軒瓦	D1	4B表土					○			
67	軒瓦	D1	10D表土					○			
68	軒瓦	D1	2C表土					○			
69	軒瓦	D2	10B表土				15.4				
70	軒瓦	D3	2D表土		1.7		13.7	○	I		
71	軒瓦	D3	10C表土				13.7	○			
72	軒瓦	D4	3D表土				13.7	○			
73	軒瓦	D4	10B表土					○		A	
74	軒瓦	D5	4B表土			1.6	13.1	○	I	A	
75	軒瓦	D5	3A表土				12.9	○		A	
76	軒瓦	D6	3D表土		1.8			○	I	A	
77	軒瓦	D7	3A表土				15.4	○		A	
78	軒瓦	D8	3A表土								
79	軒瓦	D9	3A表土								
80	軒瓦	D10	4B表土								
81	軒瓦	D11	4B表土								
82	軒瓦	D12	4B表土								
83	軒瓦	D13	3A表土		1.4			○			
84	軒瓦	D14	3D表土								
85	軒瓦	E1	10D表土			1.9	(16.2)	○			
86	軒瓦	E2	10C表土			1.3	(13.4)				
87	軒瓦	E2	10D表土				(13.8)				
88	軒瓦	E3	10D表土				12.6	○		A	
89	軒瓦	F1	10B表土				12.8			A	
90	軒瓦	F2	11A			1.6	12.6				
91	軒瓦	F3	3A表土				15.6		I	A	
92	軒瓦	F4	4B表土			1.4	(12.4)	○	I	A	
93	軒瓦	F4	4B表土					○			
94	軒瓦	F5	7C表土	12.3	1.7			○	I		
95	軒瓦	F6	3C表土					○			
96	軒瓦	G3	3A表土	13.2	1.4	13.2		○	I		
97	軒瓦	G3	10B表土								
98	軒瓦	G1	10B表土	26.6	12.8	1.2	14.7		II		内面二枚方向の表し縫い痕、外周は酸化 外周は酸化
99	軒瓦	G1	10A表土				15.0			B	
100	軒瓦	G2	8B表土	25.7	11.9	1.2			II		内面二枚方向の表し縫い痕 外周は酸化
101	軒瓦	G2	7D表土				13.9				
102	軒瓦	G2	8B表土				13.6			C	
103	軒瓦	H1	10C表土			1.5			II		外周は酸化 外周は酸化
104	軒瓦	H2	10B表土				15.6				
221	軒瓦	A4	1区躯体部出土・瓦層				14.7	○			
222	軒瓦	A47	4区躯体部出土・瓦層			1.8	14.5				
223	軒瓦	A30	4区躯体部出土・瓦層			1.7	15.0	○			
224	軒瓦	D1	4区躯体部出土・瓦層				17.1				
225	軒瓦	B1	4区躯体部出土・瓦層				13.9	○			
226	軒瓦	D5	4区躯体部出土・瓦層		1.4		12.7				
227	軒瓦	B4	1区躯体部出土・瓦層				18.6	○		B	
228	軒瓦	C1	4区躯体部出土・瓦層								
229	軒瓦	C2	4区躯体部出土・瓦層								

軒平瓦・軒棧瓦(長・幅・厚・瓦当径の単位はcm。胎砂は瓦当面での有無。)

番号	遺構	分類	出土位置	長	幅	厚	瓦当径	胎砂	備考
105	軒平瓦	A1	10B表土			2.0	6.2	○	
106	軒平瓦	A1	3A表土			1.9	4.3		
107	軒平瓦	A3	8B表土				4.0	○	
108	軒平瓦	A3	10D表土				3.9	○	
109	軒平瓦	A4	7D表土			1.6	3.0	○	
110	軒平瓦	B1	7D表土	22.2		1.5	2.1		
111	軒平瓦	B1	7D表土	21.9	20.3	1.2	3.2		
112	軒平瓦	B1	10D表土			1.7	2.9		
113	軒平瓦	B2	10B表土			1.3			
114	軒平瓦	B3	3A表土			1.9	3.3	○	
115	軒平瓦	B4	10D平アトシ			1.7	4.2	○	
116	軒平瓦	B3	2D表土			1.4	3.4		
117	軒平瓦	B6	3C(犬の門)表土			1.3	3.0	○	
118	軒平瓦	B7	10D表土			1.3	3.3		
119	軒平瓦	B3	8B表土				3.0		
120	軒平瓦	B9	8B表土				3.4	○	
121	軒平瓦	B10	2B表土			1.5	3.8		

第2表 出土瓦一覧表(2)

番号	瓦種	分類	出土位置	長	幅	厚	瓦端厚	備考
122	軒平瓦	B11	8 B表土				3.8	
123	軒平瓦	C1	3 A表土			2.0	5.1	○
124	軒平瓦	C1	3 A表土				4.9	○
125	軒平瓦	C1	3 A表土			1.8	5.1	○
126	軒平瓦	C2	2 D表土				5.3	○
127	軒平瓦	D1	7 D表土	25.3	24.0	1.5	5.8	外面は酸化
128	軒平瓦	D2	10 B屋根筋				3.8	
129	軒平瓦	D2	8 B表土			1.5	3.9	外面は酸化
130	軒平瓦	D3	2 D表土			1.4	3.9	
131	軒平瓦	D3	10 B表土			1.4	2.7	外面は酸化
132	軒平瓦	D4	10 B表土		26.4	1.6	4.7	
133	軒平瓦	D5	2 B表土	25.8	22.9	1.4	3.9	○
134	軒平瓦	D6	7 D表土		23.2	1.5	3.8	外面は酸化
135	軒平瓦	D6	10 B屋根筋		22.4	1.5	3.3	外面は酸化
136	軒平瓦	D7	7 D表土			1.4	3.7	外面は酸化
137	軒平瓦	D8	4 A表土			1.9	4.2	外面は酸化
138	軒平瓦	D9	8 B表土			1.5	3.5	外面は酸化
139	軒平瓦	D9	4 B表土			1.5	4.3	外面は酸化
140	軒平瓦	D10	4 B表土		23.9	1.5	3.4	○
141	軒平瓦	D11	7 D表土			1.6	3.6	
142	軒平瓦	D12	5 B表土			1.7	4.2	外面は酸化
143	軒平瓦	E1	5 A表土		26.7	1.9	3.4	外面は酸化
144	軒平瓦	E2	4 B表土			1.9	5.1	○
145	軒平瓦	E4	3 A表土				3.3	
146	軒平瓦	E3	3 A表土			22.0	1.5	3.0
147	軒平瓦	F	12 A			1.5	2.7	
148	軒平瓦	F	3 C (天の門) 表土				3.5	
149	軒平瓦	G	3 A表土			1.4	3.4	
150	軒平瓦	G	7 D表土				4.1	
151	軒平瓦	H	3 C (天の門) 表土			1.4	4.0	
152	軒平瓦	I	3 A表土			2.0	5.5	○
153	軒平瓦	I	2 A表土				5.5	○
154	軒平瓦	J	7 C表土		21.9	1.4	3.1	凸面は酸化
155	軒平瓦	K	4 A表土			1.6	4.4	
220	軒平瓦	L	4反側体埴土・瓦層				2.2	
221	軒平瓦	L	4反側体埴土・瓦層				2.2	
222	軒平瓦	K	4反側体埴土・瓦層				2.2	
156	軒平瓦		10 D表土		24.7	1.5	3.9	
157	軒平瓦		2 D表土			1.6	3.4	

丸瓦・平瓦・棧瓦 (長・幅・厚の単位はcm。布目は1cmあたりの本数。)

番号	瓦種	分類	出土位置	長	幅	厚	布目	備考
158	丸瓦	a	10 B表土	32.0	18.6	2.2	7×7	
159	丸瓦	a	7 C表土	14.9	2.7	10×10		凹面に縦方向の差し継ぎ痕
160	丸瓦	a	3 A表土	30.3	16.1	1.9	12×7	
161	丸瓦	b	7 C表土	33.1	16.7	2.4	11×11	
162	丸瓦	b	5 A表土	30.6		1.8	13×11	
163	丸瓦	b	5 A表土	27.9	14.0	1.4	10×10	
164	丸瓦	b	10 D表土	23.5	12.4	1.6	9×9	
165	丸瓦	b	5 A表土	24.0	12.6	1.6	9×9	
166	丸瓦	b	7 D表土	23.2	12.9	1.6	13×12	凹面に縦方向の差し継ぎ痕
167	丸瓦	b	3 A表土	25.4	14.5	1.6		
168	丸瓦	b	5 A表土	21.8	12.2	1.2		凹面に縦方向の差し継ぎ痕
169	丸瓦	b	5 C表土	24.3	13.8	1.6		凹面に縦方向の差し継ぎ痕
170	丸瓦	b	10 D表土	20.4	12.2	1.4		
171	平瓦	a	10 B表土			26.7	2.4	
172	平瓦	b	7 C表土			26.2	2.1	
173	平瓦		7 D表土			33.3	2.3	
174	平瓦		5 A表土			25.9	23.1	凸面に糠砂
175	平瓦		7 D表土			25.5	21.9	凸面に糠砂
176	平瓦		8 B表土			24.8	20.4	凸面に糠砂
177	平瓦		10 D表土			24.2	21.1	凸面に糠砂
178	平瓦		10 D表土			22.8	18.8	凸面に糠砂
179	棧瓦		7 C表土			30.7	34.3	1.4
223	平瓦		8 B表土			12.7	11.9	1.6

鳥雲瓦・菊瓦 (長・幅・厚・瓦当径の単位はcm。糠砂は瓦当面の有無。)

番号	瓦種	分類	出土位置	長	幅	厚	瓦当径	糠砂	備考
180	鳥雲瓦		2 A表土				14.5		
181	菊瓦	1	12 A			1.5	12.5		
182	菊瓦	2	4 B表土		7.5	1.7			
183	菊瓦	2	10 B表土						
184	菊瓦	4	10 C埴土				7.7		
185	菊瓦	5	3 C表土			1.3	11.6	○	
186	菊瓦	5	3 D表土				6.7	○	
187	菊瓦	5	3 C埴土	10.0	6.1	1.7	6.7	○	
224	菊瓦	5	4反側体埴土・瓦層				11.4	○	

その他の瓦 (長・幅・厚の単位はcm。)

番号	瓦種	分類	出土位置	長	幅	厚	備考
188	瓦瓦		10 D表土				
189	椽	本体	10 B表土				
190	椽	本体	3 C (天の門) 表土				
191	椽	筋柱	8 B表土				
192	椽	筋柱	3 C (天の門) 表土				
193	椽	筋柱	3 C (天の門) 表土				
194	軒平瓦		3 A表土		25.0	11.2	1.3
195	軒平瓦		4 A表土		24.9	11.5	1.9
196	軒平瓦		10 D表土		25.3	10.5	1.6
197	田戸瓦		3 C (天の門) 表土		9.2	16.2	1.4
198	不明出瓦		8 B表土			13.4	1.4
199	不明出瓦		8 B表土		26.2	22.6	1.4

第3表 出土瓦一覧表 (3)

第2節 その他の遺物

1. 土器・陶磁器 (200-208) [図版78]

土器・陶磁器の出土量はきわめて少ない。200-202は飛鳥・奈良時代の須恵器である。200 (2 A表土土) は杯G蓋、201 (3 D表土土) は杯B蓋のつまみ、202 (10 D表土土) は高杯である。203 (2 A表土土) は中世後期の土銅である。205-208は江戸時代の遺物である。205 (10 C整地層出土) は土師器で底部は糸切りである。206 (3 C表土土) は唐津焼の徳利の底部で、内外面が赤褐色に施釉されている。17世紀前半のものである。207 (10 D整地層出土) は肥前系陶器の土壺で、内面と高台量付が露胎である。18世紀前半のものである。208 (4 A表土土) は瀬戸焼の行平鍋で、内外面に灰釉が施されている。19世紀前半以降のものである。

2. 金属製品 (209-220) [図版78、写真図版36]

209-220は8 B区で検出された鉄筒埋納遺構に伴うものである。210は直径9.5cmの鉄製の筒である。器壁の厚さは0.2mmで、底部の縁を2mm程度立ち上げ、側板をその立ち上がり巻き付けている。接合の方法はわからない。底部の中央には鉄銭が付着している。209の瓦を蓋にしており、瓦の凹面に筒の口縁の形がついている。211-220は鉄筒の周囲から出土した銭貨で、10枚出土している。銭貨は全て寛永通宝である。211-217が銅銭で、218-220が鉄銭である。銅銭は211が古寛永である以外は新寛永である。212は背面に「元」の字、215は背面に字あるいはキズがある。鉄銭が出土していることから鉄筒埋納遺構は1739年以降のもと考えられる。

3. 石造品 (234-246) [写真図版38]

234-244は石垣の裏込めとして使用された花崗岩製の五輪塔と一石五輪塔である。245・246は石垣の石材でやや不鮮明であるが、○に布の字が書かれているようである。245は竜山石、246は花崗岩である。

番号	種類	出土位置	残存高	空輪高	空輪幅	頂輪高	風輪幅	火輪高	火輪幅	水輪高	水輪幅	地輪高	地輪幅
234	五輪塔	10区石垣裏込め	22.0	12.0	14.2	8.4	16.5						
235	五輪塔	10区石垣裏込め	21.0	11.7	14.3	7.0	14.6						
236	五輪塔	10区石垣裏込め	16.0					16.0	23.3				
237	五輪塔	10区石垣裏込め	19.8							19.8	24.0		
238	一石五輪塔	4区石垣裏込め	22.0				19.0	11.2	17.0				
239	一石五輪塔	10区石垣裏込め	59.5	7.7	9.6	4.2	10.0	8.2	13.4	6.0	13.2		14.8
240	一石五輪塔	4区石垣裏込め	18.3	10.5	11.6	6.2	13.6						
241	一石五輪塔	10区石垣裏込め	13.0	7.9	9.6	4.0	10.0						
242	一石五輪塔	10区石垣裏込め	14.5	7.4	9.2	4.0	9.5						
243	一石五輪塔	10区石垣裏込め	21.6						12.3	6.0	12.3		12.3
244	一石五輪塔	10区石垣裏込め	18.2										14.2

(単位はcm)

第5表 五輪塔法量表

第5章 まとめ

第1節 遺構について

今回の調査は解体箇所の平面調査を主とし、解体に伴う断面調査についてはごく一部に留まった。ゆえに、基本的には上面のみの調査で時期的に新しいものが多いと考えられる。遺物についてもほとんどが表上から出土しているため、二の丸北面石垣の焼土・瓦層出土の例を除いて時期を示す状態のものは皆無である。したがって、得られた情報はごく限られたものである。本来ならば、解体修理時に得られたアーチと併せて検討されなければならないが、今後に委ねたい。

盛土

郭や建物の台基の構築に際しては盛土や地山の成形が行われている。今回の調査で、特に盛土が施されていることが確認されたのは、本丸南面石垣と二の丸北面石垣である。本丸南面石垣については石垣より内に約12mのところまで地山が確認できたことから、非常に大がかりな盛土を推定することができる。地山より外側の盛土は約40～80cmの厚さで平行に積まれ、地山より上の盛土は50cm以下と薄いようである。二の丸北面石垣では崩壊箇所の中央部に谷状の凹みが認められ、丘陵の自然地形を残していると思われる。谷状の部分を中心に盛土され、まず寛永8年の火災によって生じた瓦礫で埋められている。このことは、築城当初に二の丸北面には石垣が存在していなかった可能性が高いことを示している。瓦礫層の上にはさらに約1～2mの盛土がなされている。盛土は本丸南面石垣とは異なり、外側に傾斜して積まれている。丘陵裾部の出っ張った部分は根切りされている。これらに対して、東の丸東面石垣、東帯郭西面石垣、稲荷郭南面・東面石垣では丘陵を比較的大きく根切りし、その地山の上に約1～2.5mの盛土を施している。

建物の台基部分については三の丸の門と北の丸虎口のみその状況を確認した。三の丸太鼓門では平らな地面の上にさほどしまりのよくない砂を積み上げている。砂層部分のみでは築成単位を認めることはできない(栗石部分の切れ込みにより確認できる)。北の丸虎口では地山を削り残して芯としている。

基礎

桐木や土留めの杭などは認められず、根石を直接地面の上に置いている。稲荷郭南面石垣でのみ石垣全面を粘土で突き固めて強度を高めていることが確認された。

石垣石材

石垣に使用されている石材には花崗岩と竜山石があり、竜山石が多い部分についてはやや新しい時期に造られたと考えられている。今回の調査では、竜山石の利用は櫓台、櫓門台などの建物の台基などにおいて多くみられた。乾槽では確実に櫓台の東南隅は積み足したものであり、天の門の渡櫓台も東の丸北面石垣に付け足した形で造られている。その他で明瞭に認められるのは二の丸北面石垣(4A・B区)と東帯郭西面石垣(2C区)である。二の丸北面石垣は調査により、寛永8年の火災以後のものであることが明らかとなった。東帯郭西面石垣(2C区)では石垣の側面を観察すると、上部で竜山石の利用が見られ、下部では見られない。このことから段より北側の石垣は後補のものであると考えられる。このように、これまでの説を追認する結果となっている。

第2節 遺物について

出土した遺物はほとんどが瓦であり、その時期的な変遷を検討する。ただし、二の丸北面石垣の焼土・瓦層から出土したもの以外は表土から出土したものであり、出土状況からの検討はほとんどできない。ここでは文様と技法について検討する。

軒丸瓦

まず、明石城跡では城主の家紋を瓦当文様とする軒丸瓦が比較的多く出土している。17世紀後半までは城主が領繁に交替するため、変遷を追うことが容易である。

池田家（1600頃～1617）に関わるものは桐紋（B類）と揚羽蝶紋（C類）である。また、軒平瓦でも揚羽蝶紋（K類）のいわゆる滴水瓦が出土している。

小笠原家（1617～1633）に関わるものは三階菱紋（D類）である。また、軒平瓦でも三階菱を中心飾りとするもの（I類）がある。

戸田松平家（1633～1639）、大久保家（1639～1649）に関わるものは認められない。ただし、戸田松平家の六曜星文の鬼瓦は出土している。

藤井松平家（1649～1679）に関わるものは剣酢菱紋（E類）、酢菱紋（F類）である。

本多家（1679～1682）に関わるものは今回の調査では出土しなかったが、昭和52～54年度の調査で本字文のものが出土している。⁽⁷⁾

越前松平家（1682～1871）に関わるものは山字紋（G類）、三葉葵（H類）である。ただし、三葉葵は文政10年（1827）に將軍家齊の25男齊宣を養子として迎えて以降に使用されたものと思われる。これらのうち、内面に内叩きの痕跡が明瞭に認められる（丸瓦Ⅱ類）のは山字紋のうちG2・3類と三葉葵（H類）のみである。このことから、山字紋のうちG1類まで（すなわち、少なくとも17世紀後半まで）は内叩きの痕跡が明瞭に認められないI類の丸瓦が使用されていたと考えられる。

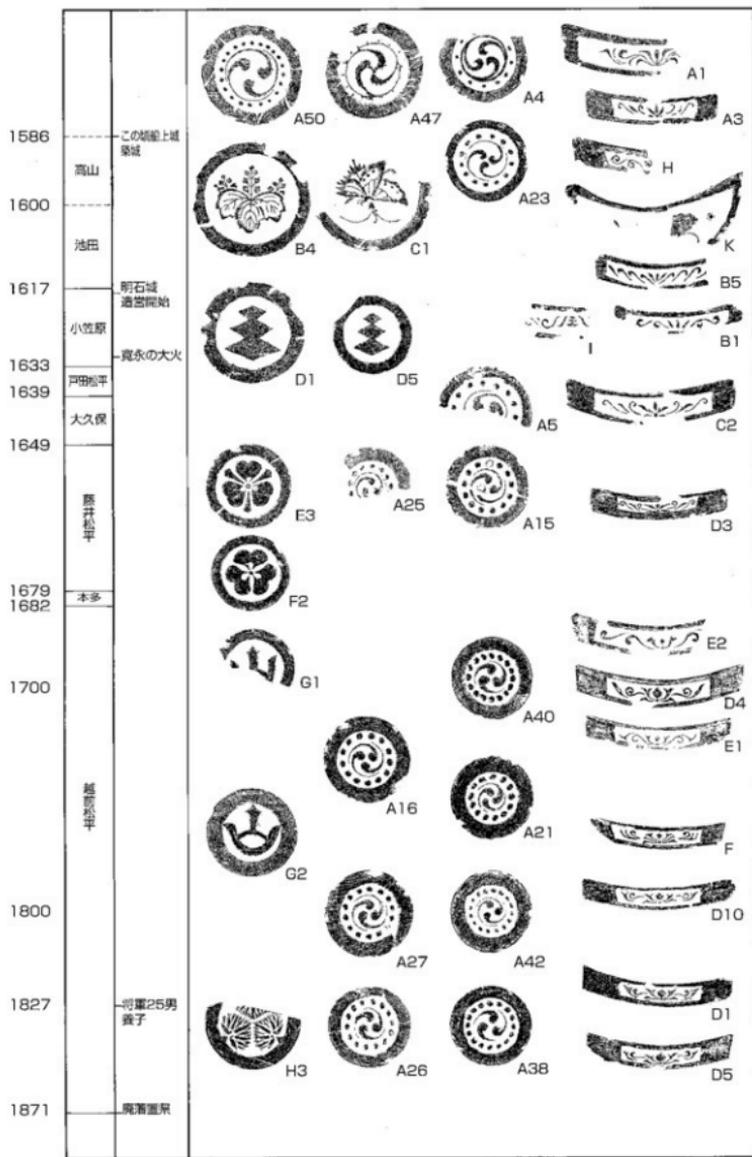
巴文については、まず二の丸北面石垣の焼土・瓦層から出土したものが、寛永8年（1631）以前のものと考えられる。A47、50類など珠文が小さく数の多いものや、A4類など巴頭部が巻き込んだようになっているものが認められる。

寛永8年（1631）の火災後、大規模な改修が行われたと想定されるが、明瞭にこの時期のものと特定できるものはない。1633年以降、丸瓦Ⅱ類が明瞭には使用されない17世紀末頃までのものについては、丸瓦Ⅰ類が使用されているA5、15、40類、Ⅱ類ではあるがそれほど内叩き痕が明瞭でないA25類などを当てたい。

Ⅱ類の丸瓦が使用された18・19世紀の巴文の軒丸瓦については時期的な分別は難しい。武家屋敷で18世紀中に埋没したと考えられる遺構から出土したもの（武家屋敷S D3101-1004）としてA21類をあげることができるのみである。⁽⁸⁾ 全般的な傾向としては珠文が16個以上の多いものは新しいものと考えられる。⁽⁹⁾

軒平瓦

二の丸北面石垣の焼土・瓦層から出土したものなど、寛永8年（1631）以前のものと考えられるものには、中心飾りが五葉（A類）、三葉（B類）、杉の葉状（H類）、三階菱（I類）、揚羽蝶（K類）などのものが挙げられる。このうち、杉の葉状（H類）が船山城から出土し、揚羽蝶（K類）が池田氏に関わるものであることから、小笠原家以前のものである。中心飾りが小笠原家の家紋である三階菱（I類）



第10図 軒瓦の変遷

であるものは、当然ながら三階菱紋の軒丸瓦（D類）とセットになるものであるが、軒丸瓦D類の出土量が非常に多いのに対して軒平瓦I類は非常に少ない。寛永8年（1631）以前のもと考えられる軒平瓦のなかで、出土量が圧倒的に多いのは中心飾りが三葉のB1類で、これも軒丸瓦D類とセットになると考えられる。

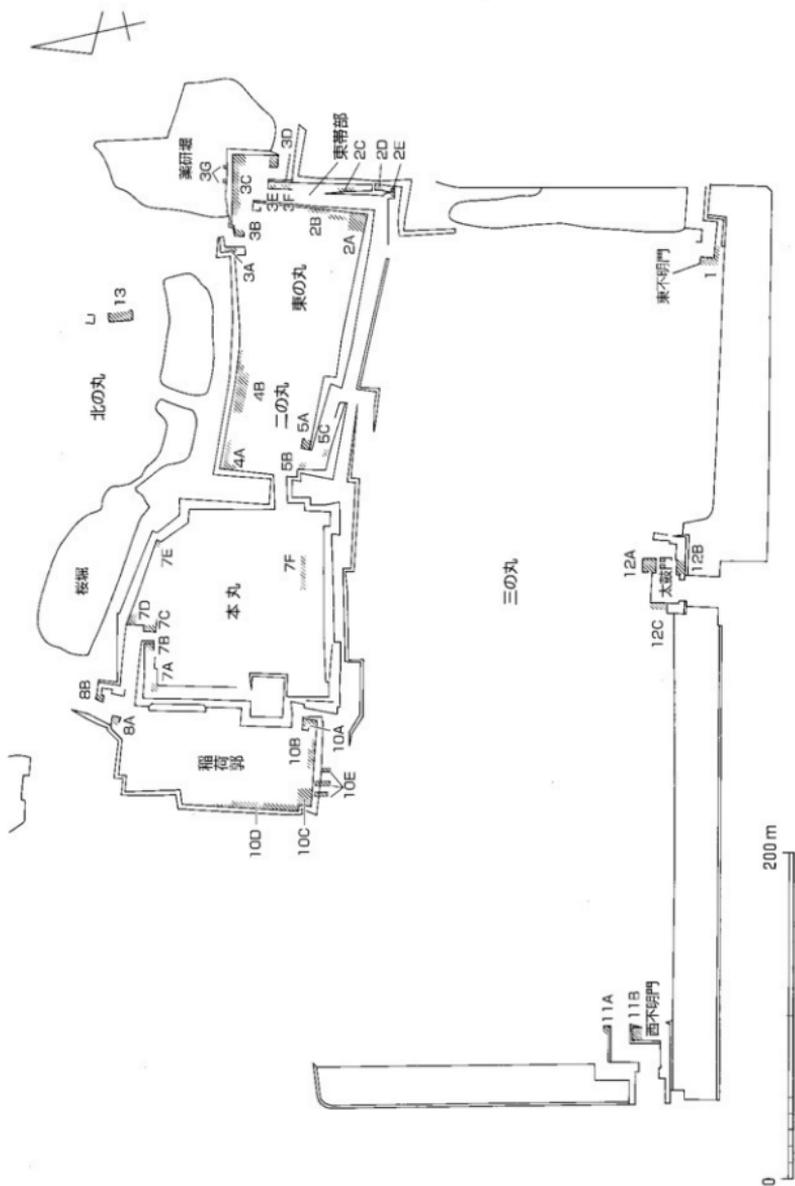
軒丸瓦と同様に、寛永8年（1631）の火災後のものについては、明瞭に時期を特定できるものはほとんどない。そこで、住友銅吹所（大阪市）の1724年火災焼土層より出土した瓦を参考としながら考えてみたい。⁽¹⁰⁾住友銅吹所出土の橘唐草文の軒平瓦には、花頭部はあまり影らまず、先端が3つに分かれて尖り気味のもが認められ、ずんぐりと影らむものは認められない。橘唐草文のようなものとして明石城跡ではC類、D3類、D10類、E類、F類などが挙げられる。このうちC類は唐草部の構成がA3類と類似することからやや古いものと考えられる。E1類は銅吹所988と文様の類似しているし、武家屋敷で18世紀中に埋没したと考えられる遺構から出土している（武家屋敷S D3101-1028）。⁽¹¹⁾F類は武家屋敷で19世紀初頭に埋没したと考えられる遺構から出土している（武家屋敷S K25021-1033・1034）。⁽¹²⁾D10類は唐草部の構成が花頭部の影らむものと類似していることから新しい傾向のものと考えられる。

D類のうち花頭部の影らむものは、武家屋敷の18世紀代の遺構からは出土していないので、19世紀を中心としたものと考えたい。

注

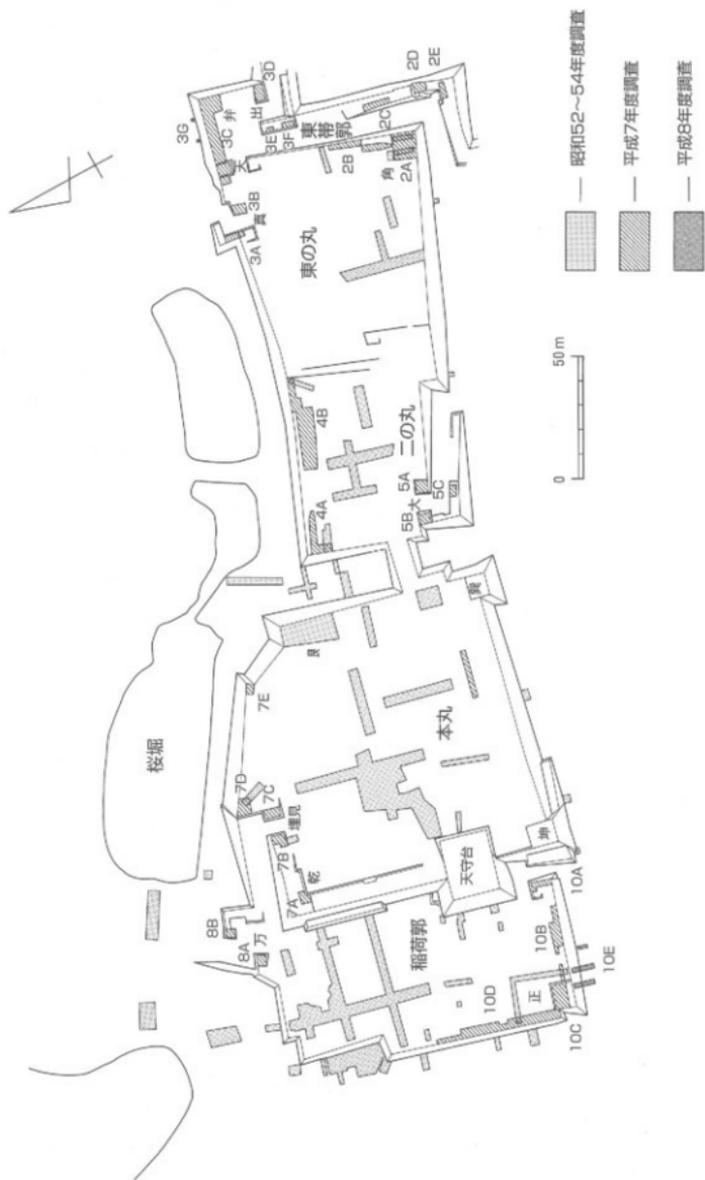
- (1) 松下勝・加古千恵子・渡辺昇・山下史朗『明石城跡』兵庫県教育委員会 1984年
- (2) 渡辺昇・岡田章一・森岡みゆき『明石城跡Ⅱ』兵庫県教育委員会 1986年
- (3) 瓦の記述にあたっては次の文献を参考とした。
森田克行『摂津高槻城』高槻市教育委員会 1984年
毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩『法隆寺の至宝 第15巻 瓦』1992年
- (4) 黒田慶一「池田氏の桐紋瓦の再検討」『淡路洲本城』城郭談話会 1995年
- (5) 有本隆「姫路城の瓦と文様」『姫路市史』姫路市 1988年
- (6) 稲原昭嘉「船上城跡」『明石市埋蔵文化財概報—平成3年度—』明石市教育委員会 1993年
- (7) 注(1)文献に同じ。
- (8) 山下史朗・村上泰樹ほか『明石城武家屋敷跡』兵庫県教育委員会 1992年
- (9) 鳥谷氏は「文政2～4年(1819～1921)以前の「界丹治利右衛門」銘を有する軒丸瓦の珠文数は12個であるのに対して、それ以降の「界改丹治利右衛門」銘を持つ軒丸瓦は、全く珠文が皆無な事例も存在するが、その大半は珠文数16個を数えることができる。」としてより新しい時期に珠文数が増加することを指摘している。鳥谷和彦「近世堺の瓦仲間と刻印瓦」『大阪市文化財協会研究紀要』第2号 1999年
- (10) 鈴木秀典「瓦」『住友銅吹所跡発掘調査報告』財団法人大阪市文化財協会 1998年
- (11) 注(7)文献に同じ。
- (12) 注(7)文献に同じ。

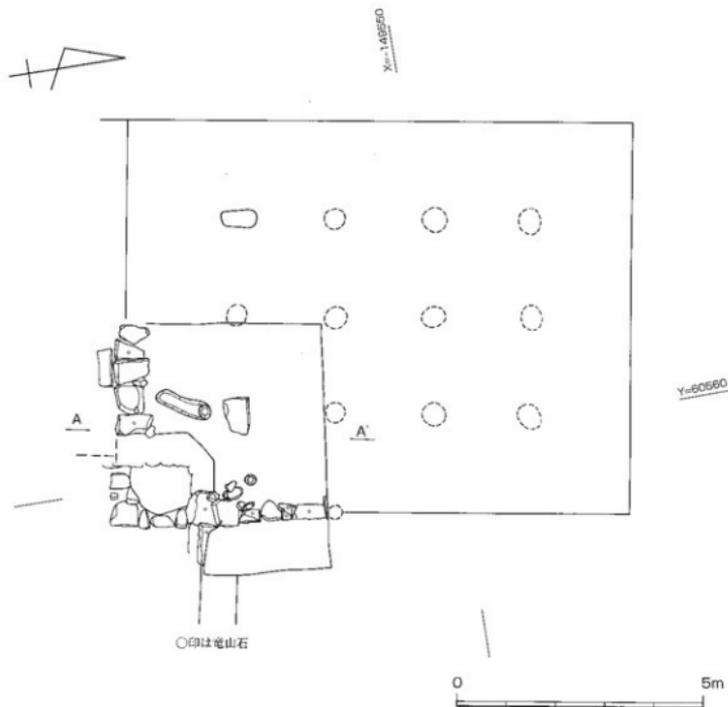
圖 版



図版 2

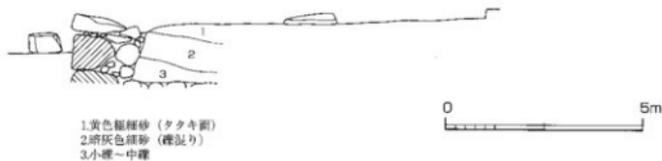
主要部調査区配置図





A

28.0m A'



図版 4

埋見門 (7B・C区) 平面図・断面図

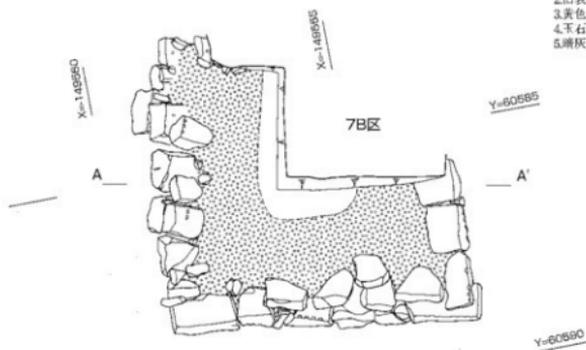


A —

27.0m A'



- 1. 盛上
- 2. 旧衣土
- 3. 黄色層土 (礫混り)
- 4. 下石層
- 5. 暗灰色亜細砂 (礫混り)



X=148585

X=148590

7B区

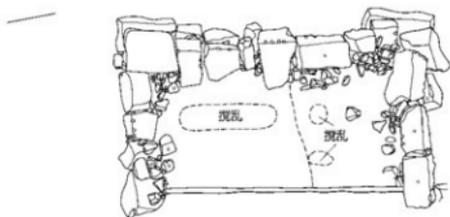
Y=60585

A —

— A'

Y=60590

Y=60595



7C区

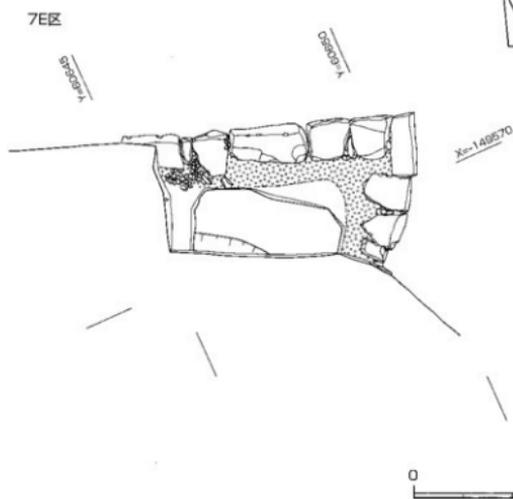
Y=60600

掘孔

掘孔

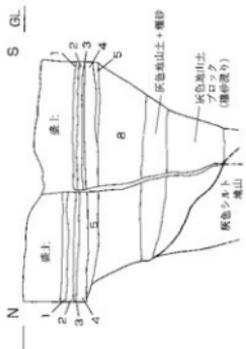


○印は葛山石

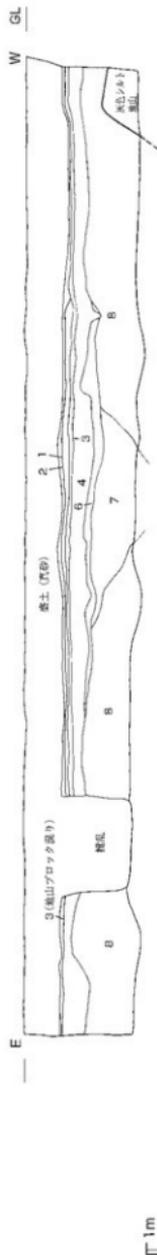


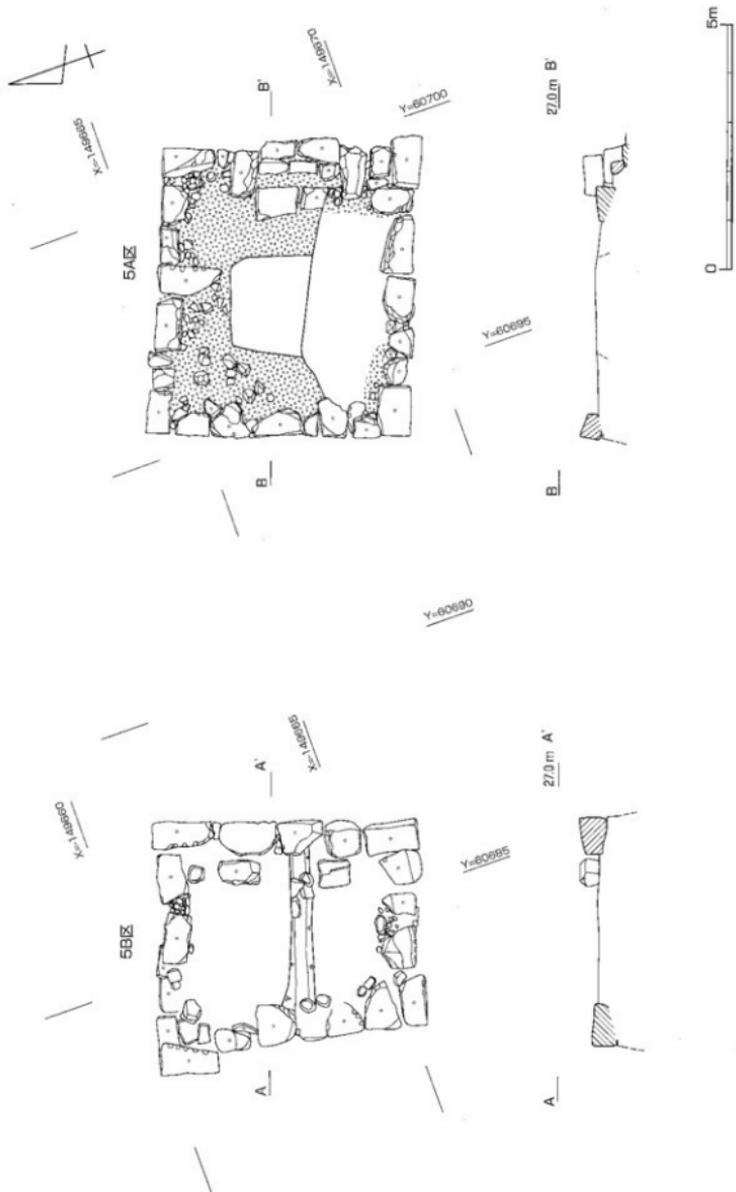
図版 6

本丸南面石垣 (7F区) 断面図



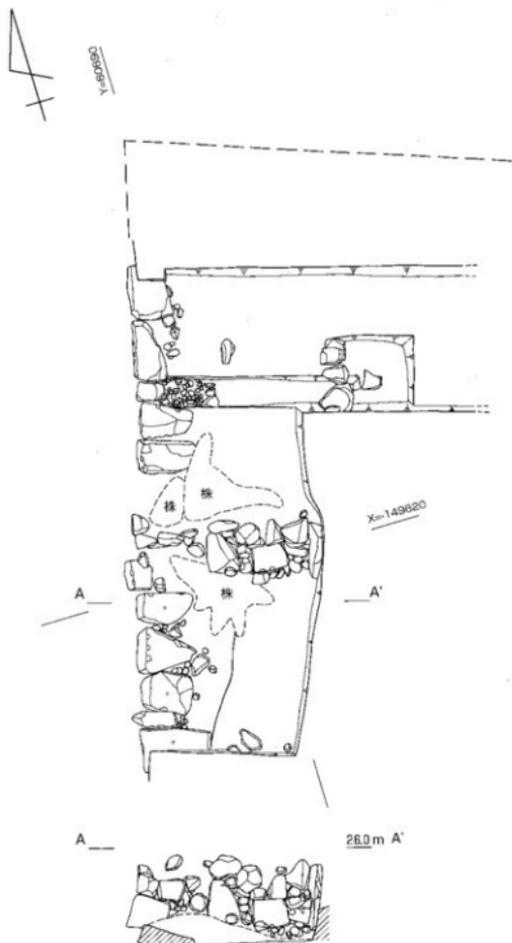
- 1.黒褐色砂利層 (田表土)
- 2.灰褐色小砂利層 (礫山)
- 3.灰褐色中砂利層 (礫山)
- 4.黄褐色+赤褐色細砂-中粒砂リシルト
- 5.黄褐色細砂 (礫山)
- 6.褐色シルト (礫山)
- 7.粗砂 (礫山プロックの1~2cm次の円-玉層を含む)
- 8.灰白色シルト (粗砂の1.5~2cm次の円層を含む)





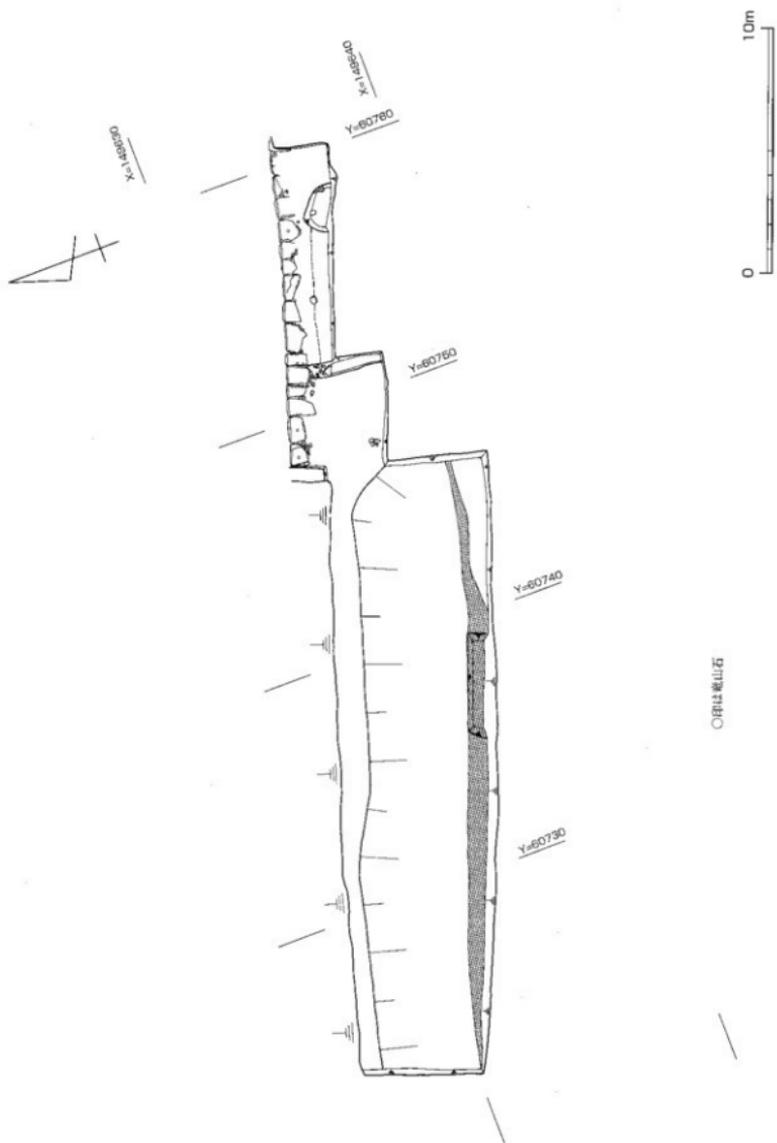
図版 8

二の丸西面石垣（4A区）平面図・側面図



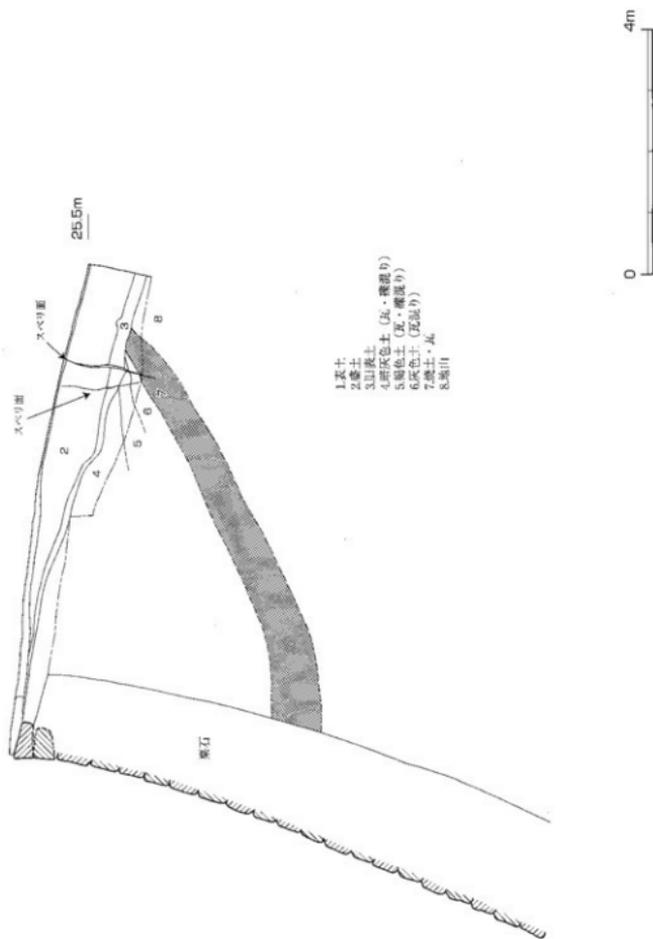
○印は龜山石

0 5m

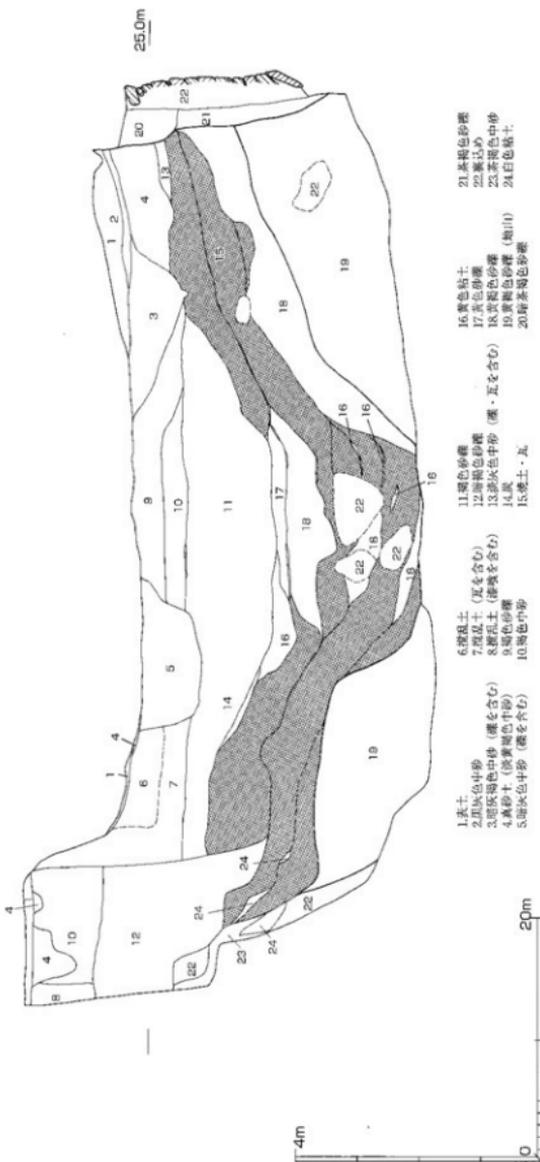
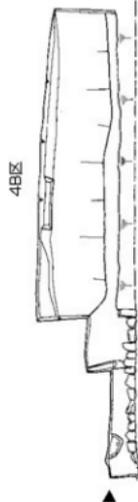
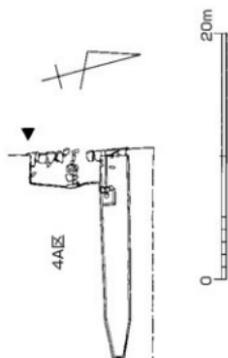


図版10

二の丸北面石垣（4B区）断面図

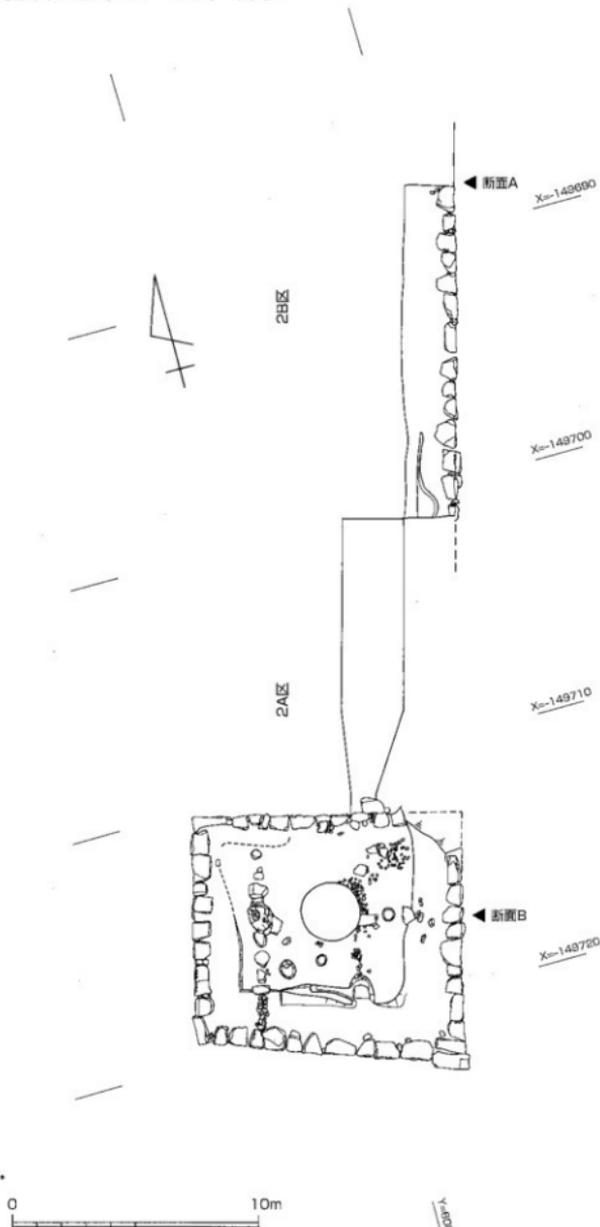


二の丸北面石垣 (4A・B区) 断面図



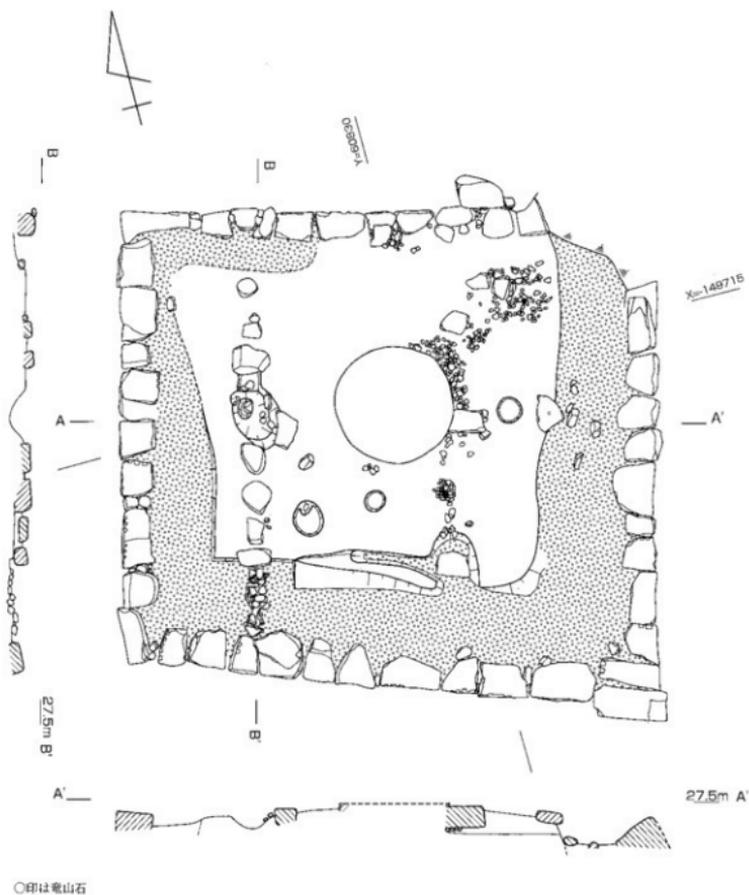
図版12

角の櫓、東の丸東面石垣（2A・B区）平面図



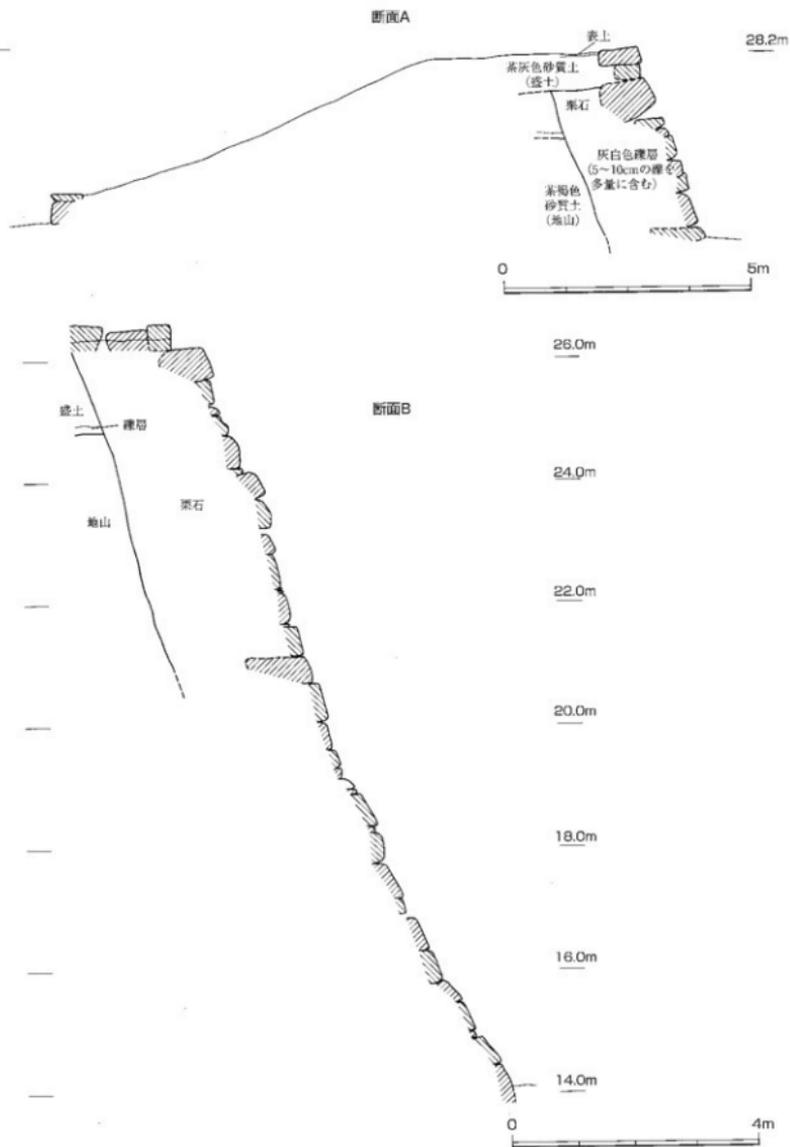
05503P

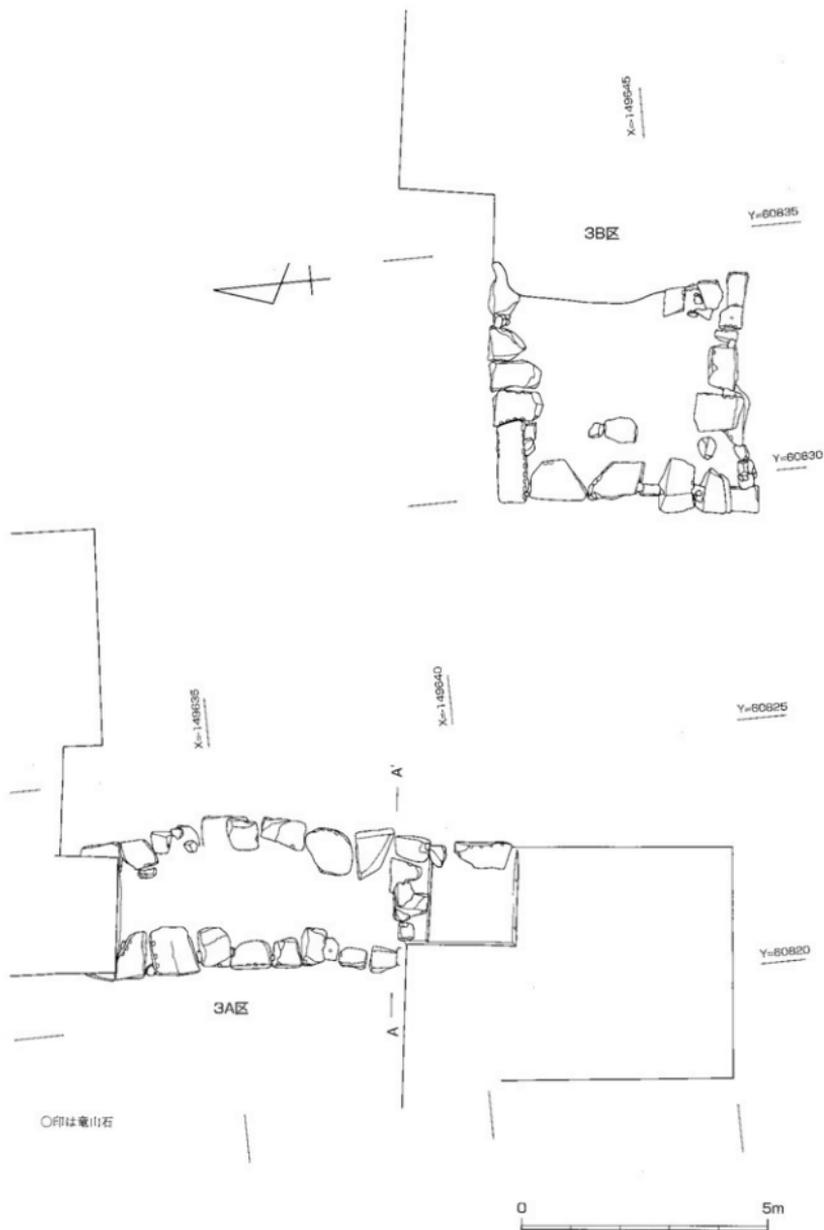
05503P



図版14

角の櫓、東の丸東面石垣（2A・B区）断面図

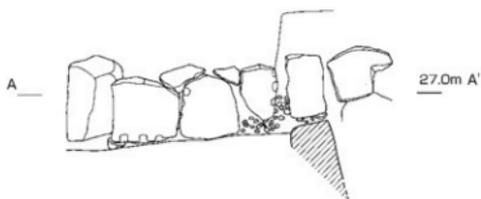




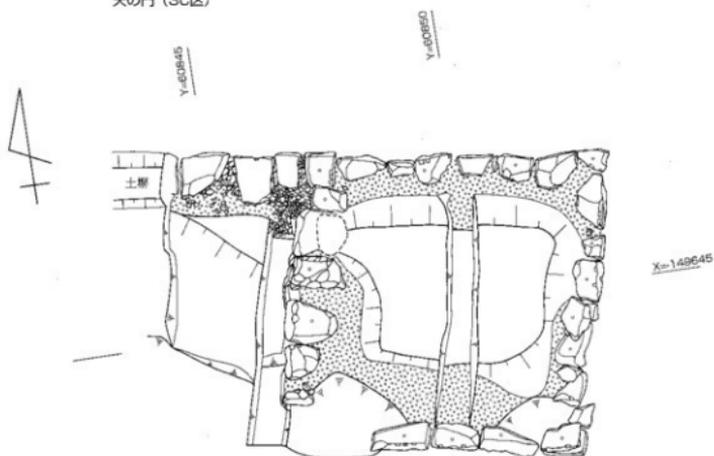
図版16

真の門（3A区）側面図、天の門（3C区）平面図

真の門（3A区）



天の門（3C区）

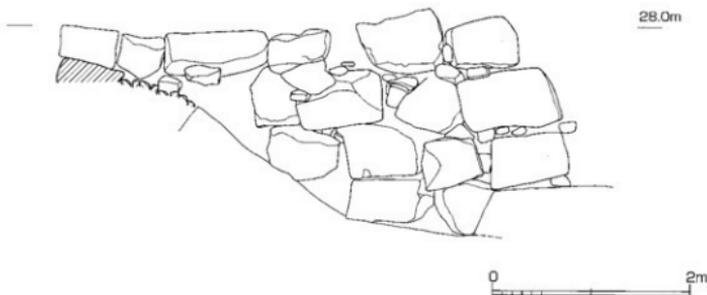


○印は亀山石

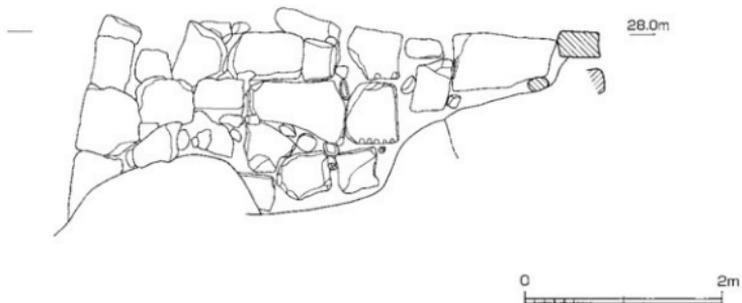


天の門（3C区）東西南側断面図、3C区西側土塀断面図

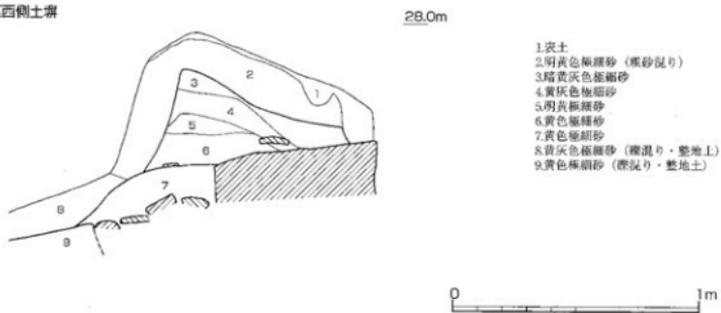
天の門（3C区）西側



天の門（3C区）東側



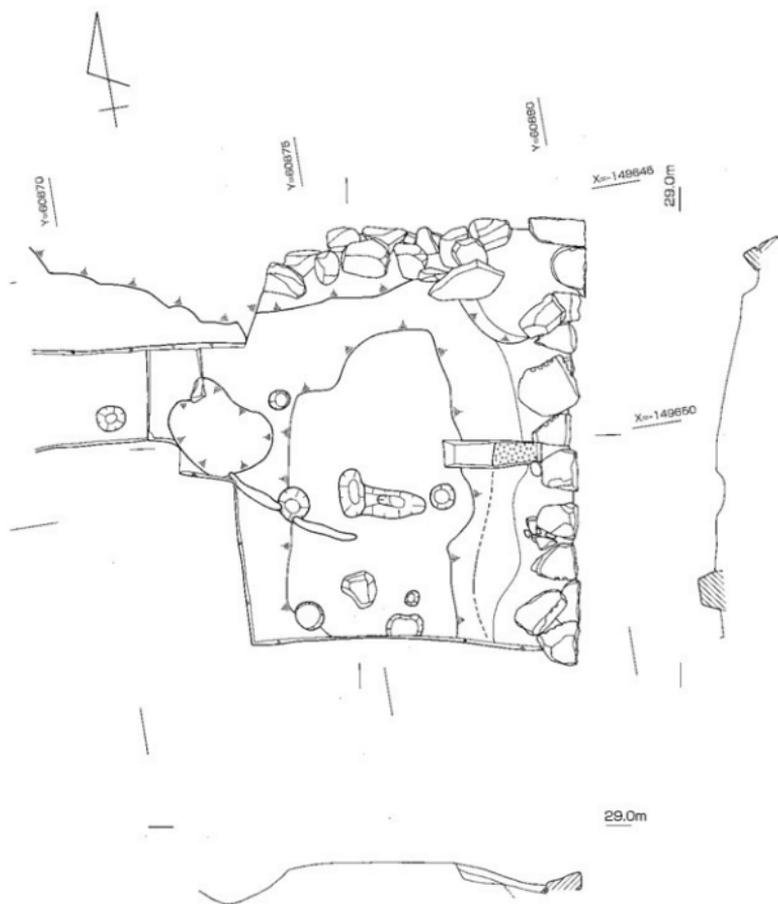
3C区西側土塀



- 1.表土
- 2.明黄色極細砂（塵砂混り）
- 3.暗黄灰色極細砂
- 4.黄灰色極細砂
- 5.明黄極細砂
- 6.黄色極細砂
- 7.黄色極細砂
- 8.黄灰色極細砂（塵混り・整地土）
- 9.黄色極細砂（塵混り・整地土）

図版18

井の櫓 (3C区) 平面図・断面図

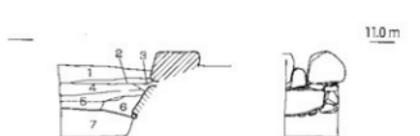


0 5m

東帯郭北面石垣（3G区）トレンチ位置図、断面図、側面図

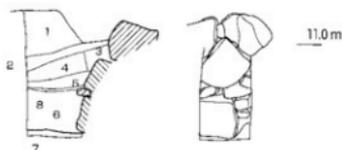


1トレンチ

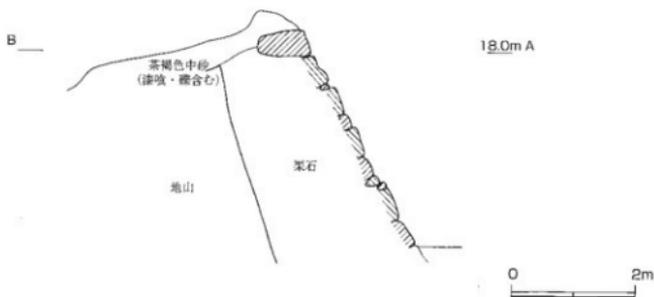


- 1.瓦葺層
- 2.黒色ヘドロ層
- 3.黒灰色粘土（瓦含む）
- 4.青灰色シルト
- 5.緑灰色砂礫（上は青灰、下は緑のぼい）
- 6.青灰色粘土
- 7.緑灰色粘土

2トレンチ

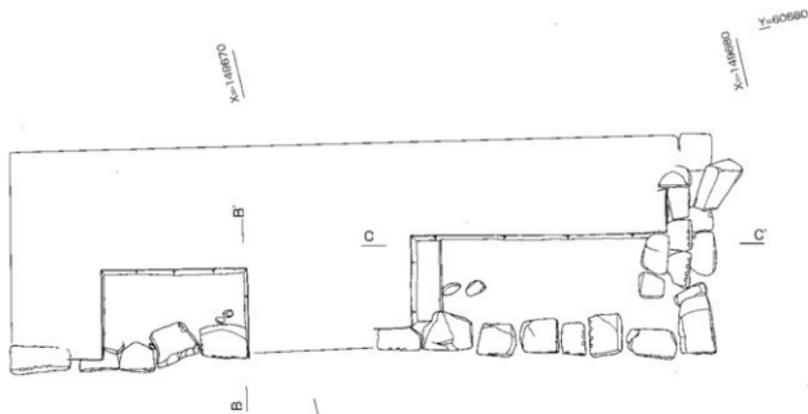
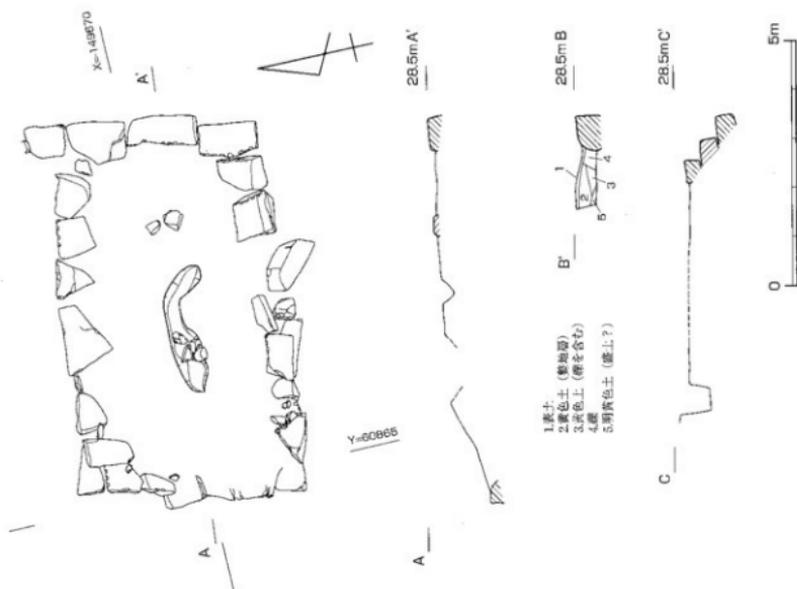


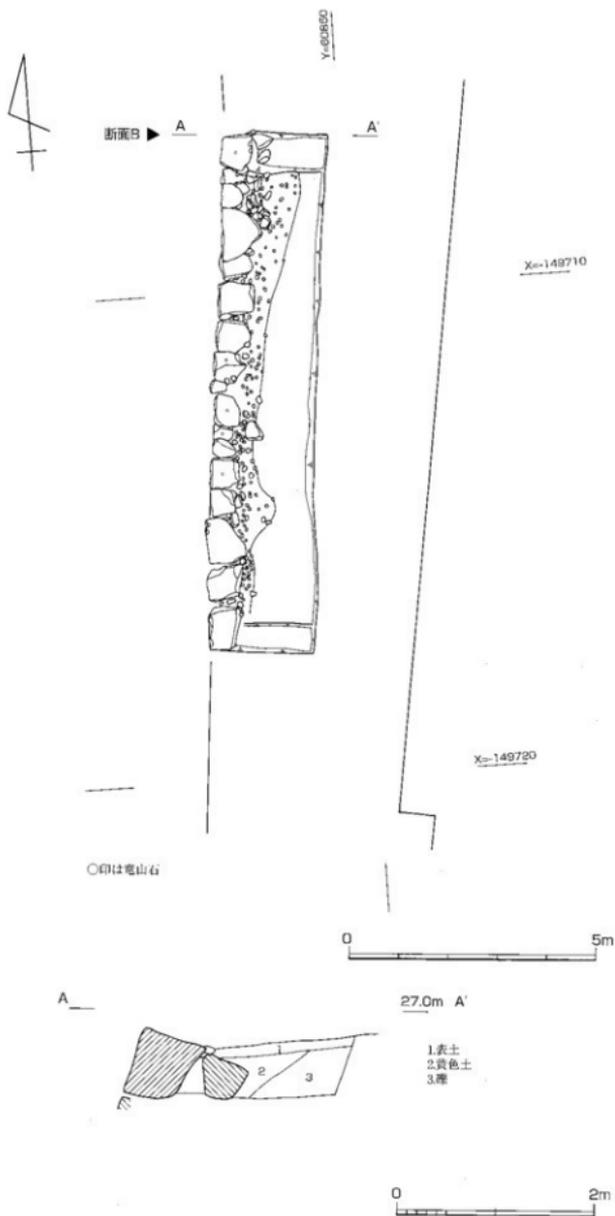
- 1.瓦葺層（ビニール、銜含む、下部にコンクリート、樹脂含む）
- 2.瓦層（砂埃、灰含む）
- 3.青灰色シルト（砂埃含む）
- 4.青灰色シルト（土含む）
- 5.灰色シルト（瓦含む）
- 6.盛土層（青灰色粘土含む）
- 7.緑灰色粘土（地山）
- 8.灰色粘土



図版20

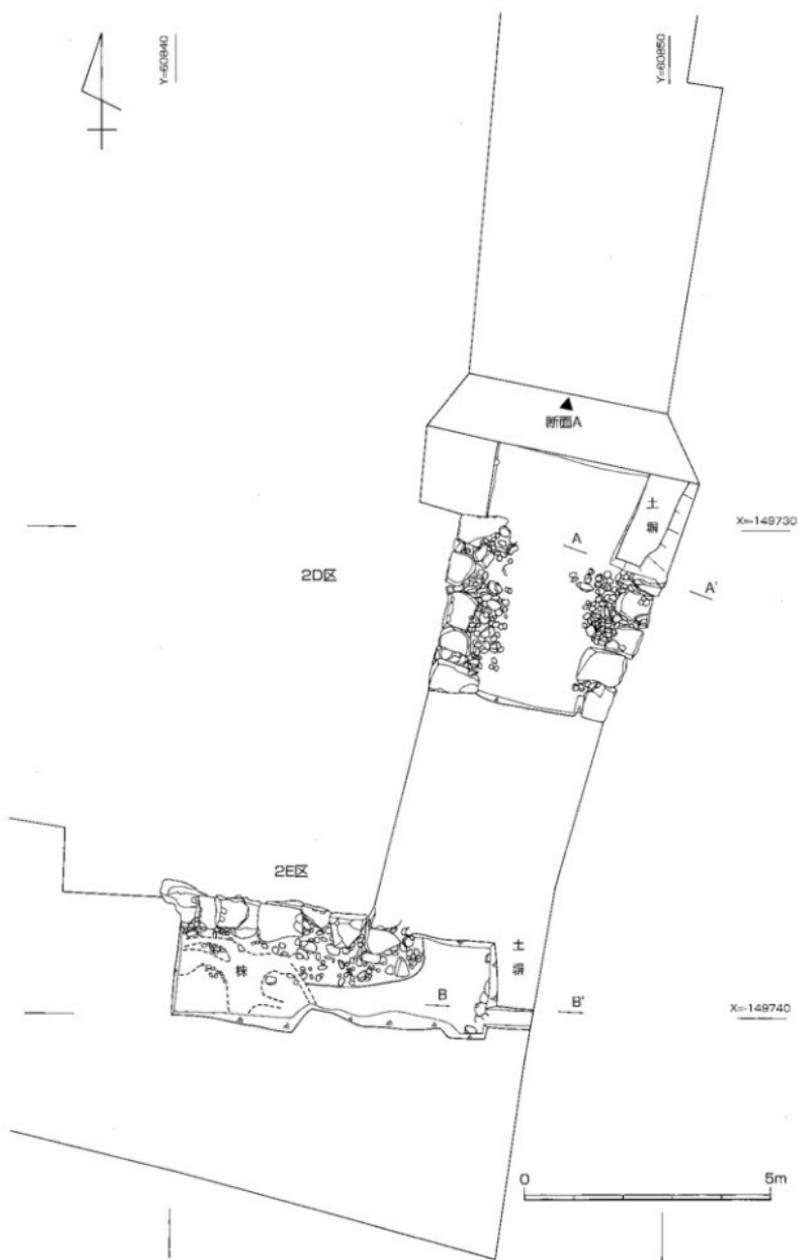
出の門 (3D~F区) 平面図・断面図





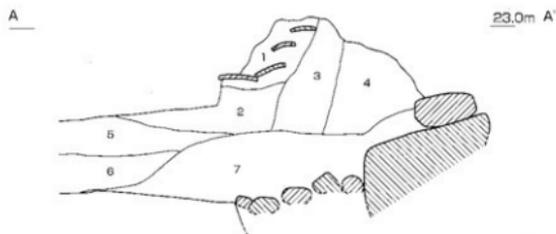
図版22

東帯郭 (2D・E区) 平面図



東帯郭(2D・E区)土堀断面図、東帯郭(3C区)石垣断面図

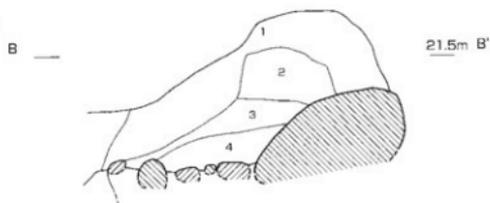
2D区土堀



- 1.暗黄色極細砂(瓦を多く含む、土層崩落上)
- 2.暗黄色極細砂
- 3.黄色極細砂(土層?)
- 4.黄色極細砂(漆喰を多く含む)
- 5.黄色極細砂(瓦を多く含む、整地層)
- 6.明黄色極細砂(瓦を少量含む、整地層)
- 7.明黄色極細砂



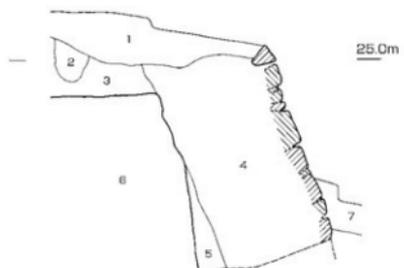
2E区土堀



- 1.黄色極細砂(漆喰混り、瓦を含む、土層崩落土)
- 2.黄色極細砂(小礫混り、漆喰を多く含む)
- 3.黄色極細砂(小礫混り、漆喰を少量含む)
- 4.別黄色極細砂



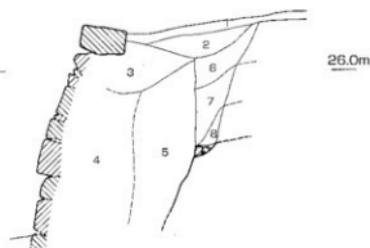
2D区断面A



- 1.暗褐色土(積み直し、裏込め土)
- 2.円礫落ち込み
- 3.壁土
- 4.裏込め石
- 5.裏込め土
- 6.旗山
- 7.崩落土(漆喰がフナナ状に入る)



2C区断面B

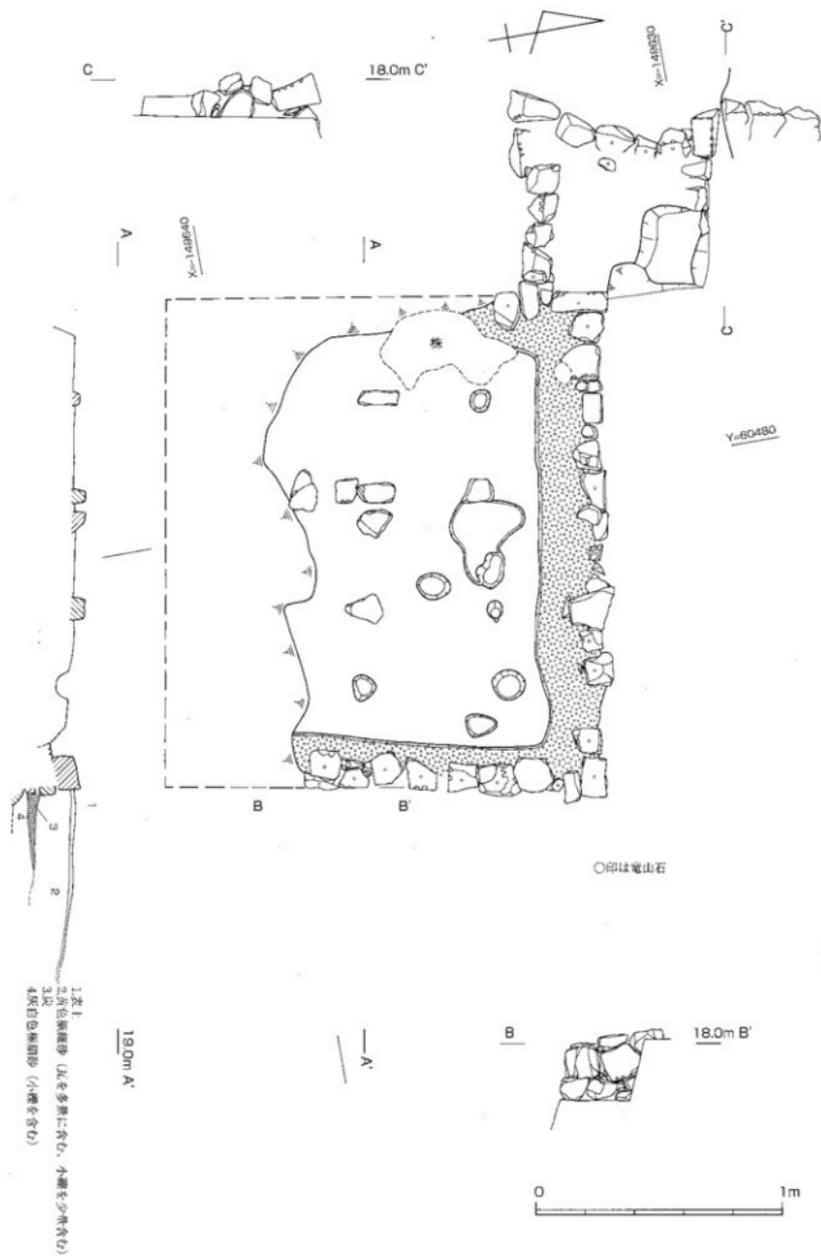


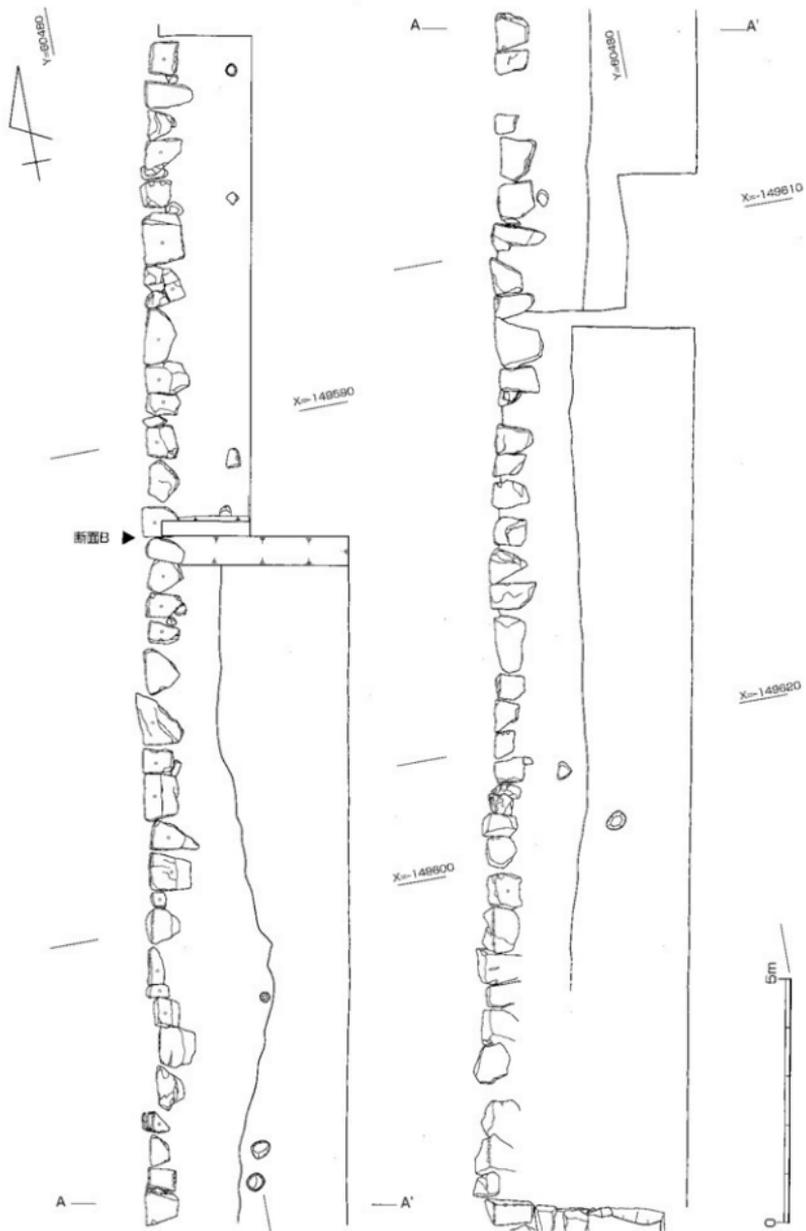
- 1.表土
- 2.黄褐色(積み直し、裏込め土)
- 3.積み直し、裏込め石、小円礫(φ10cm以下)
- 4.裏込め石
- 5.裏込め石(当初)
- 6.暗褐色土
- 7.褐色新土
- 8.円礫混り(φ3cm)粘土



図版24

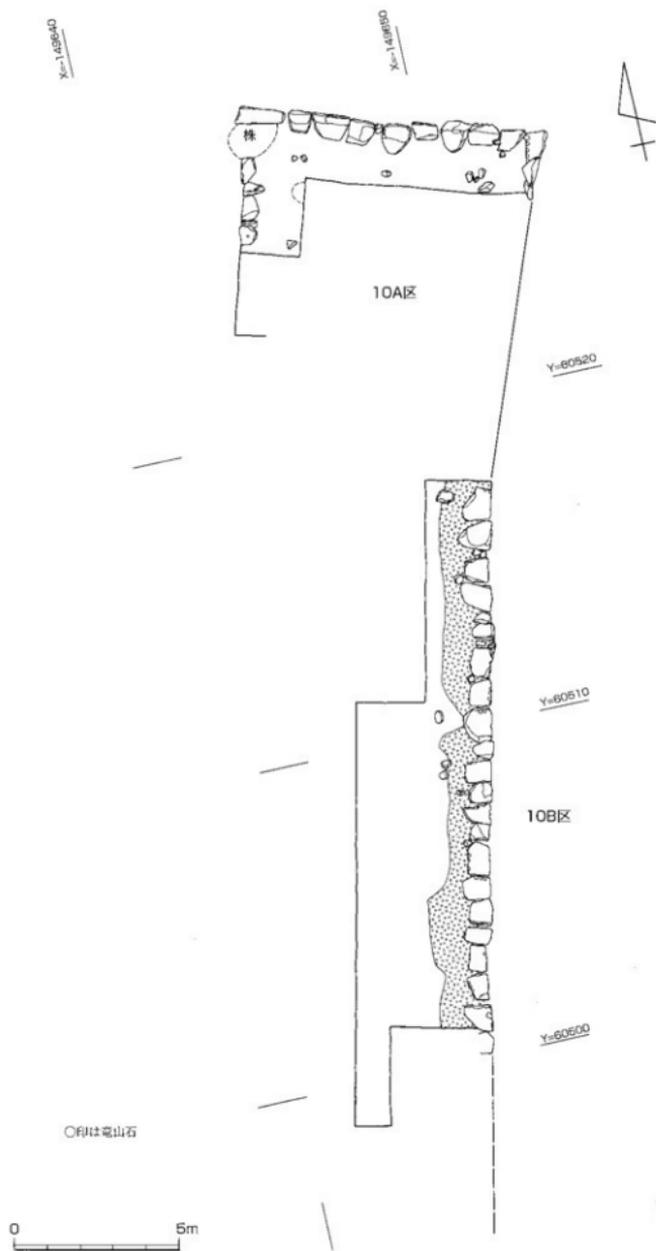
正の槽 (10C区) 平面図・断面図



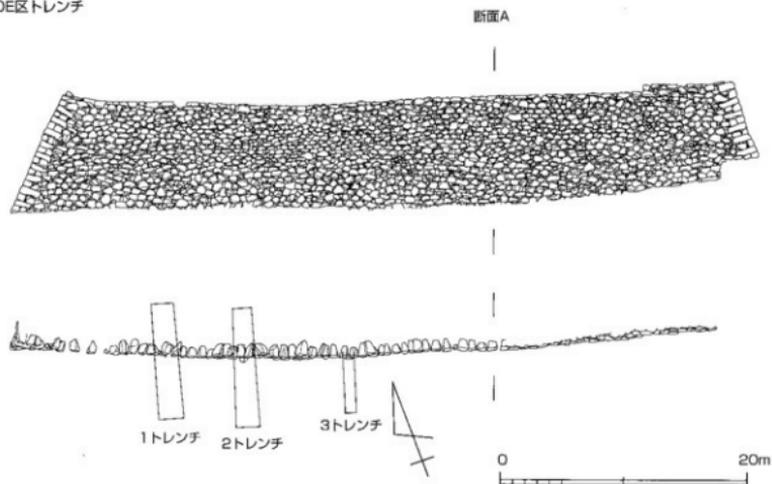


図版26

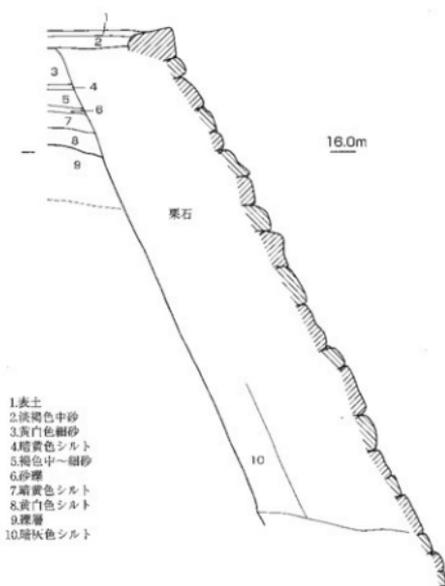
稲荷郭南面石垣 (10A・B区) 平面図



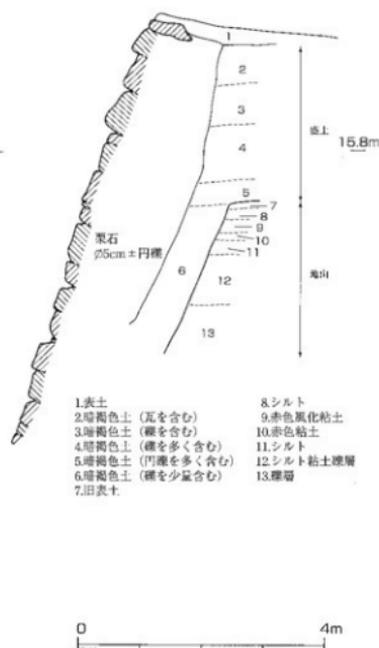
10E区トレンチ



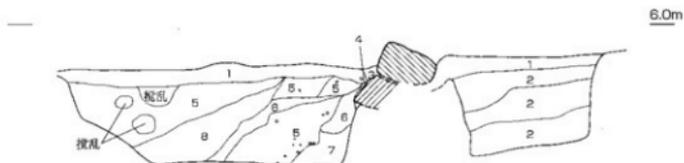
10B区断面A



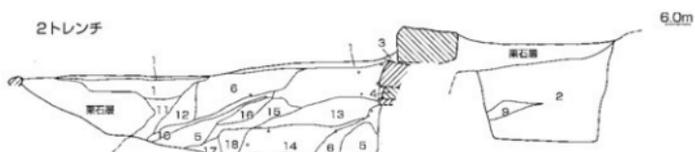
10D区断面B



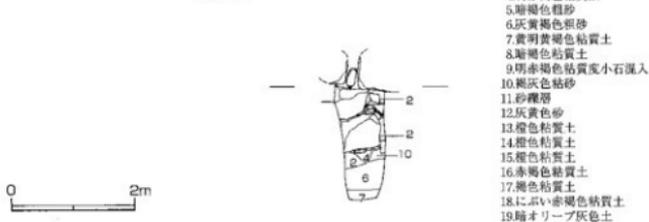
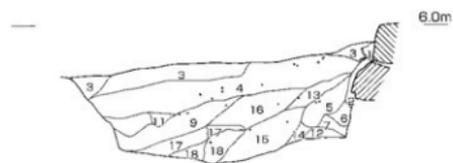
1 トレンチ



2 トレンチ



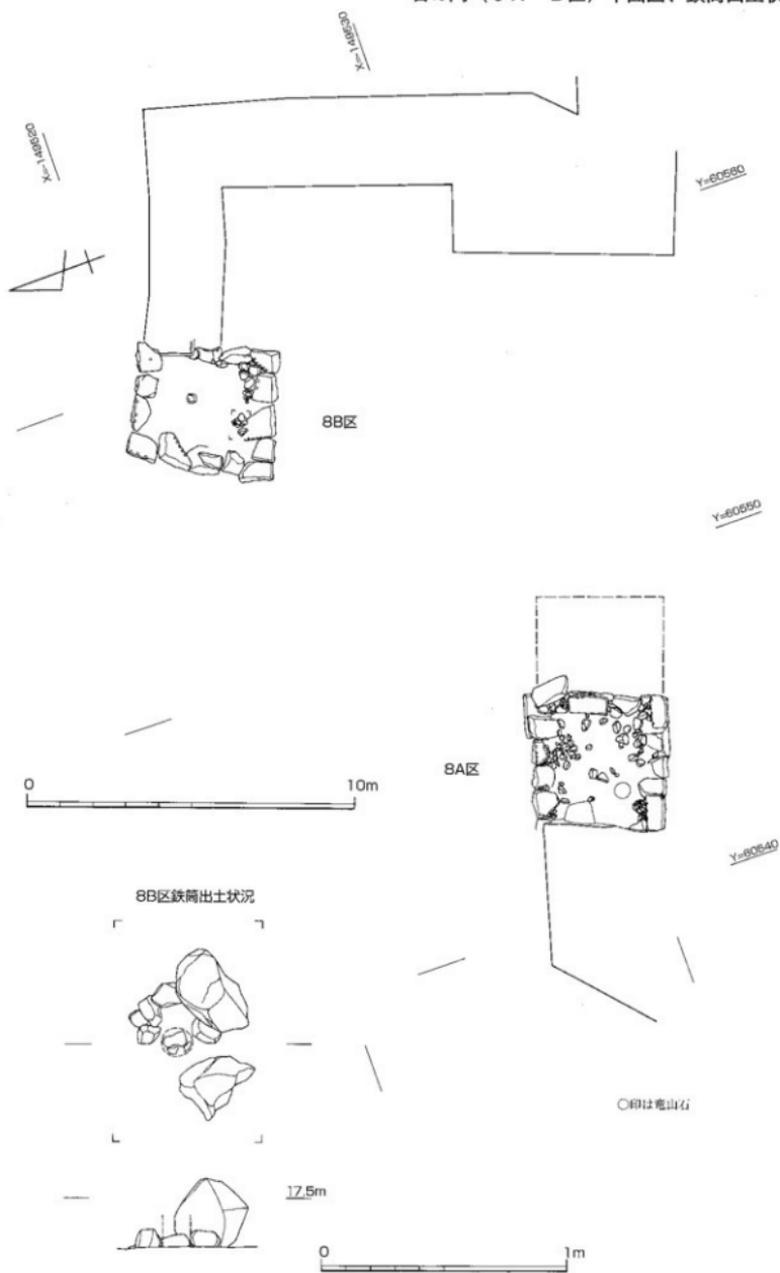
3 トレンチ



- 1.表面腐食土 (小石混入)
- 2.灰褐色粗砂 (小石混入)
- 3.明黄褐色粘質土 (建築用土)
- 4.褐灰色土 (砂混入、掘方塵土)
- 5.明赤褐色粘質土
- 6.明赤褐色粘質土
- 7.にぶい赤褐色粘質土
- 8.明褐色粗砂
- 9.暗褐色粘質土
- 10.暗褐色粘質土
- 11.にぶい黄褐色粘質土
- 12.オリーブ褐色粗砂
- 13.明赤褐色粘質土
- 14.褐色粘質土
- 15.明赤褐色粘質土
- 16.砂礫層
- 17.赤褐色粘質土
- 18.黒褐色粘質土

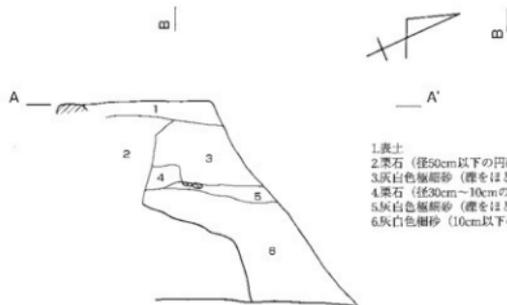
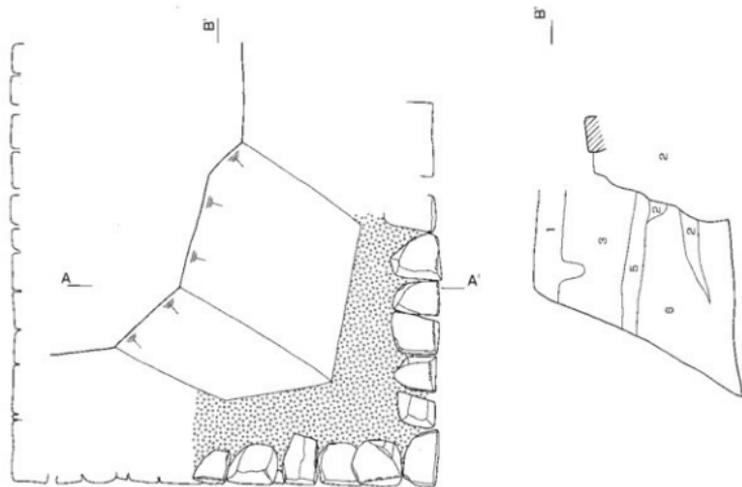
- 1.明黄褐色粘質土
- 2.褐灰色土 (砂混入)
- 3.表面腐食土 (掘乱)
- 4.明赤褐色粘質土
- 5.暗褐色粗砂
- 6.灰黄褐色粗砂
- 7.黄明黄褐色粘質土
- 8.暗褐色粘質土
- 9.明赤褐色粘質土小石混入
- 10.褐灰色粗砂
- 11.砂礫層
- 12.灰黄色砂
- 13.褐色粘質土
- 14.褐色粘質土
- 15.褐色粘質土
- 16.赤褐色粘質土
- 17.褐色粘質土
- 18.にぶい赤褐色粘質土
- 19.暗オリーブ灰色土

石の門（8A・B区）平面図、鉄筒出土状況図



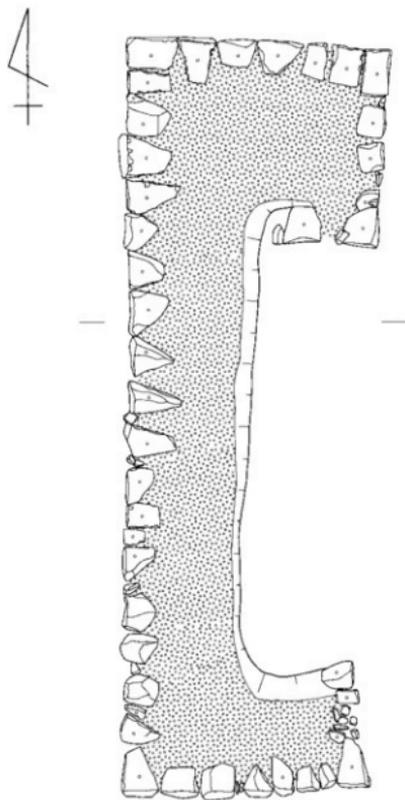
図版30

太鼓門（12A区）平面図、断面図



- 1.表土
- 2.築石（径50cm以下の円礫を主とする、一部割築石を用いる）
- 3.灰白色極細砂（礫をほとんど含まず、しまっている）
- 4.築石（径30cm～10cmの円礫）
- 5.灰白色極細砂（礫をほとんど含まず、かなりよくしまっている）
- 6.灰白色粗砂（10cm以下の礫を含む、築石を少量含む）





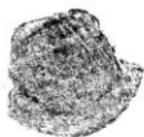
○印は竜山石



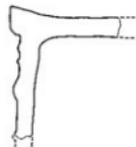
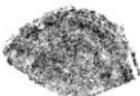
- 1. 表土
- 2. 褐色土 (礫小礫混じり、地山)
- 3. 旧表土

- 4. 暗褐色土 (小礫混じり、盛土)
- 5. 褐色土 (小礫混じり、地山)
- 6. 栗石

0 5m



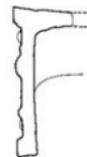
1



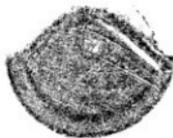
2



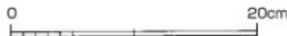
3



4



5





6

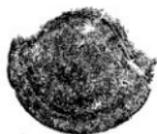


7



8





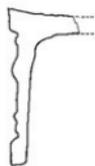
9



10



11



12



13

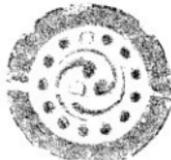
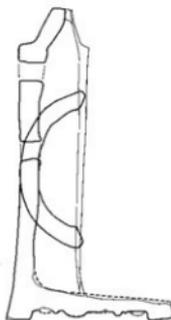
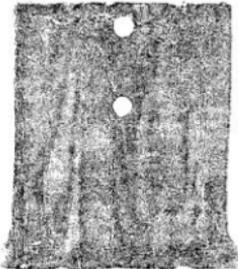




14

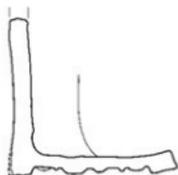


15



16

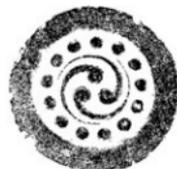




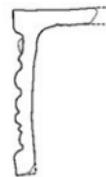
17



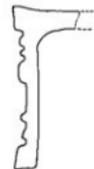
18



19

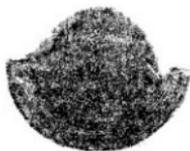


20



21

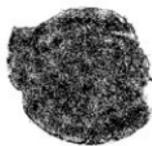




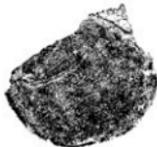
22



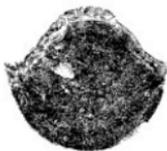
23



24

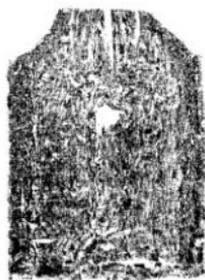
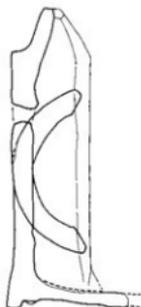
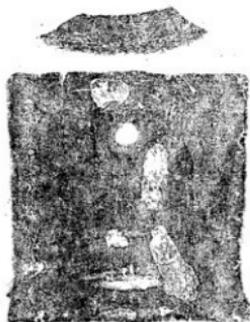


25

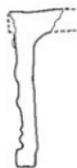


26

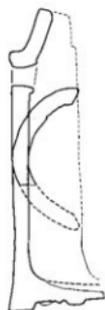




27



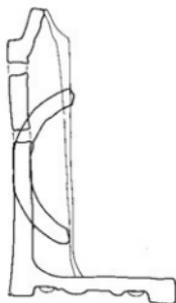
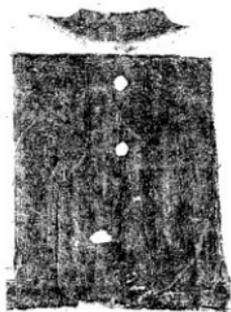
28



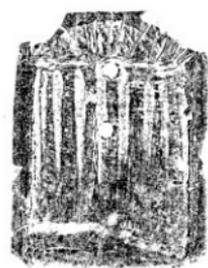
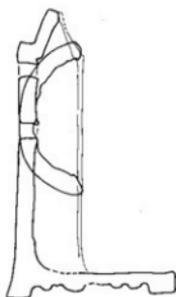
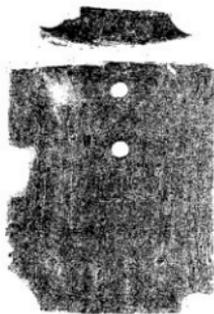
29



0 20cm

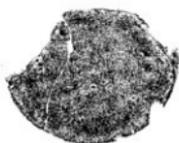


30

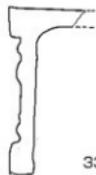


31

0 20cm



32



33



34



35

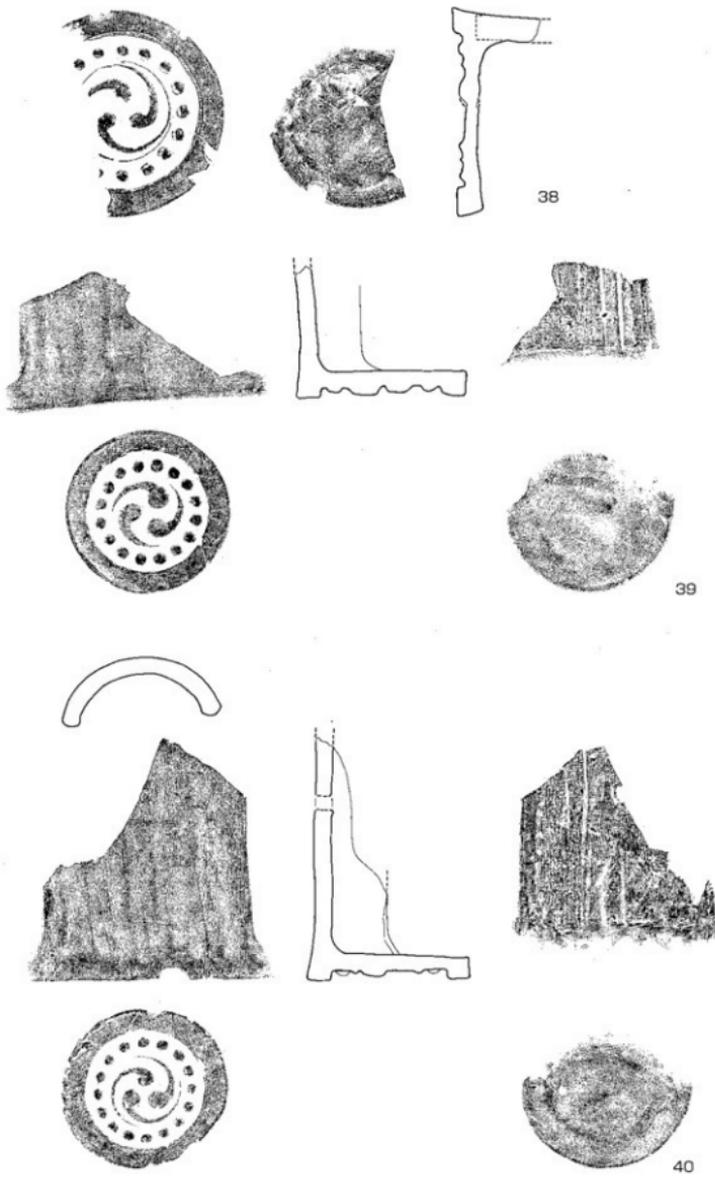


36



37

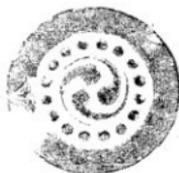




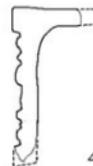
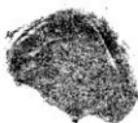
0 20cm



41



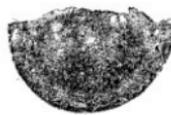
42



43



44

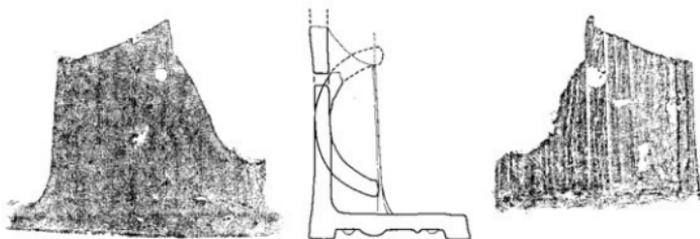


45

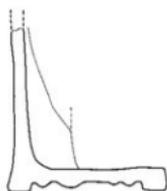
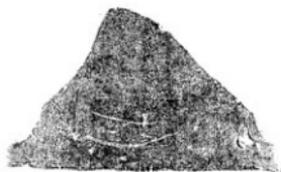


46

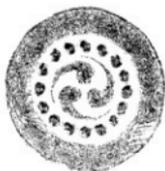
0 20cm



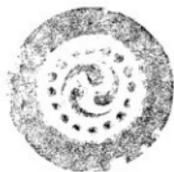
47



48

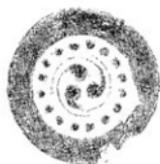
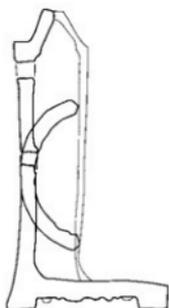
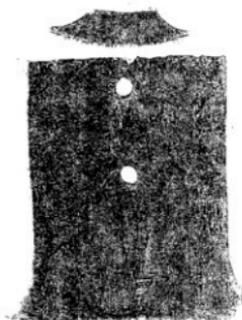


49



50

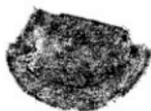




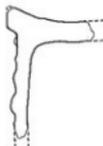
51



52

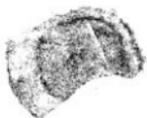


53

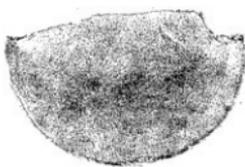


54

0 20cm



55



56



57

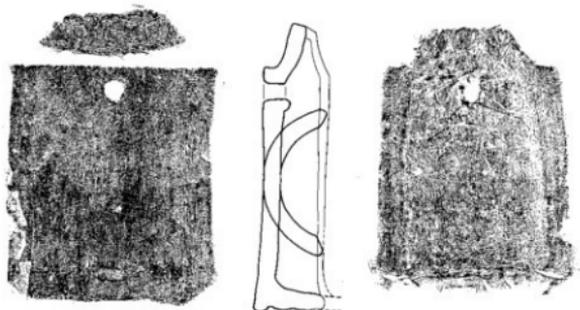


58

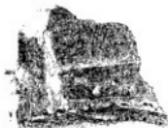


59





60



61



62



63

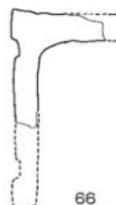


64



65





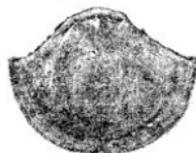
66



67



68



69

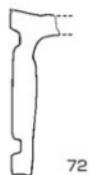


70



71

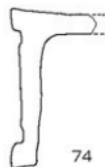




72



73



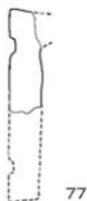
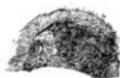
74



75



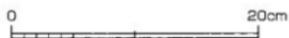
76



77



78





79



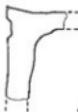
80



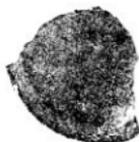
81



82



83

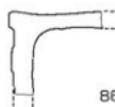


84





85



86



87



88

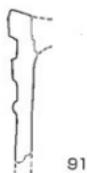


89



90





91



92



93

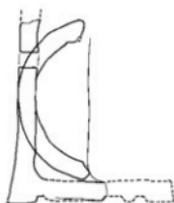


94



95

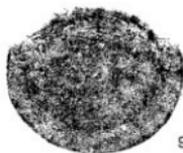
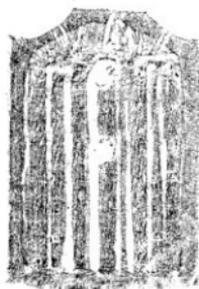
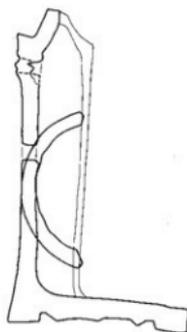




96



97

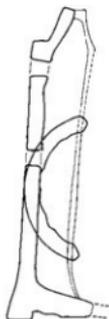
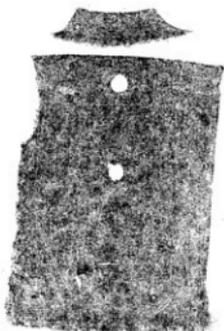


98





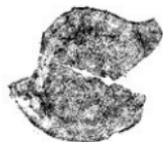
99



100

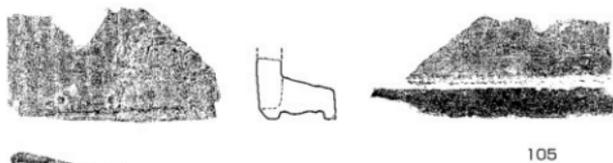
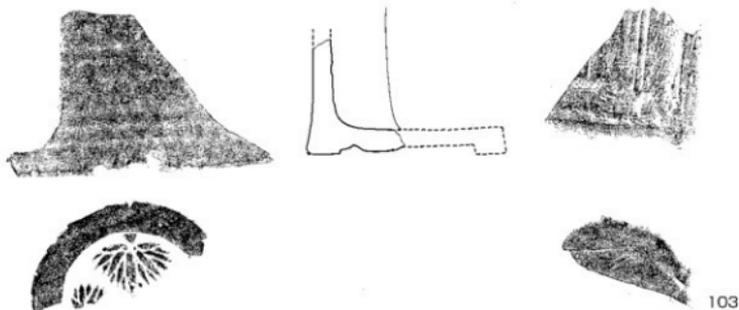


101

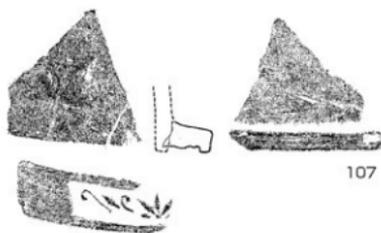


102

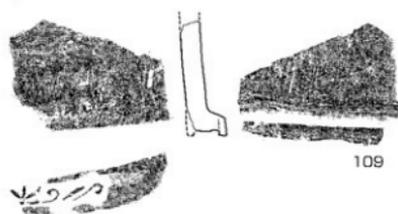




0 20cm



107



109



108



110



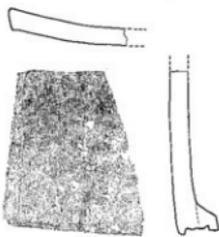
111

112





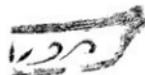
113



114



115



116





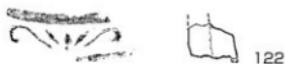
117

118



119

120



122



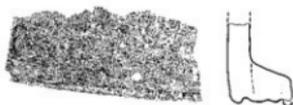
121



123



124

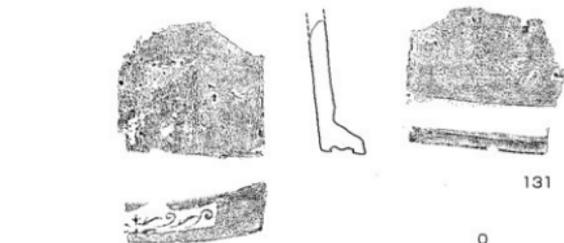
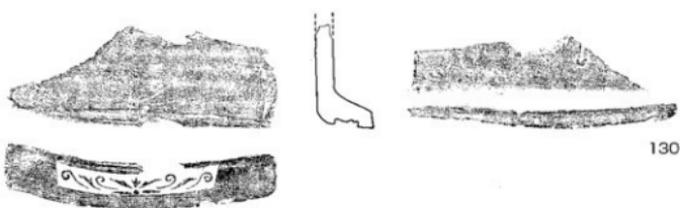
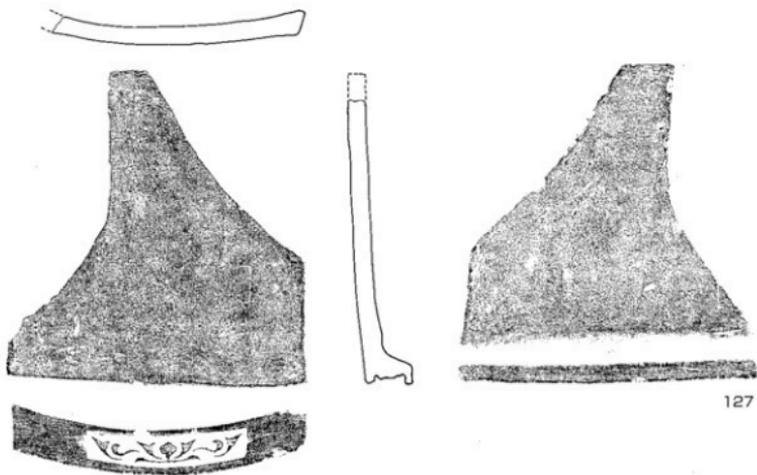


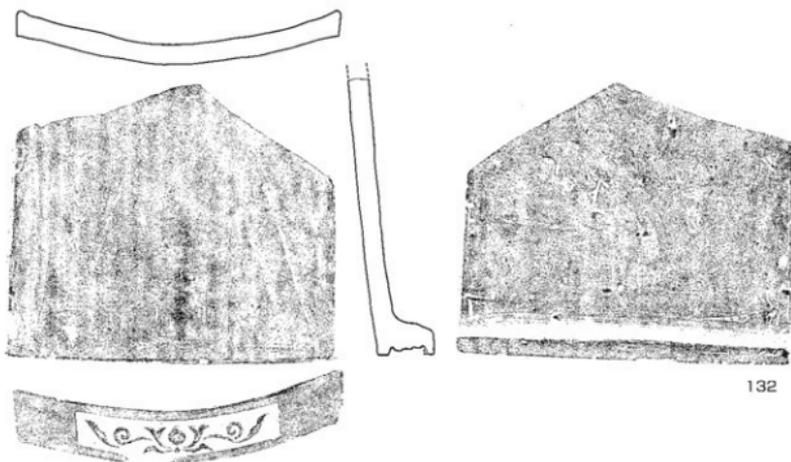
125



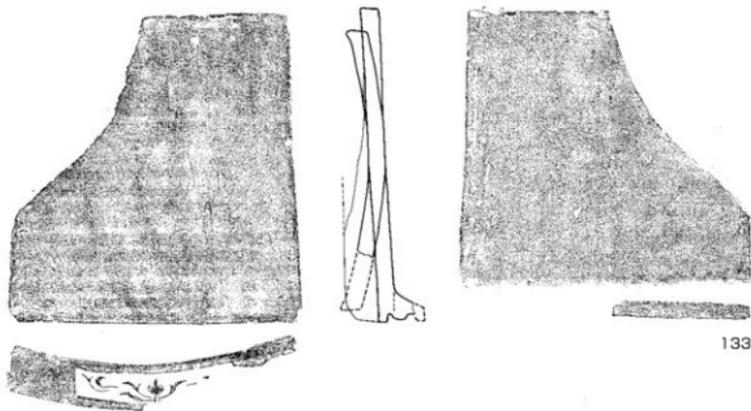
126



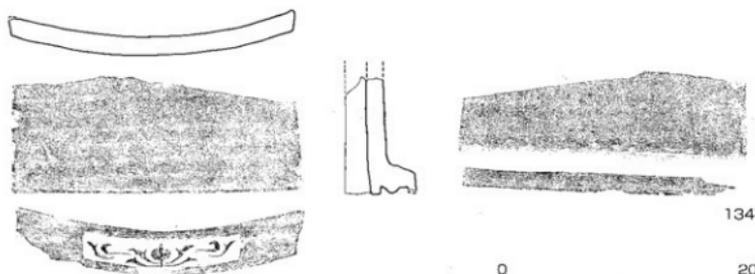




132

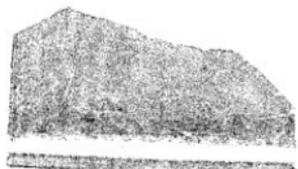


133



134

0 20cm



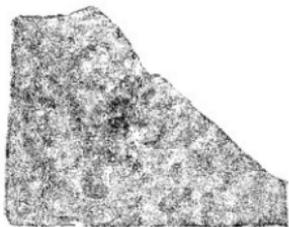
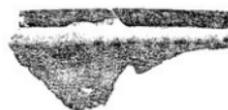
135



136



137

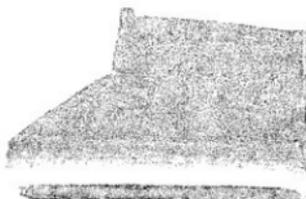
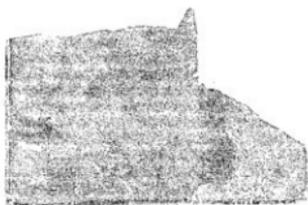


138



139





140



141

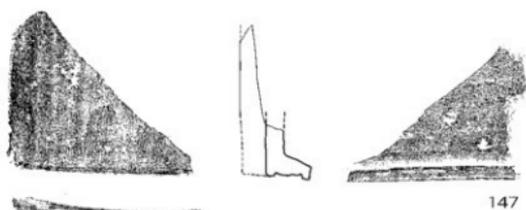
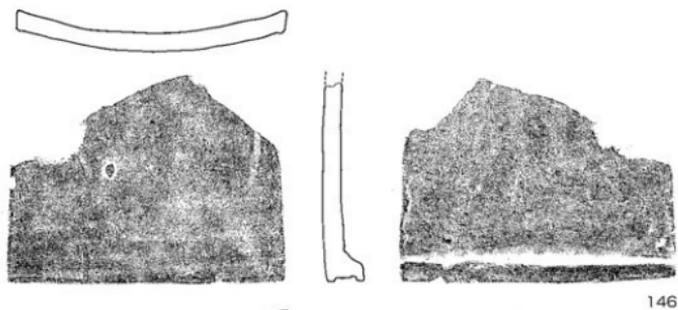
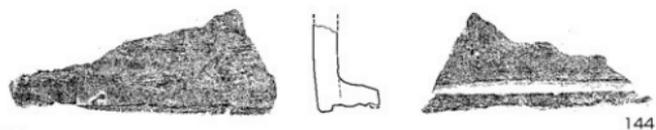


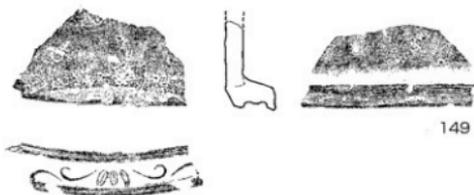
142



143



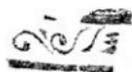
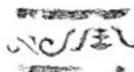




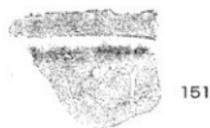
149



150



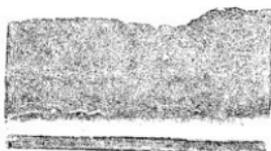
153



151



152



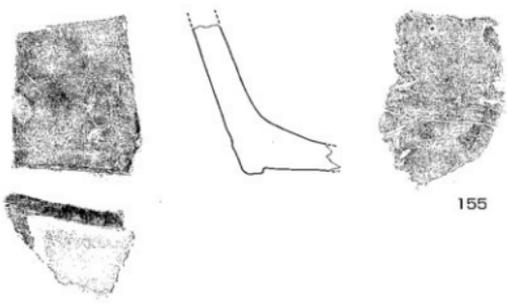
154



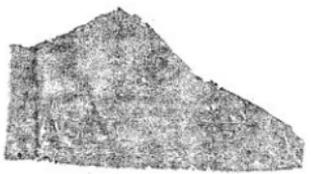
0 20cm

图版64

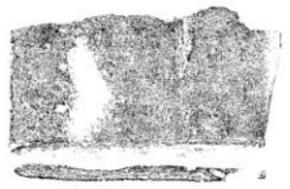
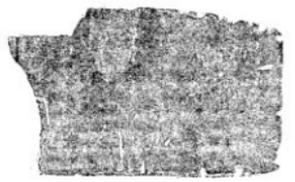
軒平瓦 (11)、軒棧瓦



155

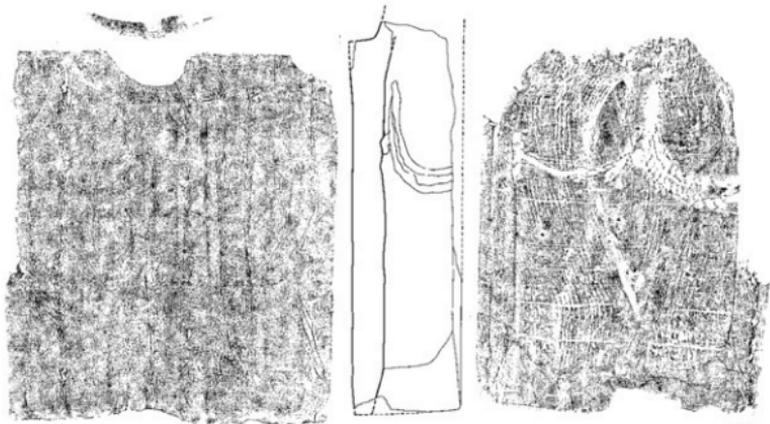


156

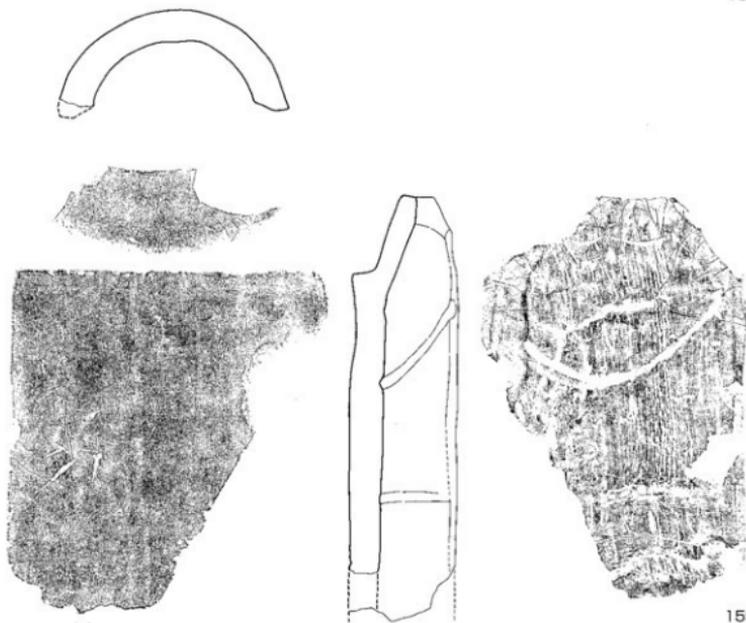


157



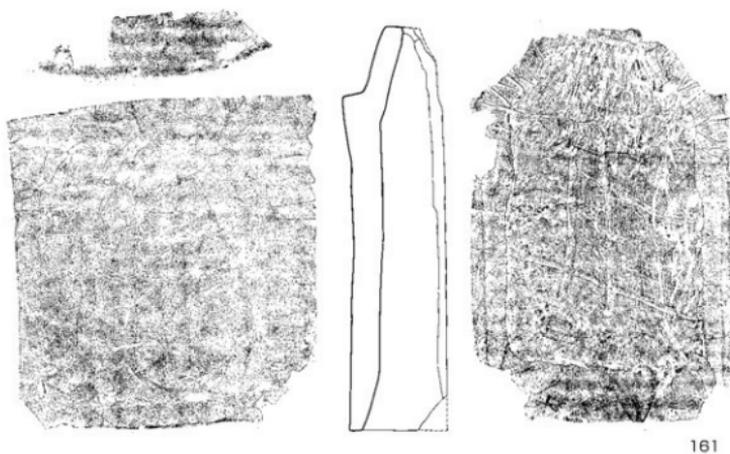


158



159

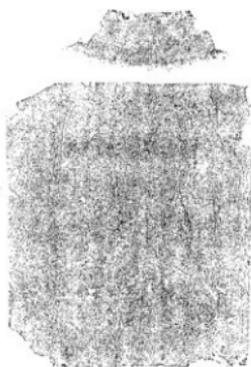
0 20cm



0 20cm



162



163



164





165

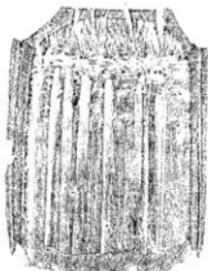


166

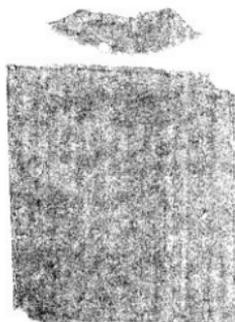


167

0 20cm



168



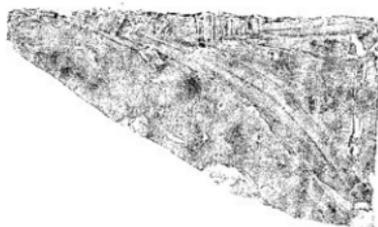
169



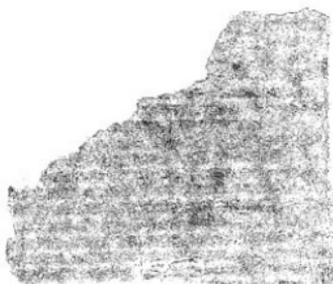
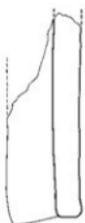
170

0 20cm

图版70
平瓦 (1)

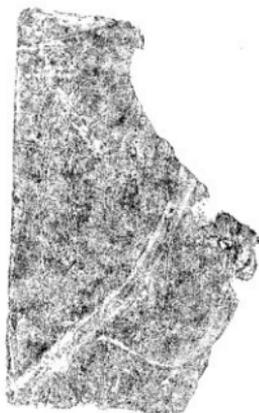


171

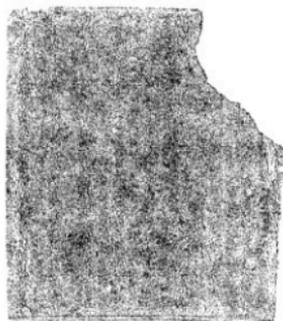


172





173



174





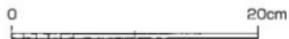
175

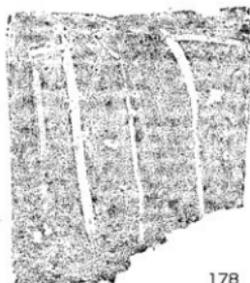


176



177





178

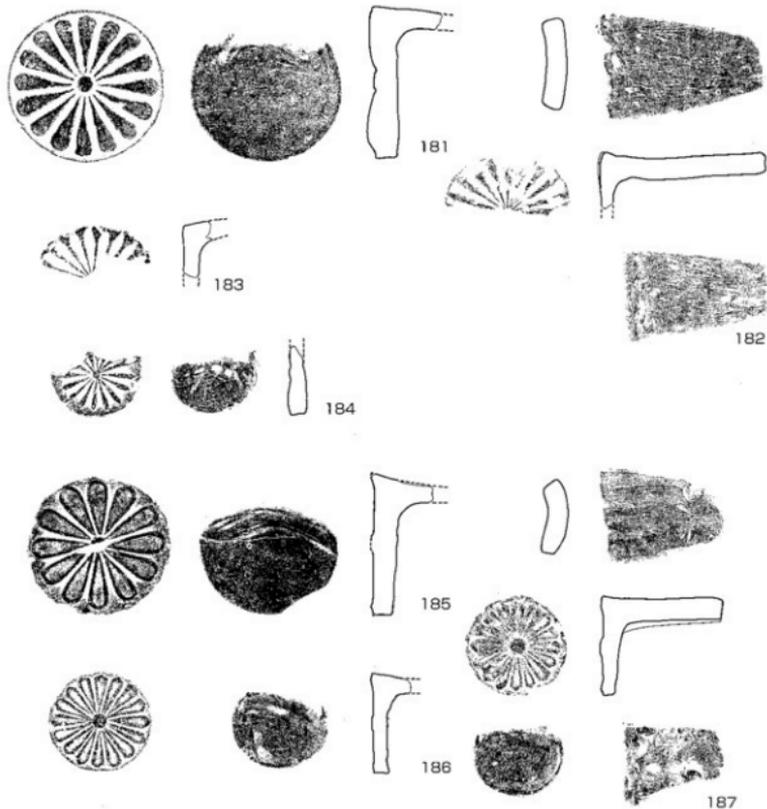


179

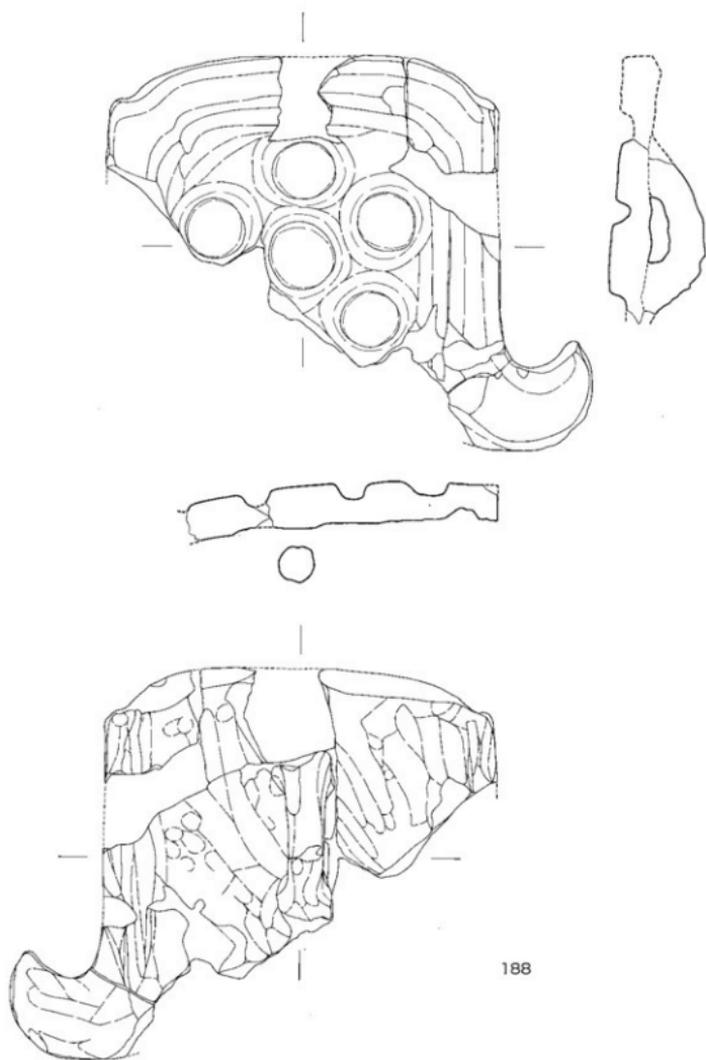


180



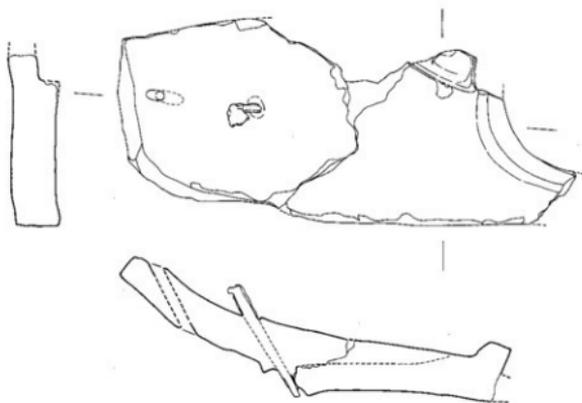


0 20cm

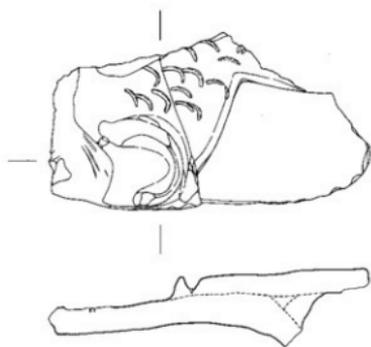


188

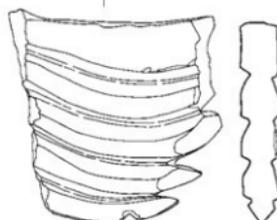
0 20cm



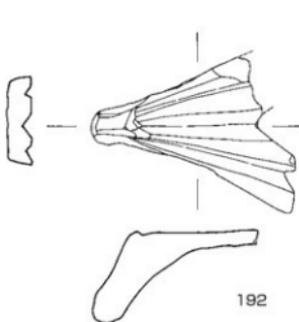
189



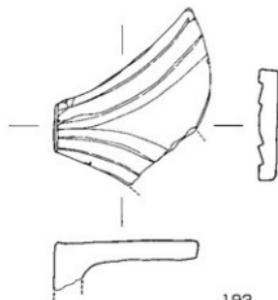
190



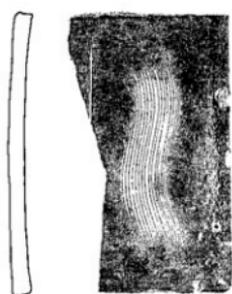
191



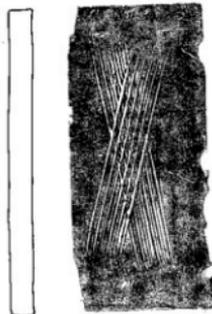
192



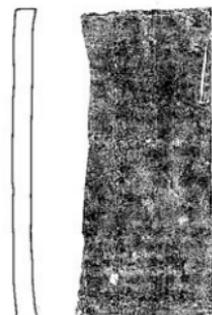
193



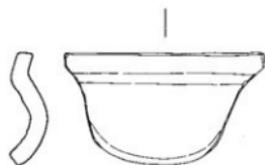
194



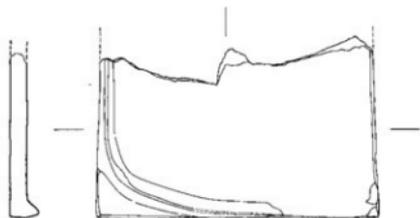
195



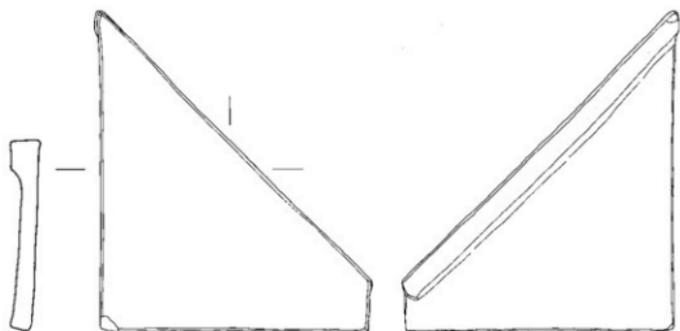
196



197



198

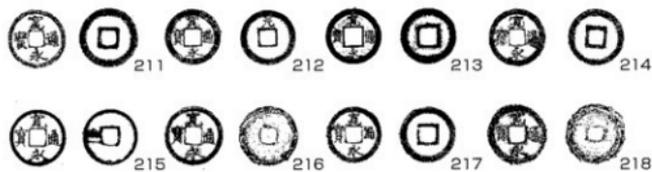
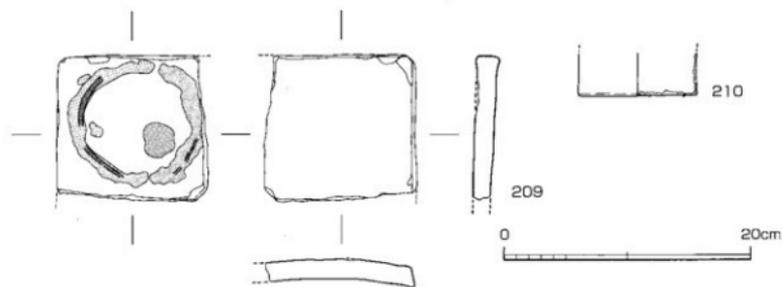
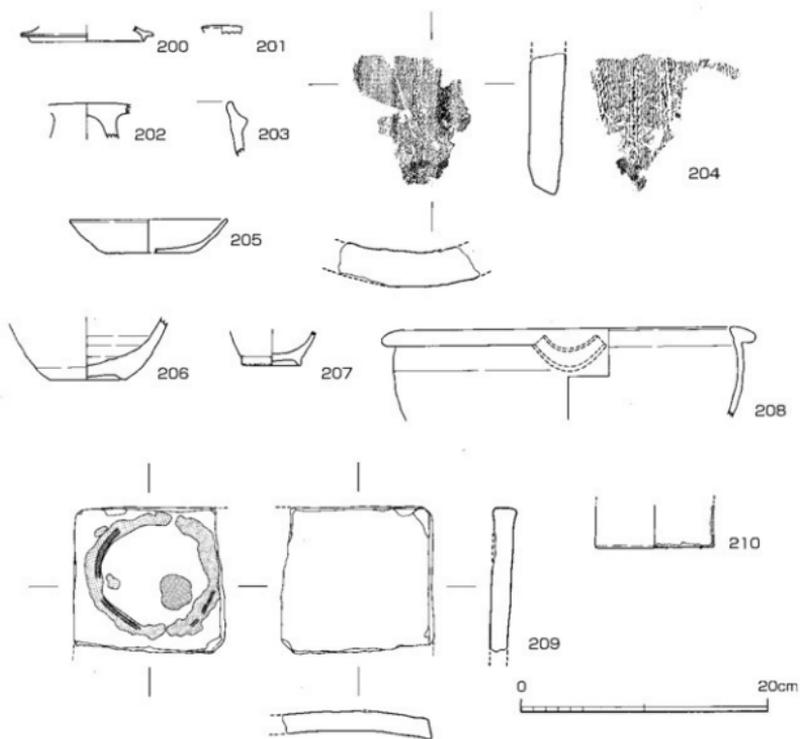


199



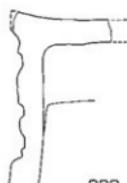
図版78

その他の遺物

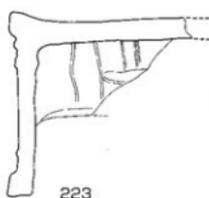




221



222



223



224



225



226

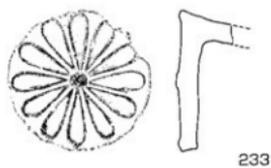
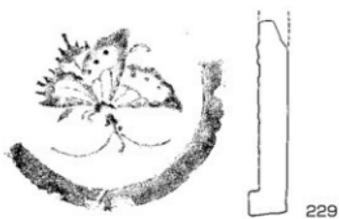
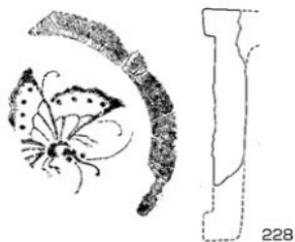


227



图版80

4区石垣解体時出土瓦(2)



写真図版

明石城跡遠景（南から）



明石城跡遠景（北西から）



明石城跡全景（南から）





左 乾槽 (7A区)
(東から)

右 乾槽 (7A区)
石垣断面 (東から)



埋見門 (7B区)
(北東から)



本丸北面石垣 (7D区)
(北西から)



大の門 (5A区)
(北東から)



大の門 (5B区)
(東から)



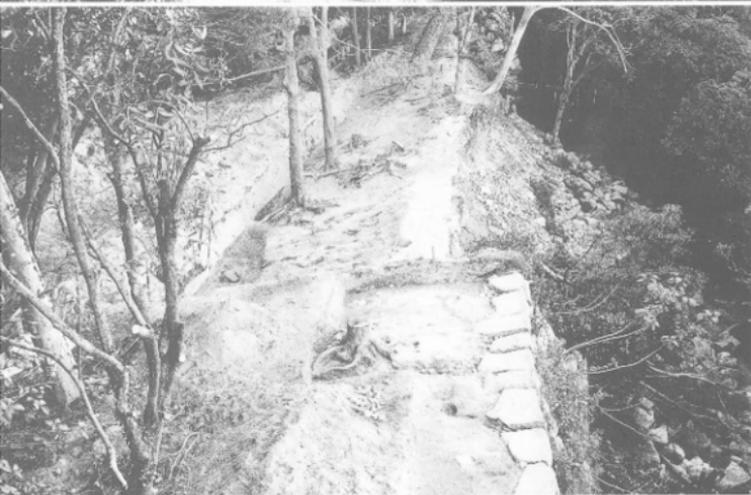
左 大の門 (5B区)
サブトレ断面 (北から)



右 5C区 (西から)



二の丸北面石垣崩壊状況
(西から)



二の丸北面石垣(4B区)
(東から)



二の丸北面石垣(4B区)
東端部(東から)



4 B 区焼土层検出状況
(西から)



左 4 B 区地すべり部断面
(西から)



右 二の丸西面石垣
(4 A 区)
南半部 (南から)



二の丸西面石垣 (4 A 区)
北半部 (南から)



二の丸北面石垣（4区）断面
（北西から）



二の丸北面石垣（4区）
断面東半部（北西から）



左 二の丸北面石垣（4区）
断面北西部（北から）
右 二の丸北面石垣（4区）
断面瓦包含層（北西から）



角の槽 (2A区)
(北西から)



左 角の槽 (2A区)
礎石 (南から)
左 角の槽 (2A区)
根太石 (北から)



左上 角の槽 (2A区)
礎石据え付け状況
(南から)
左下 角の槽 (2A区)
栗石検出状況
(南から)
右 東の丸東面石垣
(2B区) (北から)



真の門（3A区）（北から）



真の門（3B区）（南から）



3C区西側土堀断面
（東から）



天の門（3C区）（西から）



天の門（3C区）西面石垣
（南西から）



井の槽（3C区）（北から）



東帯郭北面石垣（3C区）
断面（北東から）



東帯郭北面石垣（3C区）
断面北東隅（北西から）



東帯郭北面石垣（3C区）
復原状況（北西から）

左 東帯郭北面石垣 (3G区)
トレンチ2 (北から)



右 東帯郭北面石垣 (3G区)
トレンチ1 (北から)



東帯郭北面石垣 (3G区)
トレンチ2 (西から)



東帯郭北面石垣 (3G区)
トレンチ1 (西から)





出の門（3F区）（西から）



出の門（3E区）（西から）



井の櫓（3D区）（北から）

東帯郭（2C区）（北から）

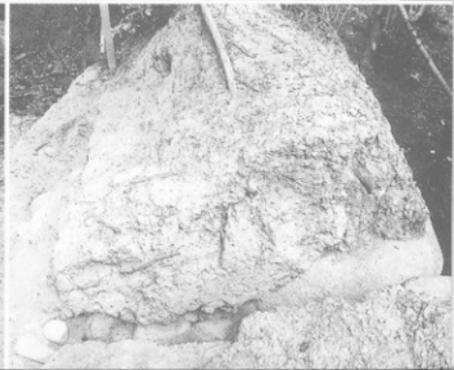


東帯郭（2D区）（北から）



左 東帯郭（2E区）
（東から）

右 2E区北側土堀断面
（東から）





東帯郭（2C・D区）
断面（南から）



東帯郭（2C・D区）
断面（西から）



東帯郭（2C・D区）
石垣復原状況（西から）

稲荷郭南面石垣
(10A区) (北から)



稲荷郭南面石垣
(10B区) (東から)



正の櫓 (10C区)
(東から)





左 正の槽 (10C区)
東面石垣 (東から)
右 正の槽 (10C区)
東側断面 (南から)



正の槽 (10C区)
西側台状部 (北から)



左 稲荷郭西面石垣
(10D区) (南から)
右 稲荷郭西面石垣
(10D区)
北端部 (南から)

稲荷郭西面石垣 (10D区)
断面 (南から)



稲荷郭南面石垣
(10B・C・E区)
断面 (東から)



稲荷郭南面石垣 (10E区)
断面トレンチ1・2 (北から)





左 稲荷郭南面石垣 (10E区)
断面トレンチ1 (南から)
右 稲荷郭南面石垣 (10E区)
断面トレンチ2 (南から)



稲荷郭南面石垣 (10E区)
断面トレンチ3 (南から)



稲荷郭南面石垣 (10E区)
断面トレンチ3 (東から)

万の門（8B区）（西から）



万の門（8B区）
鉄筒出土状況（北から）



万の門（8A区）（東から）





1 太鼓門 (12A区)
断面 (北から)
2 太鼓門 (12A区)
根石検出状況 (南から)



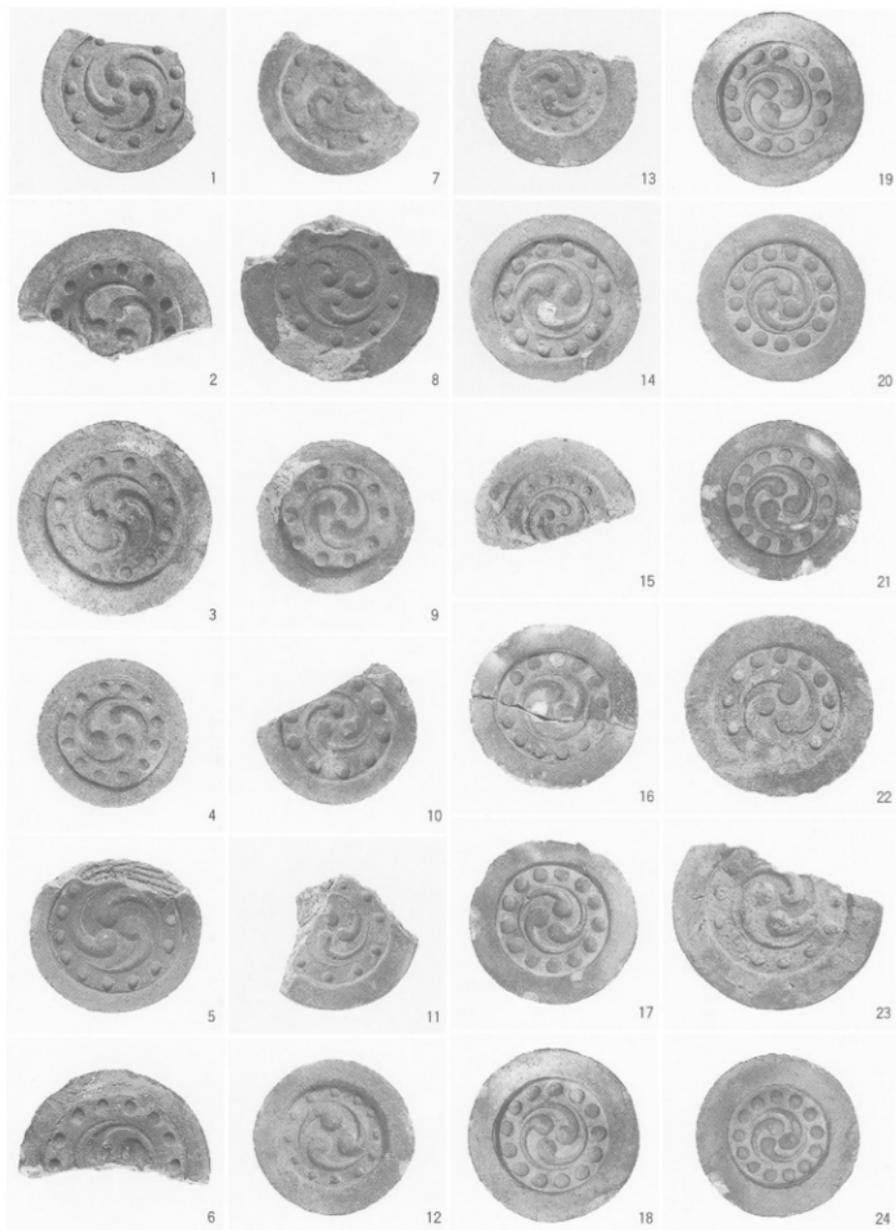
3 太鼓門 (12B区)
断面 (北西から)
4 太鼓門 (12C区)
断面 (東から)

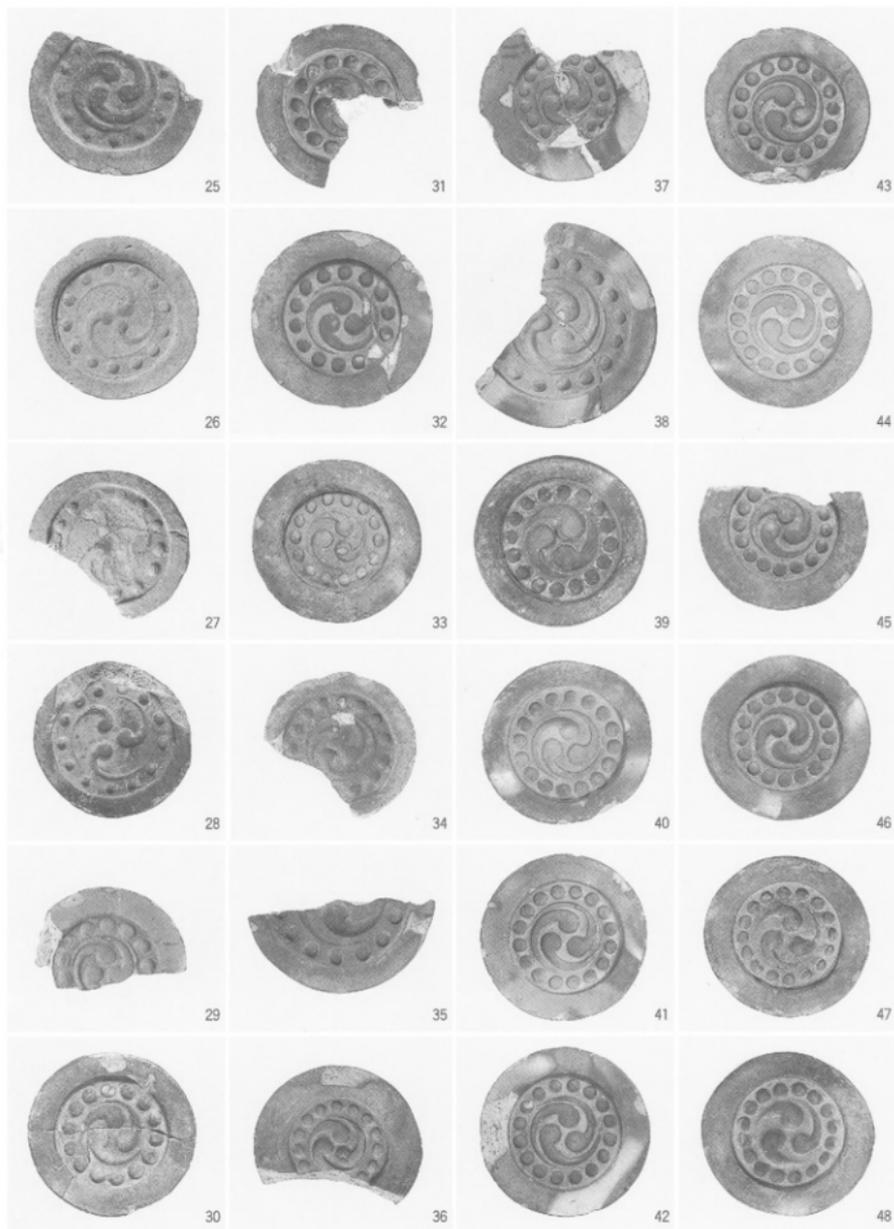


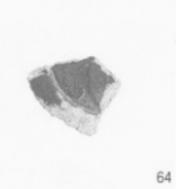
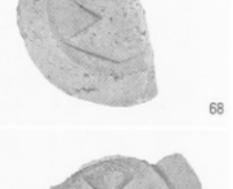
5 東不明門 (1区)
断面 (東から)
6 西不明門 (11A区)
断面 (東から)



7 西不明門 (11B区)
断面 (北から)
8 西不明門 (11B区)
断面 (北東から)

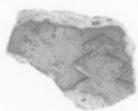








73



80



88



96



74



81



89



97



75



82



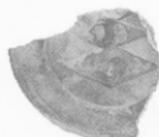
90



98



76



84



91



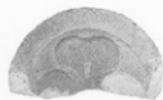
99



77



85



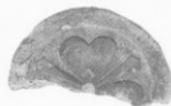
92



100



78



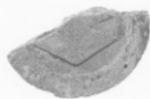
86



93



101



79



87



94



95



102



103



104



105



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



117



118



119



120



121



122



123



124



125



126



127



128



129



130



141



131



142



132



143



133



144



134



145



135



146



136



147



137



148



138



149



139



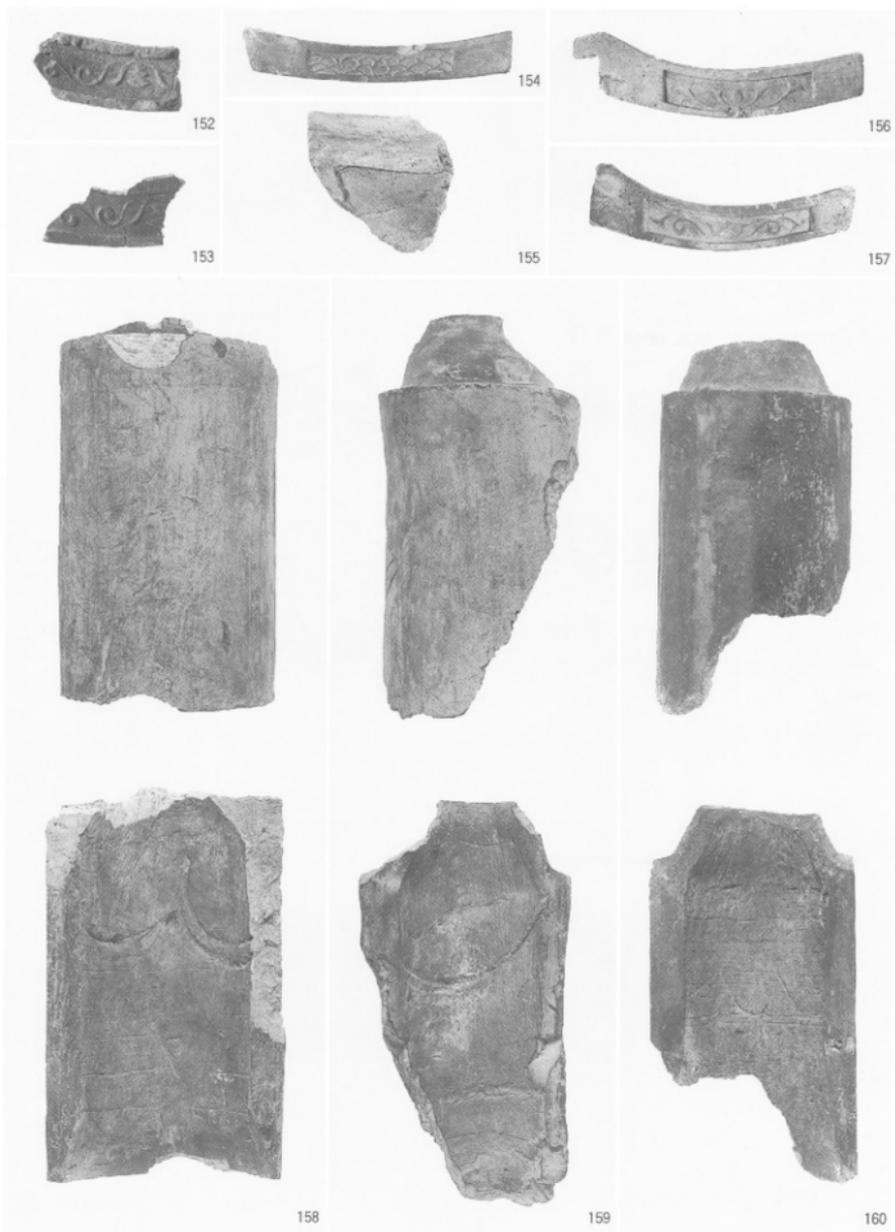
150



140



151





161



162



163



164



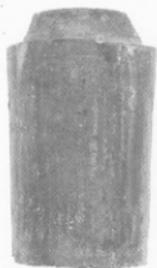
165



166



167



168



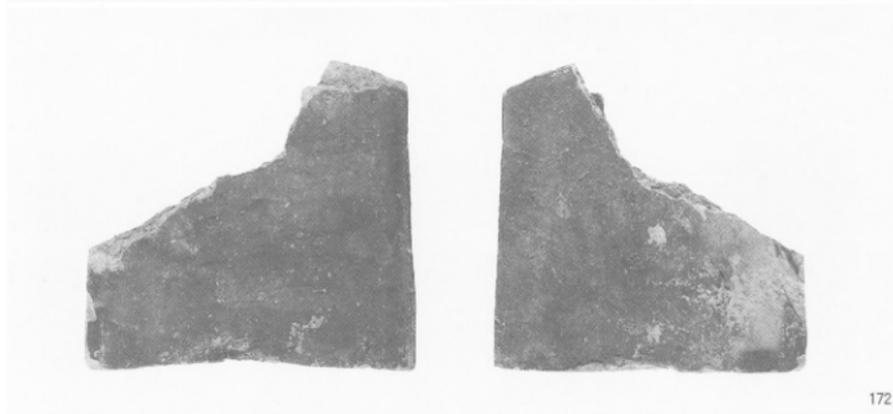
169



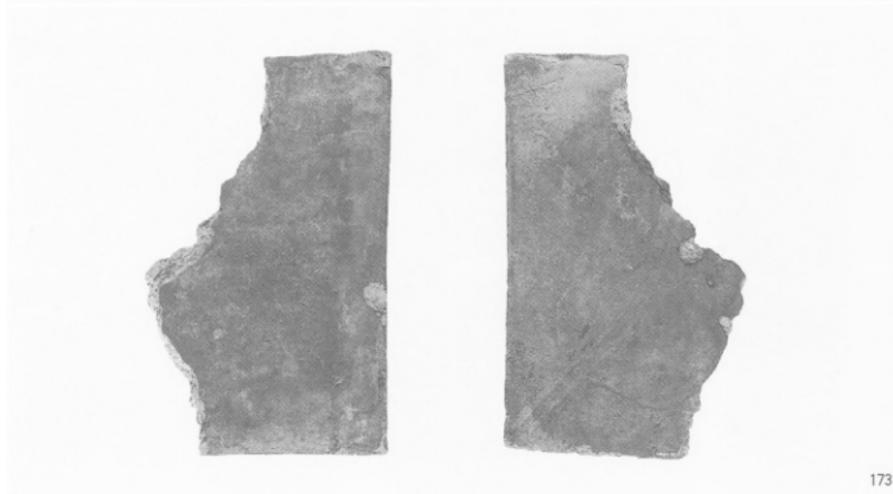
170



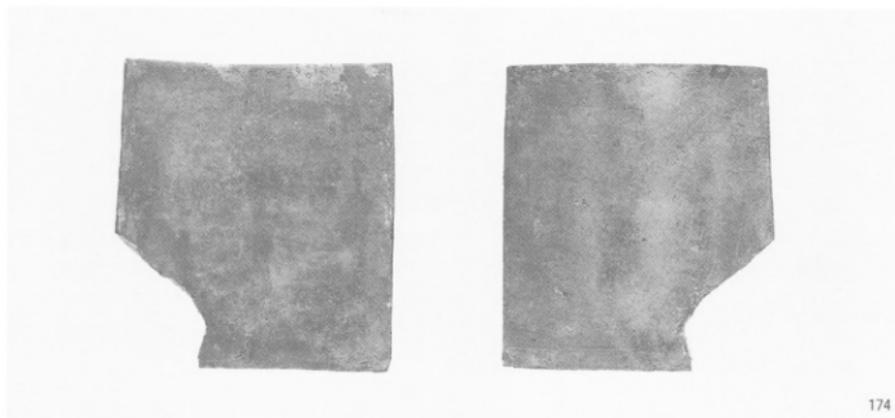
171



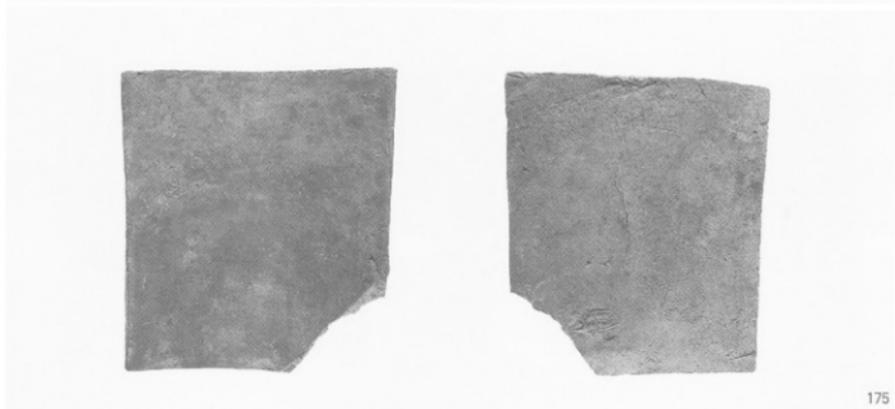
172



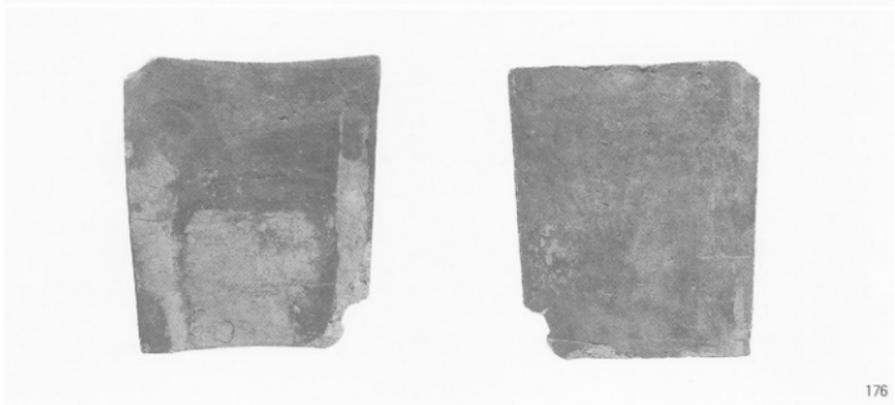
173



174



175



176



177



178



179



180



181



182



183

184



185



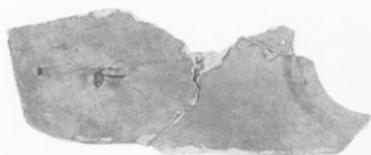
186



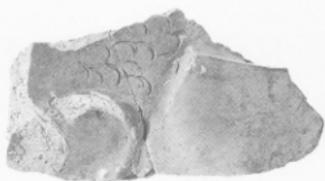
187



188



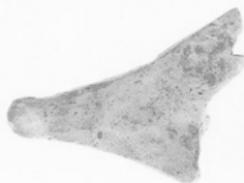
189



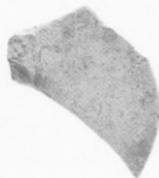
190



191



192



193



194



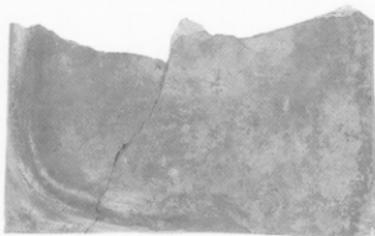
195



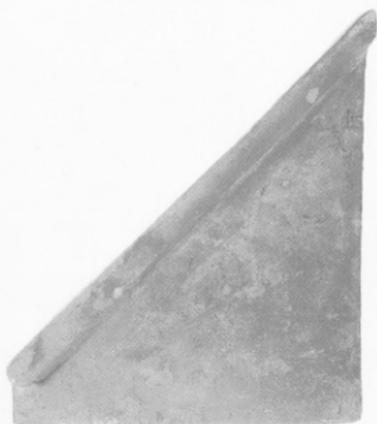
196



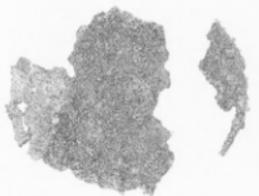
197



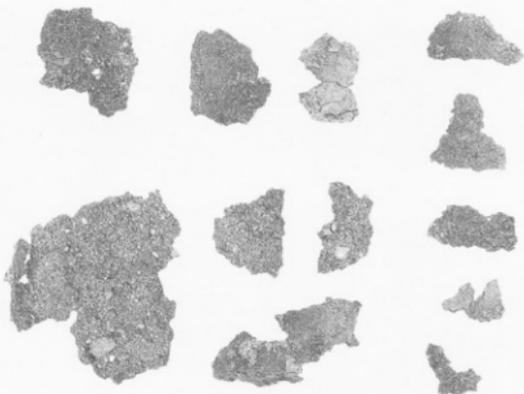
198



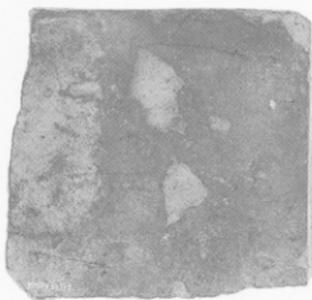
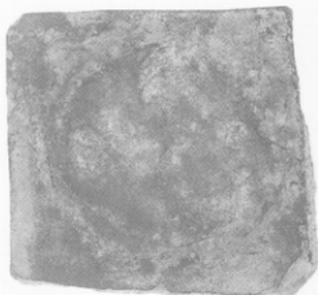
199



210



210



209



211



212

213

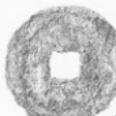
214



215

216

217



218

219

220



221



226



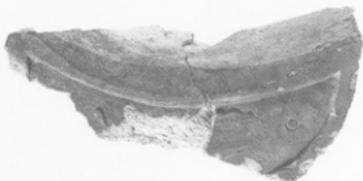
231



222



227



232



223



228



224



229



225



230



233

写真図版38

石垣解体時出土石造品



234



235



236



239



237



238



240



241



242



243



244



245



246

報 告 書 抄 録

ふりあがな	あかしじょうあと							
書 名	明石城跡							
副 書 名	県立明石公園石垣都市災害復旧事業に伴う発掘調査報告書							
巻 次	Ⅲ							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第196冊							
編 著 者 名	池田征弘・渡辺昇							
編 集 機 関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所 在 地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号					TEL 078-531-7011		
発行年月日	西暦2000年(平成12)年3月31日							
所収 遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市 町 村	調査番号					
明石城跡	兵庫県明石市 明石公園 1-27	28203	950143 960117	34度 38分 58秒	134度 59分 40秒	19950824 19951116 19960509 19960919	960㎡	県立明石公園石垣都市災害復旧事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 以 降		主 な 遺 物		特 記 事 項	
明石城跡	城跡	江戸時代	槽台 渡槽台 石垣		瓦・五輪塔			

兵庫県文化財調査報告 第196号

明石市

明石城跡Ⅲ

—県立明石公園石垣都市災害復旧事業に伴う発掘調査報告書—

平成12年3月31日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目16-12

印 刷 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39
